

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要13

2003. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要13

2003. 3

徳島市教育委員会

例　　言

- 1 本書は徳島市中徳島町に所在する徳島城下町跡の発掘調査概要報告書である。1999～2001年度にかけ
て行った調査の内、1999年度の調査を報告する。
- 2 報告書作成の費用は徳島市教育委員会の負担による。
- 3 発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
- 4 本書の編集・執筆は勝浦が行った。また、木簡の釈文については徳島市立徳島城博物館根津寿夫氏よ
り御教示を賜った。御礼申しあげる。
- 5 木器の保存処理は株式会社京都科学、株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 6 遺構写真、遺物写真の撮影は勝浦が行った。
- 7 発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて徳島市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成に係る作業には調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

北條ゆうこ 中西洋子 前田千夏 日下裕子 世直香絵子 余保美代子 近藤八恵子
佐伯俊裕 中野勝美 青木健司 吉田祐子 露口啓子 折野絵美 山口文子 澤田一人



調査位置図（国土地理院発行 1/50,000 「徳島」「川島」縮尺使用）

本文目次

例 言

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	(1)
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	(2)
第Ⅲ章 調査の結果	(4)
第1節 層序の概要	(4)
第2節 遺構と遺物	(6)
i) 第1・2層上面検出遺構と遺物	(6)
1) 土壙 SK1001・1003・1004・1007・1025～1027	(6)
2) 溝 SD1002・1003・2007・2008、掘立柱跡 SA2001	(20)
3) 井戸 SE1001・2003・2004	(22)
4) 掘立柱跡 SA2002～2005	(25)
5) 土壙 SK2066・2068	(25)
6) 土壙 SK2055・2042	(30)
7) 土壙 SK2085・2061～2063・2093・2084・2095・2043	(35)
8) 土壙 SK2112・2113・2114・2121・2127・2133・2132	(38)
9) 池状遺構 SK2108	(58)
10) 土壙 SK2072・2073・2076	(73)
ii) 第2層下面・第3層上面検出遺構と遺物	(74)
1) 貝塚 SQ3001	(74)
iii) 第4層上面検出遺構と遺物	(77)
1) 土壙 SK4105	(77)
2) 溝 SD4009	(77)
3) 不明遺構 SX4001	(77)
4) 不明遺構 SX4002	(78)
5) 土壙墓 SJ4001	(78)
第3節 調査成果のまとめ	(79)

挿図図版

写真図版

表 図 版

挿図目次

- 図1 調査地の位置（上）と調査地の配置（下）
図2 層序の概要（北壁および西壁断面図）
図3 第1層上面検出遺構
図4 第2層上面検出遺構
図5 土壌 SK1001出土遺物
図6 土壌 SK1001（23～27）、1003（28～31）、
1004（32～33）、1007（34～37）出土遺物
図7 土壌 SK1025出土遺物
図8 土壌 SK1025出土遺物
図9 土壌 SK1025出土遺物
図10 土壌 SK1026出土遺物
図11 土壌 SK1026出土遺物
図12 土壌 SK1026出土遺物
図13 土壌 SK1027出土遺物
図14 溝 SD1002（155）、1003（150～154）、2007
（156～158）、2008（159～185）出土遺物
図15 井戸 SE1001（186～190）、2003（191～208）
2004（209～215）出土遺物
図16 井戸 SE2004出土遺物
図17 土壌 SK2066出土遺物
図18 土壌 SK2066出土遺物
図19 土壌 SK2066出土遺物
図20 土壌 SK2068出土遺物
図21 土壌 SK2055出土遺物
図22 土壌 SK2042出土遺物
図23 土壌 SK2042出土遺物
図24 土壌 SK2085出土遺物
図25 土壌 SK2061（435～438）、2062（439～445）、
2063（446～457）出土遺物
図26 土壌 SK2093（458～460）、2084（461～463）、
2095（464～470）、2043（471）出土遺物
図27 土壌 SK2112出土遺物
図28 土壌 SK2112出土遺物
図29 土壌 SK2112出土遺物
図30 土壌 SK2112出土遺物
図31 土壌 SK2112出土遺物
図32 土壌 SK2112出土遺物
図33 土壌 SK2112出土遺物
図34 土壌 SK2112出土遺物
図35 土壌 SK2113出土遺物
図36 土壌 SK2113出土遺物
図37 土壌 SK2114出土遺物
図38 土壌 SK2121（662～671）、2127（672～688）
出土遺物
図39 土壌 SK2133（689～719）、2132（720～728）
出土遺物
図40 池状遺構 SK2108
図41 池状遺構 SK2108出土遺物
図42 池状遺構 SK2108出土遺物

- 図43 池状遺構 SK2108出土遺物
図44 池状遺構 SK2108出土遺物
図45 池状遺構 SK2108出土遺物
図46 池状遺構 SK2108出土遺物
図47 池状遺構 SK2108出土遺物
図48 池状遺構 SK2108出土遺物
図49 池状遺構 SK2108出土遺物
図50 池状遺構 SK2108出土遺物
図51 池状遺構 SK2108出土遺物
図52 土壌 SK2072（920～931）、2073（932～935）、
2076（936～940）出土遺物
図53 第2層下面・第3層上面および第4層上面検出
遺構
図54 員塚SQ3001（941～952）、土壌SK4105（953～956）
溝SD4009（957～960）、不明遺構SX4001（962）、
4002（961）、土壌墓SJ4001（963）出土遺物

図版目次

- 1 上：酒部家屋敷裏（土壌 SK1025～1027
と溝 SD1002・1003）
下：酒部家屋敷裏（土壌 SK1025～1027
と溝 SD1002・1003）
2 上：土壌 SK1026遺物検出状況
中：土壌 SK1027遺物検出状況
下：土壌 SK1027遺物検出状況
3 上：土壌 SK1025遺物検出状況
中：土壌 SK1025検出遺物断ち割り
下：土壌 SK1025遺物検出状況
4 上：溝 SD1002石組検出状況
中：溝 SD1002石組検出状況
下：溝 SD1003瓦・陶器組検出状況
5 上：井戸 SE1001井戸側検出状況
中：井戸 SE1001井戸側除去後
下：井戸 SE1001井戸側（最下段）と竹製打込導
水管
6 上：井戸 SE2003
中：井戸 SE2004
下：井戸 SE2004掘削状況
7 上：土壌 SK2042・2055遺物検出状況
中：土壌 SK2042断面
下：土壌 SK2055断面
8 上：土壌群（SK2084・2093・2095）遺物検出状況
中：土壌 SK2085
下：土壌 SK2085遺物検出状況
9 上：土壌 SK2112・2121遺物検出状況
中：土壌 SK2112遺物検出状況
下：土壌 SK2112遺物検出状況
10 上：掘立柱跡 SA2001
下：掘立柱桐跡 SA2002～2005
11 上：池状遺構 SK2108

	下：池状遺構 SK2108 拱状木枠と閉塞石組	44 土壌 SK2112 出土遺物
12	上：池状遺構 SK2108 遺物検出状況	45 土壌 SK2112 出土遺物
	中：池状遺構 SK2108 遺物検出状況	46 土壌 SK2112 出土遺物
	下：池状遺構 SK2108 遺物検出状況	47 土壌 SK2112 出土遺物
13	上：池状遺構 SK2108 閉塞部石組	48 土壌 SK2112 出土遺物
	中：池状遺構 SK2108 閉塞部石組除去後	49 土壌 SK2112 出土遺物
	下：池状遺構 SK2108 閉塞部礫板	50 土壌 SK2112 出土遺物
14	上：池状遺構 SK2108 閉塞石組	51 土壌 SK2112 出土遺物
	中：池状遺構 SK2108 拱状木枠	52 土壌 SK2113 出土遺物
	下：池状遺構 SK2108 拱状木枠	53 土壌 SK2113 (598・626～629)、2114 (630～643・645～659) 出土遺物
15	上：溝 SD2008	54 土壌 SK2114 (660・661)、2121 (662～666・668～671) 出土遺物
	下：貝塚 SQ3001 検出状況	55 土壌 SK2127 出土遺物
16	上：溝 SD4009	56 土壌 SK2133 (689～691・694～702・704・706・708～715・717～719)、2132 (720～728) 出土遺物
	下：土壌墓 SJ4001 墓葬人骨	57 池状遺構 SK2108 出土遺物
17	上：土壌墓 SJ4001 墓葬人骨	58 池状遺構 SK2108 出土遺物
	下：土壌墓 SJ4001 墓葬人骨	59 池状遺構 SK2108 出土遺物
18	土壌 SK1001 (1～21・23～25・27)、1003 (28～31)、1004 (32・33)、1007 (34～37) 出土遺物	60 池状遺構 SK2108 出土遺物
19	土壌 SK1001 出土遺物	61 池状遺構 SK2108 出土遺物
20	土壌 SK1025 出土遺物	62 池状遺構 SK2108 出土遺物
21	土壌 SK1025 出土遺物	63 池状遺構 SK2108 出土遺物
22	土壌 SK1025 出土遺物	64 池状遺構 SK2108 出土遺物
23	土壌 SK1025 出土遺物	65 池状遺構 SK2108 出土遺物
24	土壌 SK1026 出土遺物	66 池状遺構 SK2108 出土遺物
25	土壌 SK1026 出土遺物	67 池状遺構 SK2108 出土遺物
26	土壌 SK1027 (142～149)、溝 SD1002 (155)、1003 (150～154)、1007 (156～158)、2008 (159～164・168・171・173～178) 出土遺物	68 池状遺構 SK2108 出土遺物
27	溝 SD2008 出土遺物	69 池状遺構 SK2108 出土遺物
28	井戸 SE1001 (186～188)、2003 (191～208)、2004 (209～215) 出土遺物	70 池状遺構 SK2108 出土遺物
29	井戸 SE2004 出土遺物	71 池状遺構 SK2108 出土遺物
30	土壌 SK2066 出土遺物	72 池状遺構 SK2108 出土遺物
31	土壌 SK2066 出土遺物	73 池状遺構 SK2108 出土遺物
32	土壌 SK2066 出土遺物	74 池状遺構 SK2108 出土遺物
33	土壌 SK2006 出土遺物	75 土壌 SK2072 (920～931)、2073 (932～935)、2076 (936～940)、貝塚 SQ3001 (941～946)、土壌墓 SJ4001 (963) 出土遺物
34	土壌 SK2068 出土遺物	76 貝塚 SQ3001 (947～952)、土壌 SK4105 (953～956)、溝 SD4009 (957～960)、不明遺溝 SX4001 (962)、4002 (961) 出土遺物
35	土壌 SK2068 (305・307)、2055 (311～337・339～346・351・352) 出土遺物	77 貝塚 SQ3001 出土遺物
36	土壌 SK2055 (347～350・353～360)、2042 (361～371・373～381・383～389・395～400) 出土遺物	78 貝塚 SQ3001 出土遺物
37	土壌 SK2042 出土遺物	79 貝塚 SQ3001 出土遺物
38	土壌 SK2085 (412～431・434)、2061 (435～437)、2062 (439～445)、2063 (447～449) 出土遺物	80 貝塚 SQ3001 出土遺物
39	土壌 SK2061 (438)、2063 (446・450～457)、2093 (458～460)、2084 (461～463)、2095 (464～489)、2043 (471) 出土遺物	
40	土壌 SK2112 出土遺物	
41	土壌 SK2112 出土遺物	
42	土壌 SK2112 出土遺物	
43	土壌 SK2112 出土遺物	

表 目 次

表 1 貝塚 SQ3001 出土貝類重量表 (1)

表 2 貝塚 SQ3001 出土貝類重量表 (2)

報告書抄録

ふりがな	とくしまいぞうぶんかざいはくつちょうきがいよう							
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要							
副書名								
卷次	13							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	勝浦康守							
編集機関	徳島市教育委員会							
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	北 緯 度	東 緯 度	調 査 期 間	調査面積 m ²	調査原因	
とくしま 徳島 じょうかまちあと 城下町跡	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 なかとくしまちようち 中徳島町	36201	-	34度 15分 52秒	134度 33分 40秒	19990601～ 19991225	600	音楽ホール建 設工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
徳島 城下町跡	城下町跡	中世 近世	土壙・井戸・溝 池状遺溝・堀跡 橋跡・ピット	陶磁器・瓦 木製品・金属器				

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過（図1）

徳島市中徳島町2丁目に所在する旧徳島文化公園跡（旧動物園跡・旧児童公園跡・旧街区公園跡）は安政年間（1854～1860）の絵図である「御山下島分絵図・徳島」から徳島藩士の屋敷跡に該当する地域とされる。この敷地が音楽ホールの建設候補地となったことから、1998年10月に試掘調査を行い、遺構と遺物を確認することにより、当地の開発に際しては埋蔵文化財包蔵地として留意する必要が生じた。ただし、近代以降の諸開発や戦後の都市復興、そして、旧徳島文化公園の建設等さまざまな都市開発の流れの中での遺跡の破壊が免れきれていないのも事実であった。試掘調査の成果に基づき、敷地内で遺構の残存が良好な地区（3地区）を設定し、1999～2000年度にかけての調査計画を策定した。

1998年度にすべての建物の解体撤去が完了し、1999年度は旧徳島文化公園跡地の南西部、かつては旧動物園の広場として利用されてきた箇所で調査を実施した。近代以降の擾乱が見られるものの遺跡に与えられたダメージは少なく、遺構の残存状況は非常に良好であった。特に、徳島藩士酒部家屋敷裏で確認された池状遺構からは、廃棄された陶磁器とともに多数の荷札木簡が発見された。中でも、徳島藩における地方知行制に関する内容の木簡が含まれていたことの評価は大きい。さらに、天正15（1587）年の蜂須賀入府以前に遡る中世末期の遺構が確認され、近世徳島城下町以前の当地の状況を知る貴重な成果を得た。

1999年度の調査は500m²を対象に6～10月まで行い、10月30日に現地説明会を開催し、一般公開を図った。11～12月に荷札木簡が出土した池状遺構の全容を把握するために拡張調査を行い、1999年度の調査を一旦終了した。

2000年1月に旧動物園跡地内で再び試掘調査を行った。これは1998年度の試掘調査が旧動物園の施設の解体撤去以前であったため、通路や空地部分など建物以外の限られた箇所での試掘にとどまった経緯があることから、遺構確認のための補足調査として行った。特に、絵図との照合から敷地内に存在する徳島城惣構石垣の確認を目的として実施し、その結果、上部が壊れられているものの石垣の一部を確認した。敷地内における石垣の全容を確認するための必要性が生じたので当初の調査計画を1年延長し、2001年度まで調査を継続することでの調整を図った。

2000年度の調査は旧街区公園跡の850m²と旧動物園跡750m²の計1600m²を対象に2000年7月～2001年3月まで行った。旧街区公園跡地は徳島藩士寺澤家屋敷の表側にあたることから建物跡の存在が予想された。街区公園として利用されていたことから遺跡の残存状況は良好かと予想されたが、調査地が屋敷地表側にあたることから、近代以降、家屋の建替に伴う大規模な土地の改変が行われたと考えられ、遺跡の残存状況は不良であった。しかし、屋敷裏では廃棄土壠や井戸、また屋敷表に造られた石組池からも酒部家屋敷と同様に荷札木簡が発見された。また、徳島城下町建設に伴う造成の痕跡が認められるなどの成果を得た。

一方、旧動物園跡地での調査も擾乱が著しく見られた。寺澤家屋敷の屋敷地裏側に面する道路跡の一部を確認した。道路跡は石組の両側溝を持つ構造であるが、コンクリート補修が部分的にみられることがから、近代以降も改修使用されていたと考えられる。

2001年度は1999年度の試掘調査で明らかになった徳島城惣構石垣の調査であり、旧動物園跡地において600m²を対象に8～11月まで行った。調査は石垣基底部を確認するための旧河川（旧助任川）の掘削である。1999年度の試掘調査時に湧水が著しく排水処理の必要性を得ていたので、調査を行うにあたりウエルポイント工法を採用した。石垣上部が壊されているが、その全容や石垣底部の状況、河床への捨石の状況を確認した。

以上、1998年度の試掘調査以来、2001年度の徳島城惣構石垣の調査に至るまで、約3,000m²の発掘調査を断続的に行い貴重な調査記録と出土遺物を得た。

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境（図1）

天正13（1585）年、豊臣秀吉による四国平定後、同年、阿波国17万5千石の領主となった蜂須賀家政は阿波国入府後、ただちに徳島城の建設と城下町の整備を進める。徳島城は標高61mの城山が位置する徳島に築かれ、蜂須賀入府の翌年には城の大部分は完成したとされる。徳島城は城山山上に本丸、天守が築かれた東二の丸、西二の丸、西三の丸、山下に表御殿、西の丸御殿が置かれた平山城であり、城の周囲には助任川や寺島川などの自然河川を外堀とした防御態勢をとる。徳島城東側の徳島地区、西側の瓢箪島には武家屋敷が置かれることから、城の東と南側は堀と石垣、西側は石垣により武家地と界する。

慶長5（1600）年、関が原の合戦時には蜂須賀家政は領地を豊臣方に返還し、家政の実子至鎮を徳川方に付けることにより、同年、再び、阿波国17万5千石を拝領する。元和元（1615）年、大阪夏の陣の功績により淡路国8万2千石を加増され、25万7千石の近世大名としての基盤をつくる。以降、徳島城の石垣の拡張や補修、城下町の常三島、住吉島、富田、助任前川地区では屋敷地の拡張が進む。

明治維新後、明治2（1879）年の廃藩置県に伴い徳島城の諸施設は大手門として鷺の門を除いてすべて解体され、鷺の門も戦災により消失する。現在、当時の面影として表御殿庭園、堀と石垣だけが残る。なお、徳島城築城以前の城山周辺には至徳2（1385）年細川頼之による渭山城があったとされるが明確ではない。

一方、徳島城下町は旧吉野川下流域に形成された標高T.P.±0mを測る島状の低位沖積地を基盤とする島普請に特徴がある。徳島城下町跡は徳島城が置かれた徳島を中心に、寺島、常三島、福島、住吉島、瓢箪島、さらには周辺の助任前川、新町、富田、佐古にまで武家屋敷や町屋が広がる。徳島城下町跡は現在の徳島市街地のほぼ中心部と重複し、江戸時代の町割りを現代まで継承している。徳島城下町跡は近代以降の都市開発や戦後の復興、さらには現代における諸開発において遺跡は大規模に壊されてきた経緯があり、近世城下町跡としての認識も永く不充分であった。しかし、1990年代以降、県教委・市教委・徳島大学が城下町跡の調査に着手し、近世徳島の歴史に対し貴重な資料が蓄積され始め、今日、その調査事例は確実に増加している。

旧徳島文化公園跡の所在地は、寛永年間の「忠英様御代御山下絵図」、正保3（1646）年の「阿波國徳島之図」、寛文5（1665）年の「阿國渭津城之図」、天保3（1683）年の「阿波國渭津城下之図」においてはいずれも侍屋敷と記されており、徳島城の東側の徳島地区は当初より武家地として整備されたことがわかる。元禄4（1691）年の「網矩様御代御山下絵図」には、徳島藩士の酒部家人（酒部家3代・1800石）、寺澤源右衛門、寺澤主馬（寺澤家4代・532石余、5代・532石余）の名が記され、また、安政年間（1854～1860）に描かれた「御山下島分絵図」（徳島）にも、酒部丹後（酒部家9代・1500石）と寺澤弥次右衛門（寺澤家9代・532石余）の名が記されていることから、江戸時代を通じて屋敷替が行われることなく酒部・寺澤の両家の屋敷地であったことがわかる。

酒部家は初代が酒部勘左衛門と称し、寛永17（1640）年、2代藩主忠英に召出され、200石を給され徳島藩主となった。2代酒部舍人は中老・仕組頭・裁許奉行の役に就き1800石が給された。以後、酒部家は寄合席・小普請組頭・旗組頭などの役に就き、9代酒部丹後が1500石、宗門改奉行・年寄役に任せられている。

一方、寺澤家は初代が梯弥次右衛門と称し、3500石の仕置奉行・国奉行・安宅御用・小姓頭の役に就いている。2代寺澤主馬が530石となるが、寺澤家は小姓役・鉄砲組頭・普請奉行・町奉行などの役に就き、9代寺澤主馬が532石の町奉行の役に就いている。調査地は徳島懇構に位置することから酒部家や寺澤家のような上級藩士の屋敷が建ち並ぶ地区である。

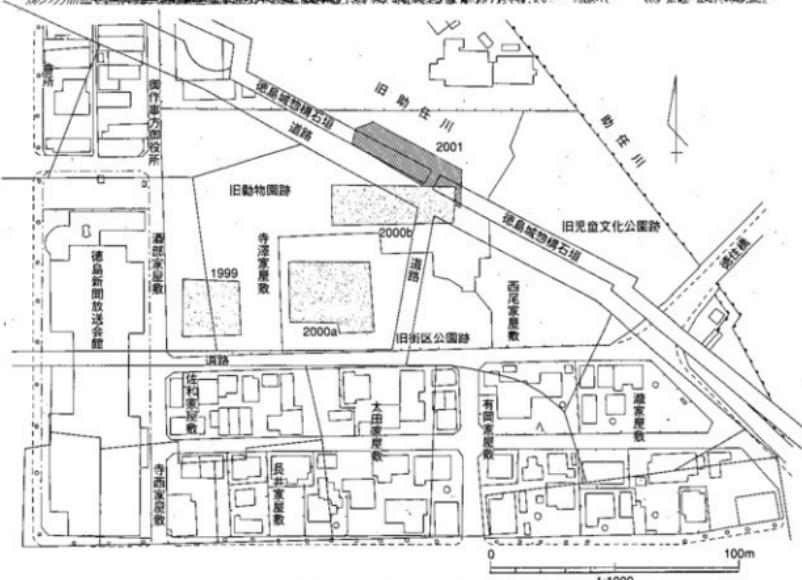


図1 調査地の位置（上）と調査地の配置（下）

第Ⅲ章 調査の結果

第1節では層序の概要を記し、第2節以降で検出された遺構と遺物について示していく。検出遺構と遺物については、良好な資料に限定し提示する。

なお、今回は1999年度の調査について報告する。2000年度以降の調査については次報告で行うこととする。

第1節 層序の概要（図2）

調査地では旧動物園跡の施設による基礎により遺構が壊されている箇所も見られたが、概ね良好な状況で地層が確認されている。城下町跡の場合、屋敷地ごとに盛土の状況が異なり、また、屋敷地内でも土地の利用状況によっては盛土の状況は一様でない。ここでは、良好な状況で地層が確認されている北壁と西壁断面を取り上げて基本層序として概要を示すことにする。

第0層：現代の盛土で層厚は40～80cmである。旧動物園の施設の基礎が深く入り込む箇所では現地表面下1.2m程度である。

第0a層：灰オリーブ色砂礫混シルトであり明治時代以降の盛土である。層厚は10～60cmで、武家屋敷廃絶後に造成された盛土層である。

第1層：にぶい黄色砂礫混シルトの整地層である。層厚20～30cmである。整地層の残りの良好な箇所での標高はT.P.+1.1mを測る。19世紀代の遺構検出面である。

第1a層：黄褐色～暗灰褐色砂礫混シルトの整地層である。層厚10～30cmである。上層との区別は明瞭ではないが、本層上面に灰白色細砂～シルトが部分的にではあるが挟在していることから、上層とは時間差をもつ整地層と考えられる。西壁断面には堆積が見られるが北壁断面には見られない。土地の改変による削平によるためか、もしくは屋敷裏側での整地の不充分さによる可能性がある。整地層の残りの良好な箇所での標高はT.P.+70cmである。

第2層：灰白～淡黄色細砂～シルトの整地層で、層厚10～20cmである。天正13（1585）年、蜂須賀入府直後の城下町建設に伴う盛土と考えられる。良好な箇所での標高はT.P.+50cmである。

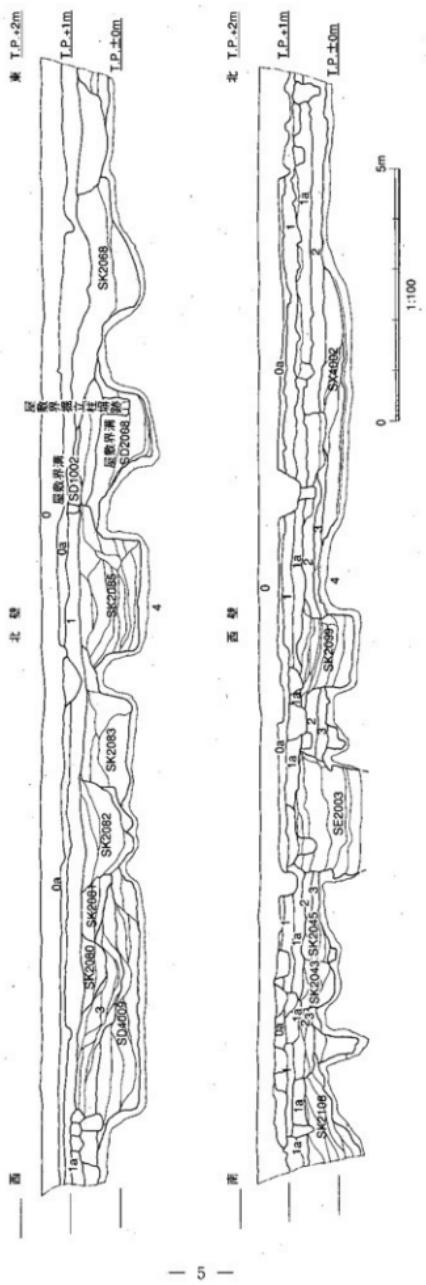
17～18世紀代の遺構を一括して検出している。本来ならば、第1層あるいは第1a層中において細分して遺構を検出するべきであるが、土地の改変が著しく検出ベース層が水平で連続しないことから、本層上面にて一括して処理した。

第3層：灰色粘土質シルトでSD4009より西側で堆積が見られる。層厚10～30cmである。溝SD4009上位には60cmを測る盛土が行われる。また、貝塚SQ3001が本層上面～中位に形成される。蜂須賀入府直前の堆積層と考えられる。

第4層：灰白色粘土質シルトの水成層で、標高T.P.+40cmで確認され、T.P.-50cm程度まで確認される。以下は、極細砂～粘度質シルトのラミナ状の構造や植物腐敗層の水平堆積、粗砂～砂礫などの粗粒な堆積物が見られ、陸化していく過程の河成堆積が確認される。T.P.-50cm程度から湧水が激しい。

調査地は地形的に城山の東側に位置することから、河成堆積において良好なシルト層が堆積し、安定した土地形成が進行した地域であると考えられる。調査地周辺は旧吉野川下流域の低位沖積地に建設された徳島城下町の中でも高所に位置するが、蜂須賀入府以前より前身的に好条件を備えていたと考えられる。今回の調査で確認された中世後期の遺構や遺物は、この地域が古くから開発されてきたことを裏付けている。

図2 層序の概要（北壁および西壁断面図）



第2節 遺構と遺物

i) 第1・2層上面検出遺構と遺物(図3・4)

現代盛土(0層)および近世盛土(0a層)除去後の第1層および第2層上面において検出した遺構と遺物である。検出遺構には徳島藩士である酒部家と寺澤家の屋敷界に設けられた溝、酒部家屋敷裏での土壙、溝、井戸がある。

1) 土壙 SK1001・1003・1004・1007・1025～1027(図3・4、図版1～3)

酒部家屋敷裏、第1層上面において土壙SK1001・1003・1004・1007・1025～1027を確認している。特にSK1026と1027は大型の廃棄土壙であり、大量の瓦・陶磁器が廃棄されている。SK1026は長辺4.4m×短辺2.5mの平面形が長方形を呈し、遺物の堆積厚が60cmを測る。SK1027は長辺3.6m×短辺2.2mの平面形が長方形を呈するが、搅乱と重複し土壙上位が削平されている。SK1025は長辺3m×短辺2.4mの平面形が不整形形を呈し、遺物は土壙掘形の肩部～底部の形状に貼付くようレンズ状に廃棄され、堆積厚は20cmを測る。上位は人為的な埋土で覆われる。一方、SK1001・1003・1004・1007はいずれも形状が小規模で遺物も少量であり、SK1025～1027のような大量廃棄を目的とした土壙ではない。

これらの廃棄土壙からは19世紀後半の陶磁器類が出土しており、幕末から明治にかけて武家屋敷の改変に伴い廃棄されたものと考えられる。

以下、出土遺物の概要を示す。

SK1001(図5・6、図版18・19)

肥前系磁器碗1～3、蓋11、筒形容器19、皿20・21、仏飯器23、瀬戸美濃系磁器碗4～10、蓋12～14、甕26、陶器蓋15～17、京信楽系水滴18、土師質七厘22、大谷焼灯明具24・甕25・徳利27がある。

1～3は染付であり、1は草花文と雷文、2は「壽」字が外面と見込みに配され、焼継痕と底部外面に焼継師が施した記号がある。3は広東碗である。

4～10は端反であり、5～7は口銹である。11は碗1とセットである。12～14は端反である。

15は行平鍋蓋であり、トビガンナが施される。16・17は土瓶蓋で亀形の摘みを付す。

18は上面に陽刻菊花文、高台以外に灰釉を掛け貰入が入る。19は筆立である。

20は唐草文と蜻唐草文、見込に松竹梅文を描く。21は型押成形であり、底部外面に「富貴長春」銘がある。

22は底部外面以外に柿釉を施し、胴部下位に長円形の空気窓をもつ。底部に四足を貼付け、内面中位やや下に鋸状の受口があり、内面口縁部下に3箇所の受口を貼付ける。口縁部上面および内面に煤が付着する。

23は赤絵が施される。26は玉線状の口縁、見込みに6点の胎土目痕がある水甕である。墨付を除く底部外面に鉄釉、内外面に灰釉の上に緑釉を掛ける。

SK1003(図6、図版18)

瀬戸美濃系磁器碗28、肥前系磁器碗29、蓋30がある。

29は見込みに蛇ノ目釉剥と五弁花が施される。

SK1004(図6、図版18)

珉平皿32・33がある。32・33は黄色釉で見込みに陰刻龍が施される。

SK1007(図6、図版18)

肥前系磁器蓋物34、大谷焼徳利35、珉平碗36、陶器蓋37がある。

34は型紙刷の基筒底である。35は白泥による「森六」銘がある。36は黄色釉である。

37は摘みの上端と天井部内面を除き灰釉が掛けられ、外面に圓線陰刻が廻る。



図3 第1層上面検出遺構

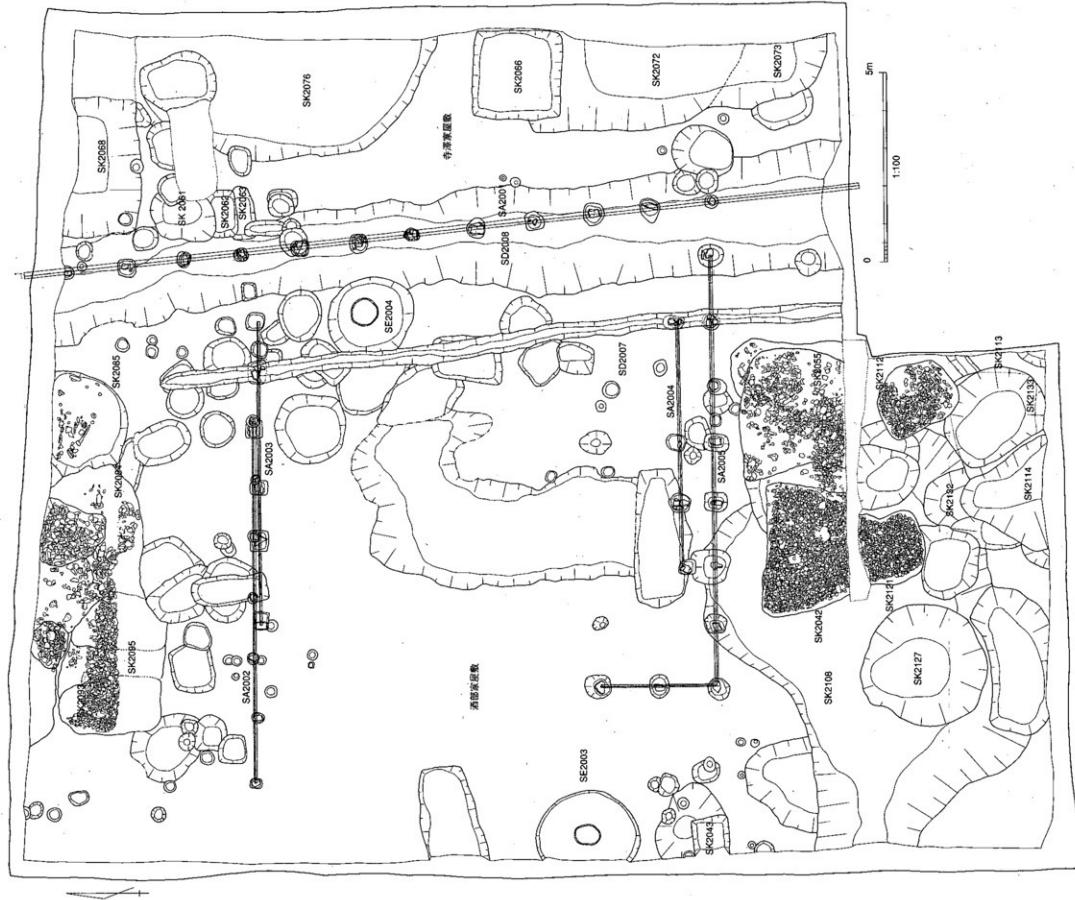


図 4 第 2 図上面検出遺構

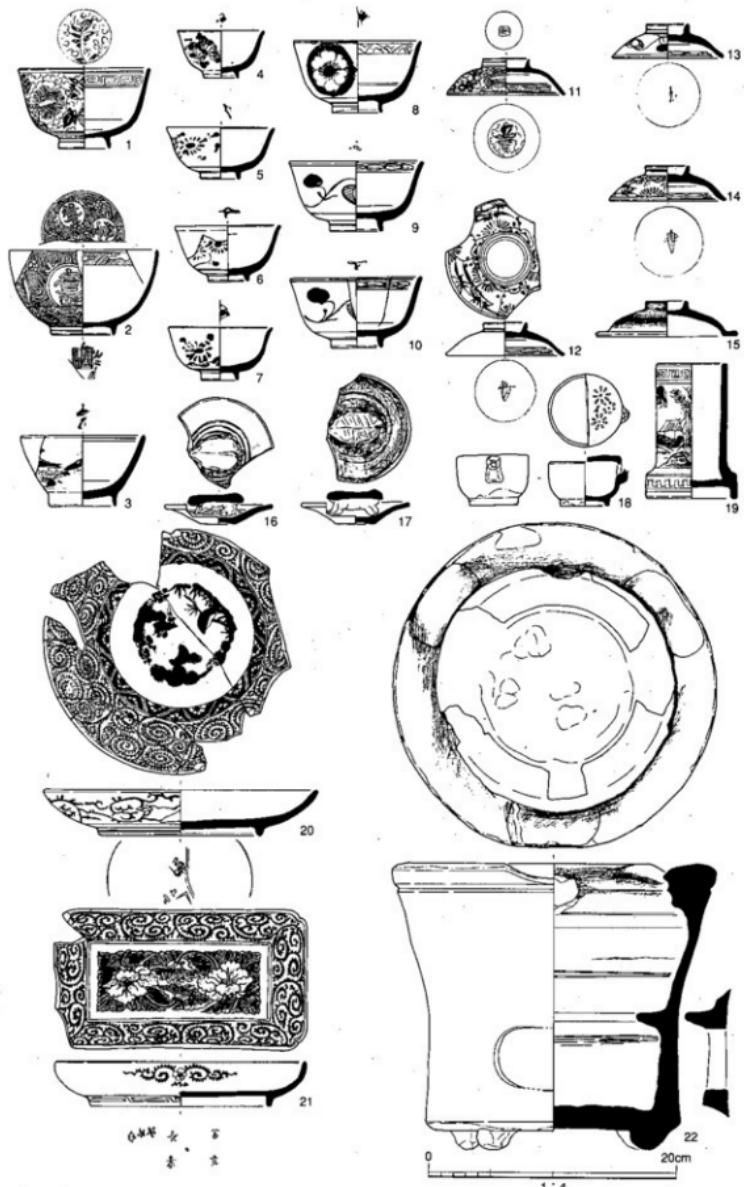


図5 土壤 SK1001出土遺物

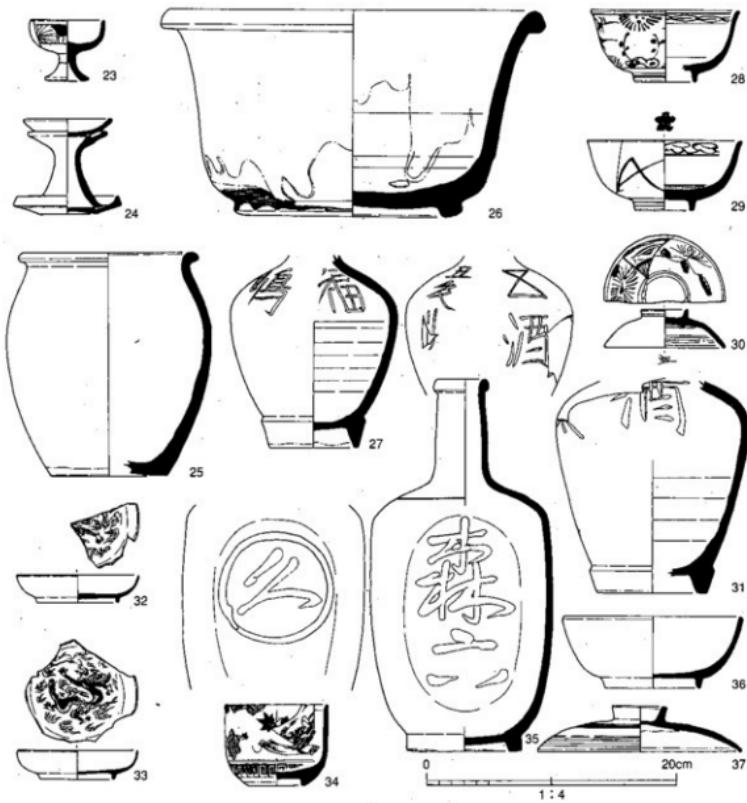


図6 土壌SK1001(23~27)、1003(28~31)、1004(32・33)、1007(34~37)出土遺物

SK1025(図7~9、図版20~23)

肥前系磁器碗38・40・48、小坏44・45、湯呑碗41・42・43、蓋49・50、鉢56、香炉59・60、瀬戸美濃系磁器碗39・46・47、皿58、陶器蓋51~53、京信楽系碗54、蓋物55、土瓶67・68、大谷焼鉢59、瓶70、徳利71~73、土師質ゴマ煎り器61、焙烙69、泥面子62~64、土人形65、堺明石系擂鉢66、瓦質焼炉74、竈76、土師質涼炉75がある。

38・39・46~48・49は染付の端反である。51・52は土瓶蓋であり、51は浅橙色の胎土に白化粧土を掛け、鉄釉と緑釉で捺字文を施す。52は外面鉄釉に白イッチンを掛ける。

53は蓋物の蓋であり、55とセットになる。54は高台無釉の注連繩文碗である。55は口縁上面を釉剥し、体部下位~高台が無釉、外面は灰釉に2条帶線を鉛釉で廻す。見込みに3点のハリ目跡がある。

56は蛇ノ目凹形高台であり、焼継痕と底部外面に焼継師が施した記号がある。58は型打成形であり、内外面に化粧土のハケ目を施す。



図7 土壙 SK1025出土遺物

59・60は青磁香炉であり、59は高台無釉、三足を付す。60は蛇ノ目高台であり、壺付無釉、底部を穿孔し、植木鉢に転用している。59・60の見込みにはアルミナ砂が付着している。

61はシャモジ形で柿釉が施され、長円形の窓が開く。66は見込みに放射状の擂目がある。67は灰釉に白イッチン掛け、68は鐵釉に白イッチン掛けである。69は折縁状の口縁部をもち、体部は指頭圧痕が顕著である。

71は肩部に「岡 二丁目 通 イテ」、72は「森 横 辰冬 次」、73は「て 三丁目 通 イ冬」の文字印刻、71と73は頸部と体部の境界に◇の記号がある。

74は円筒形の火口部が下方から臺形状に削られた火窓を設け、ここに方形の突出部を接合した形状を呈する。火口部外面上位に1条沈線、火口部内底面にはハケ、底部には高台が筋状に3本貼付ける。

75は円筒形の体部に橢円形の火窓を設け、内部施設には2箇所段違いに窓が設けられる。体部外面に横方向のケズリが施される。高台は底部は3箇所のアーチ状の削出により作られ、底部外面にもケズリ痕が顕著である。内面に方形状の受けを貼付け、口縁部に若干の煤の付着がみられる。正面火窓の上位左右に「松湯」「群泉」、下位に「ふかくさ」の文字がある。

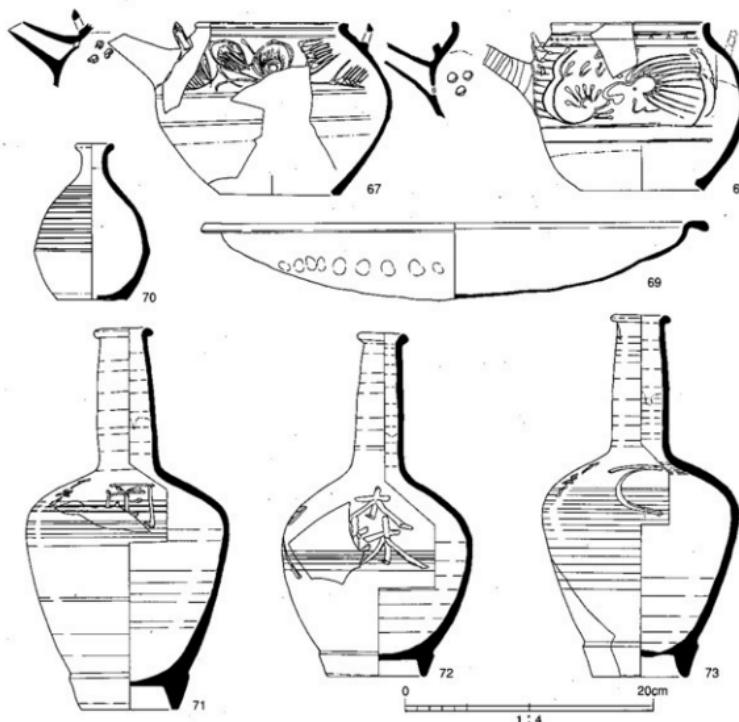


図8 土壙SK1025出土遺物

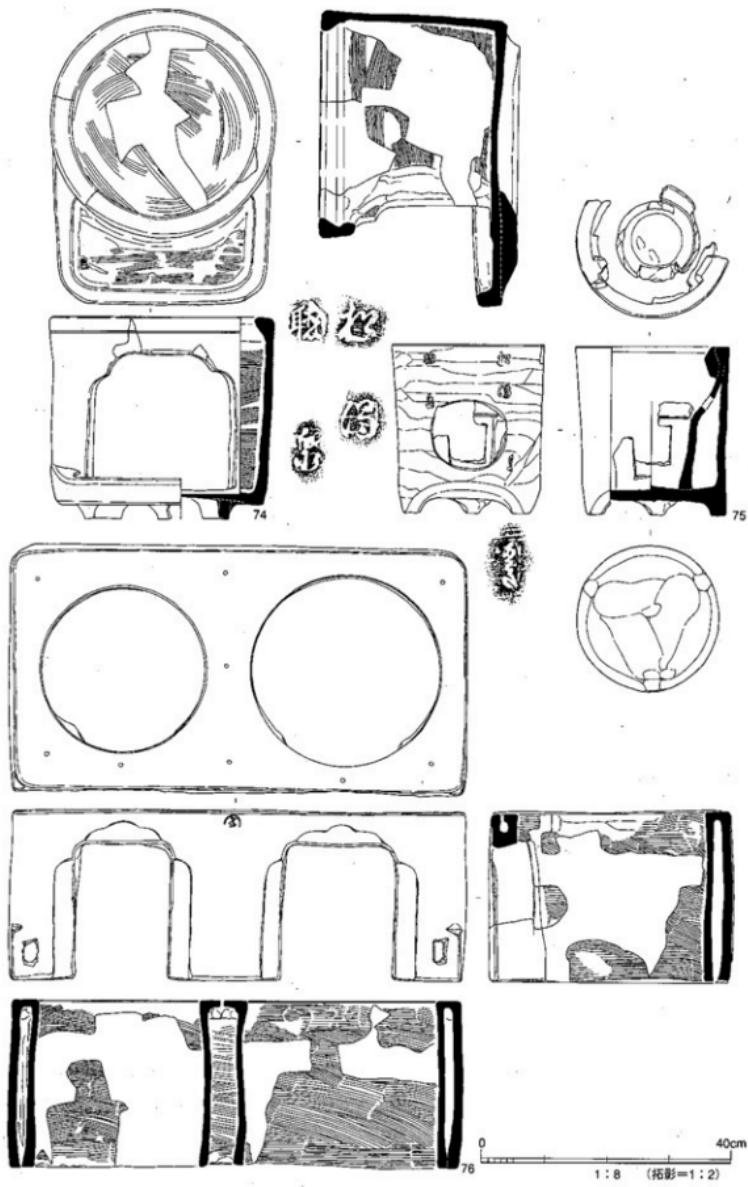


図9 土壙 SK1025出土遺物

76は2窓式の竈であり、側部と内部を別々に型作り成形し貼り合わせた中空の二重構造である。火口部の口径は26.5cmと30cmの大小を測る。火炊窓の寸法は縦21cmであるが、幅は火口径の大小に伴い15cmと18cmを測る。火炊窓は下方から△形に切られ、窓の外周には雲形状の装飾が施される。側部の隅角は丸みを帯びるが、正面両脇下端のみ方形に仕上げられ、竈下部灰溜め用施設との接合に使ったと考えられる付属品を挿入するための枘穴が設けられる。上面には火口の周囲に径7mmの小穴が9箇所あり、正面中央上位に刻印がある。側部外面はミガキ、火口部外面はハケ、火炊窓はケズリが施される。側部外面には煮沸汁の痕跡がある。

SK1026 (10~12、図版24・25)

肥前系磁器碗77~79、81~86、蓋物80、蓋88・89、小壺90・91、皿92、仏飯器93~96、萩焼碗97、京信楽系蓋物98、碗99~101・103、鉢104、燭台116、陶器蓋105、瀬戸美濃系陶器碗102、壺114、植木鉢115、磁器碗106~110、112・113、鉢114、血120、関西系磁器碗114、燭台117、備前灯明皿121、灯明受皿122・123、京信楽系灯明受皿124、瀬戸美濃系台付灯明受皿125、土師質秉燭126~129、大谷焼灯明具130~132、瓶133、堺明石系擂鉢134・135、軒丸瓦136~141がある。

77~79、81~86は染付であり、79は焼継痕と底部外面に焼継師が施した記号がある。86は見込み團線内に文様を施す広東碗である。79・81・83・85は端反である。

88は見込みに櫻文、89は内面口縁部に雷文、見込みに松竹梅文を描く。

91は白磁で疊付無釉である。

92は蛇ノ目凹形高台で疊付無釉であり、内面に蛸唐草文、外面に唐草文が施される。

93~96は底部無釉であり、93は菊花文、94~96は蛸唐草文を描く。

97は高台がハの字状、高台内渦巻きの小碗であり、外面にビラ掛けが施される。

98は高台と蓋受部が無釉であり、体部は灰釉に外面に2条の帯線を錆釉で廻す。

99~101は注連縄文碗である。99・101は高台無釉であり、100は色絵、99・101は錆絵である。99・101は灰白色の硬質の胎土であり、簡素化された注連縄が描かれる。

102は高台疊付無釉の太白焼である。104は型打成形で底部に「清」の刻印がある。

105は白化粧土に鉄釉と錆釉の捻子文を施し、内面無釉である。

109は口縁内面に四方櫻文が廻り、見込みに草花文を描く青磁碗である。

110・113は赤絵が施される。118は蛇ノ目凹形高台で疊付無釉である。

120は型押成形の白磁皿であり、内面に花文陽刻が施される。

121は底部同心円ケズリで口縁部に燈油痕が付く。

122・123は胎土が赤褐色を呈し、底部同心円ケズリを施す。口縁端部より低い仕切りをもち、1箇所に切り込みを入れる。124は外面無釉である。

125は皿の中央部に外上方に直線的に立ち上がり、円筒状の台を貼付ける。外面に釉こぼれがみられるが無釉である。

126・127は土師質無釉であり、126は灯芯用の突起に燈油痕がある。

128・129は土師質の胎土に柿釉が施され、底部に固定用の小孔があり、129の灯芯用の突起に燈油痕がある。

130~132は底部無釉であり、131・132の皿受けの仕切りには1箇所切り込みがある。

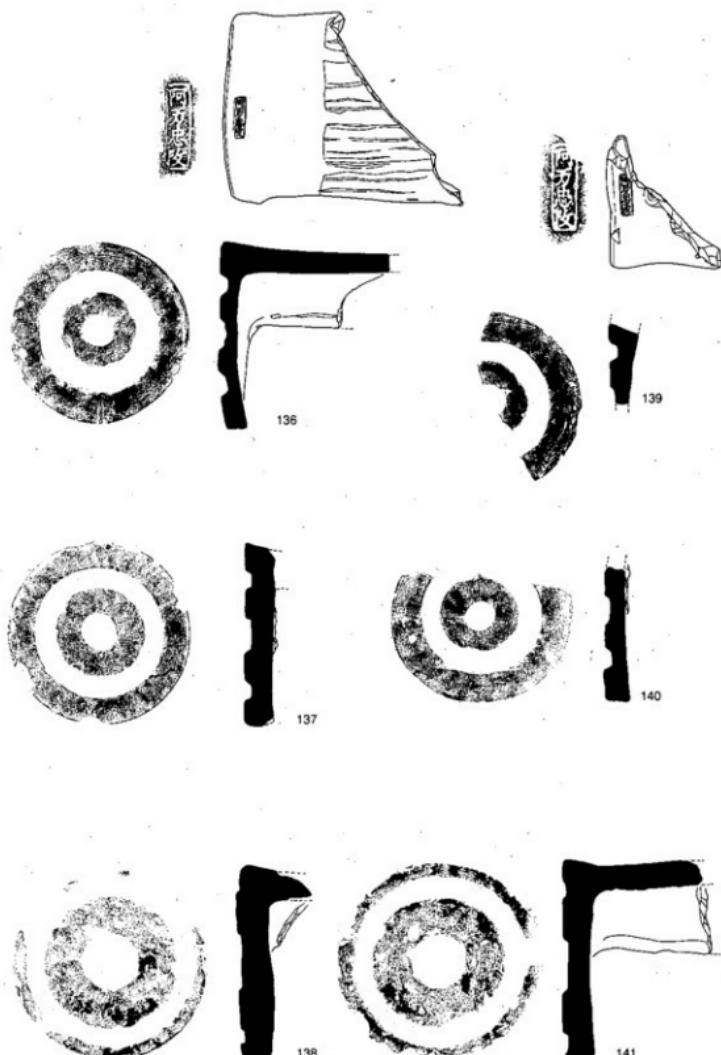
133は肩部の屈曲が緩やかで轆轤痕が顯著であり、底部無釉である。

134・135は胎土が赤褐色を呈する。口縁部内面の突帶が端部よりやや下がった位置にあり、突帶上下に浅い凹線が廻る。縁帶部外側への張り出しが強く断面形が三角形を呈する。134は見込みに三角形状、135は放射状の瘤目がある。

133は136~141は酒部家の家紋である蛇ノ目文の軒丸家紋瓦である。136には「阿万忠政」の刻印がある。



図10 SK1026出土遺物



0
20cm
1:4 (刻印拓影=1:2)

图11 SK1026出土遗物

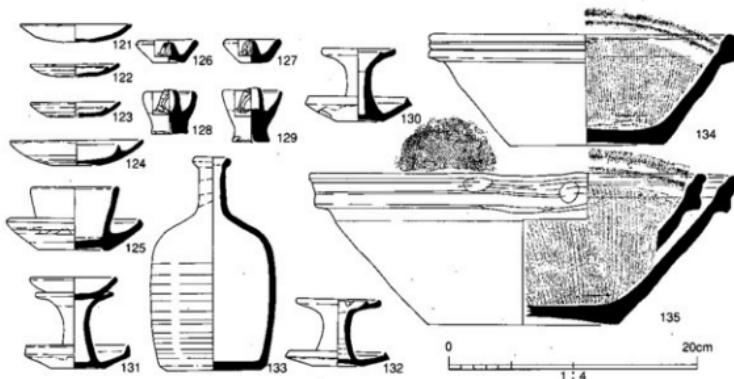


図12 SK1026出土遺物

SK1027 (図13、図版27)

肥前系磁器小壺142、皿145、瀬戸美濃系磁器碗143・144、皿146、瀬戸美濃系陶器皿149、京信楽系碗147、堺明石系擂鉢148がある。

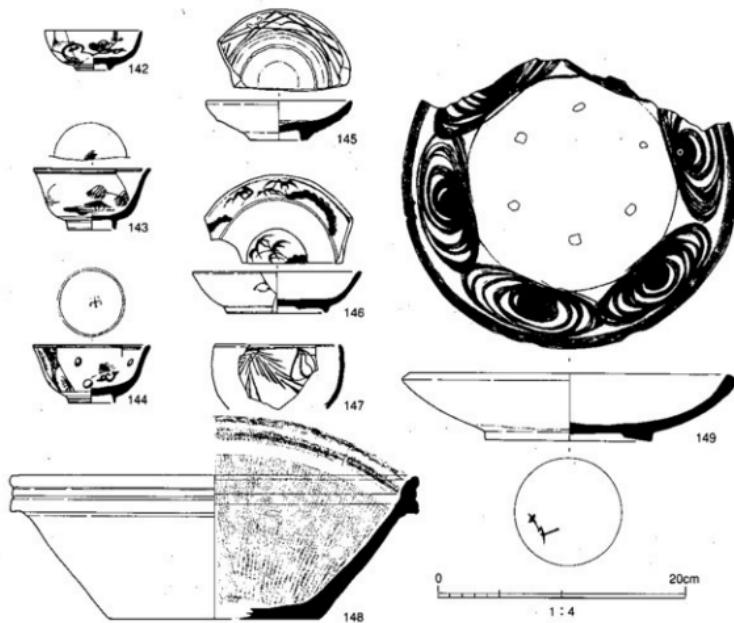


図13 SK1027出土遺物

142～143は染付であり、143・144は端反である。見込み圈線内に文様を描く。

145は見込み蛇ノ目釉剥であり、畳付に離れ砂が付着する。146は蛇ノ目凹形高台で畠付無釉である。見込みには松竹梅文を描く。

147は説絵の簡素化した注連繩が描かれる。

148は胎土が赤褐色を呈し、口縁部内面の突帯の上位に沈線、下位には幅広の凹線が廻る。縁帶部外側への張り出しが強く断面形は三角形を呈する。

149は見込みに6点の胎土目痕がある馬目皿であり、底部無釉、高台内部に墨書の痕跡がある。

2) 溝 SD1002・1003・2007・2008、掘立柱塀跡 SA2001 (図3・4、図版4・10・15)

第1層上面において、酒部家屋敷と寺澤家屋敷の屋敷界部にSD1002・1003の2条溝を確認している。絵図との照合からも位置的に屋敷界の溝と考えられる。SD1002・1003は共に幅20cm、深さ20cmを測る石組溝である。石組は1～2段を確認しているが、上位については不明である。石材には結晶片岩を多用しているが、砂岩も混在する。また、両溝とも屋敷の南側では溝内面の面合わせをするなど比較的丁寧な積み方がみられるが、屋敷の北側では石組の欠落する箇所やSD1003では瓦・陶器片を石組みの代替としている箇所がある。溝の構造・規模から屋敷地を区画する溝よりも本来、溝に並行して存在した可能性のある構造物(塀)の付属的な要素としての雨落溝や排水溝としての機能が考えられる。これらの溝については、19世紀代に使用されたものと考えられる。

第2層上面ではSD2007・2008、掘立柱塀跡SA2001を確認している。いずれも位置的に前述したSD1002・1003の下位にあたることから、SD1002・1003以前に酒部・寺澤両屋敷界で機能していたものである。

SD2007はSD1003の下位に位置し幅40cm、深さ10cmを測る素掘溝であり、SD1003の前身遺構と考えられる。

一方、SD1002の下位には溝ではなく、掘立柱塀跡SA2001が存在する。SA2001の柱穴掘形はいずれも径40～50cmの不整円形を呈し、底部には結晶片岩の礎板石をもつ。柱間寸法は北から1.50m-1.50m-1.50m-1.50m-1.50m-1.80m-1.50m-1.50m-1.50mの11間分を検出している。SA2001の構築時期は併走するSD2007より古く18世紀前葉と考えられるが、後に両者は18世紀後葉には共存し、やがて上層のSD1002・1003の関係に継承されるものと考えられる。

また、SA2001以前には同位置に溝SD2008が存在する。SD2008は幅2～2.5m、深さ1.2mの断面形が逆台形を呈し、酒部・寺澤両屋敷界に最初に掘削された溝である。溝の底部に層厚10cm程度の水成堆積層が見られるが、埋土の堆積状況と出土遺物から17世紀後葉に人為的に埋め戻されたと考えられる。屋敷界溝ではあるが、その規模から中世的な土地区画溝としての様相が強く、後に存在するSD1002・1003・2007とは機能を異にするものと考えられる。

以下、出土遺物の概要を記す。

SD1002 (図14、図版26)

瀬戸美濃系陶器皿155がある。155は馬目皿である。

SD1003 (図14)

肥前系磁器碗150・151、筒形碗153、瀬戸美濃系磁器碗152、蓋154がある。

150～153は染付であり、150・151は廣東碗、152は端反である。

153は口縁内面に四方櫛文が廻る。

SD2007 (図14、図版26)

肥前系磁器碗156、京信楽系碗157・158がある。

157・158は高台無釉で体部屈曲部～高台にカンナ痕があり、同一個体の可能性がある。

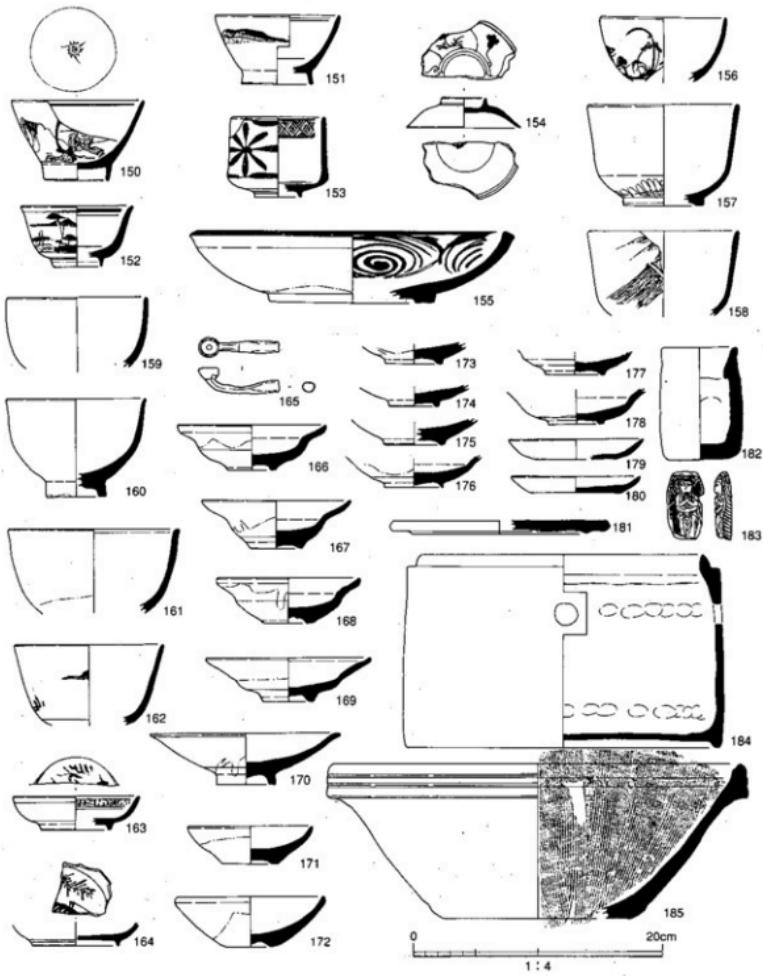


図14 SD1002 (155)、1003 (150~154)、2007 (156~158)、2008 (159~185) 出土遺物

SD2008 (図14、図版26・27)

肥前系陶器碗159~162、皿166~178、磁器皿163・164、銅製煙管雁首165、土師質皿179・180、備前蓋181、焼塙壺182、土人形183、瓦質行火184、備前擂鉢185がある。

159は呂器手、160は高台内無袖、162は陶胎染付である。

163は疊付無袖、164は高台に離れ砂が付着している。

171・172は高台から口縁部にかけて緩やかに彎曲した胴部をもち、170は高台から胴部が伸び口

縁部が外反する。167・168は胴部が屈曲し口縁部に至り、169は口唇部に溝を廻す。高台脇から口縁部にかけて横方向の削りを行い高台は露胎であり、高台内には円錐状の突出した削り残しが見られる。166～168・172・177・178の見込みには胎土目、169・170・173～175の見込みには砂目の痕跡がある。

172の口縁部には燈油痕があり、灯明皿に転用している。

184は円筒形の胴部に2箇所に円形の通気孔を穿ち蓋の受口があり、胴部にはヘラミガキが施される。

3) 井戸 SE1001・2003・2004 (図3・4、図版5・6)

酒部家屋敷裏、第1層上面において井戸SE1001、第2層上面においてSE2003・2004を検出している。

SE1001の掘形は長径1.6m、短径1.2mの長円形を呈し、井戸側の直径は60cmである。井戸側は桶積上であり、桶上下2箇所が竹製の簾で締められている。下位3段分を確認し上位は腐食して残存しない。下位2段目の井戸側は桶の栓が詰められた状態である。なお、井戸側内には竹製の導水管が打ち込まれており、明治以降の使用・廃絶と考えられる。

SE2003の掘形は長径2.7m、短径推定2.3mの楕円形を呈し、井戸側は長径70cm、短径50cmの楕円形である。井戸側は桶積上であるが埋土をすべて掘りきれず、桶積上については2段を確認したが下位の残存状況は不明である。上位は腐食し残存しない。

SE2004掘形は長径2.4m、短径2mの楕円形を呈し、井戸側は径70cm円形である。井戸側は桶積上であり、桶上下2箇所が竹製の簾で締められている。下位2段分を確認し上位は腐食し残存しない。

屋敷裏で検出した3基の井戸は、SE2003→2004→1001の変遷を示す。

以下、出土遺物の概要を記す。

SE1001 (図15、図版28)

掘形より肥前系磁器蓋物186・蓋187、堺明石系擂鉢190、井戸側内より京信楽系碗188、土瓶189がある。

186は口唇部無釉、188は灰釉に鉄釉を口縁部外面から内面に掛け、体部にはトビガンナが施される。190は見込みに三角形状の擋目が施される。

SE2003 (図15、図版28)

掘形より肥前系陶器皿197、陶器水注201、瓦質羽釜206、井戸側内より中国製磁器皿191・192、瀬戸美濃系碗193、肥前系陶器皿194～196、198～200、焼塙壺蓋202、土師質皿203・204、瀬戸美濃系向付205、丸瓦207、軒平瓦208がある。

191・192は景徳鎮窯である。193は鉄釉の天目碗である。

195・196・199は高台から緩やかに彎曲する胴部をもち、197は高台から上方に立ち上がり口縁部が外反、198は胴部で屈曲し口縁部に至る。200は内面に鉄絵が施される。

202の口縁部には燈油痕があり、灯明皿に転用している。203の口縁部にも燈油痕がある。

205は織部焼、206は口縁部外面にナデによる擬凹線、内面ハケ、鈎下の体部に煤が付着する。

207はコピキAの丸瓦、208は青海波文の軒平瓦である。

SE2004 (図15・16、図版28・29)

掘形より肥前系磁器小壺209、筒形碗210、京信楽系鍋212、陶器215、214東播系練鉢、井戸側内より陶器鉢211、肥前系磁器碗213、木簡216～219がある。

209は赤絵、210は青磁染付であり、口縁部内面に四方櫛文が施される。

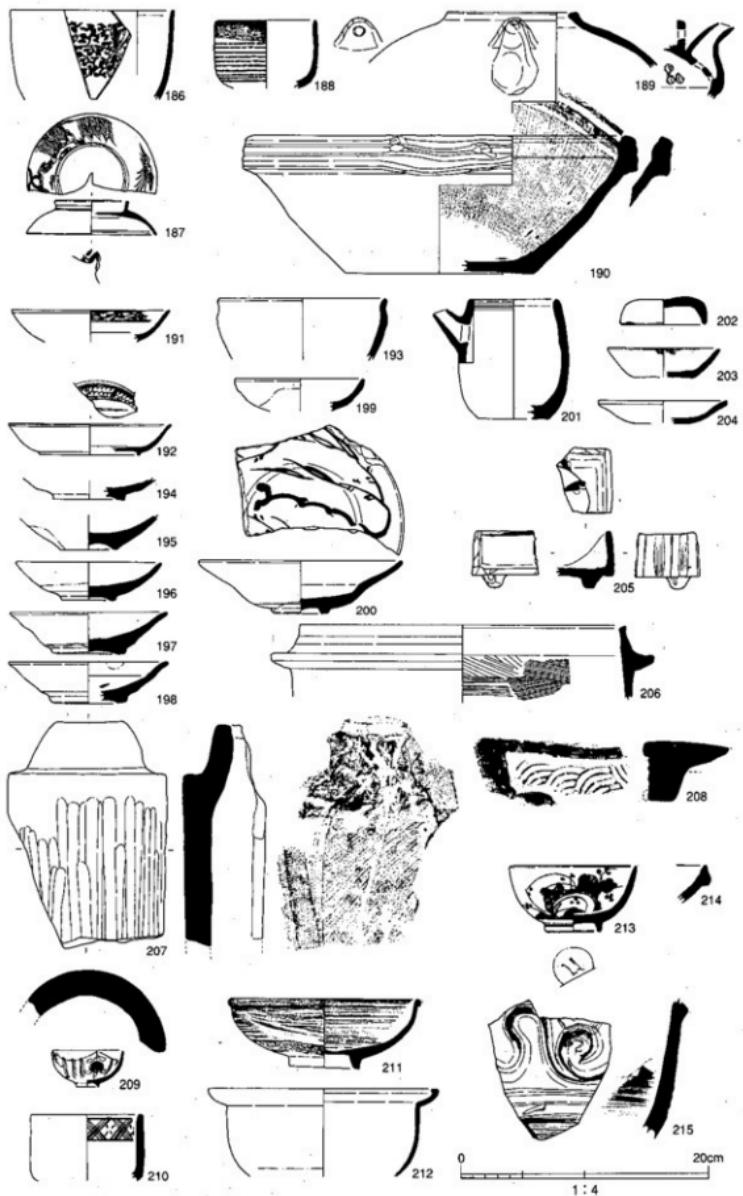
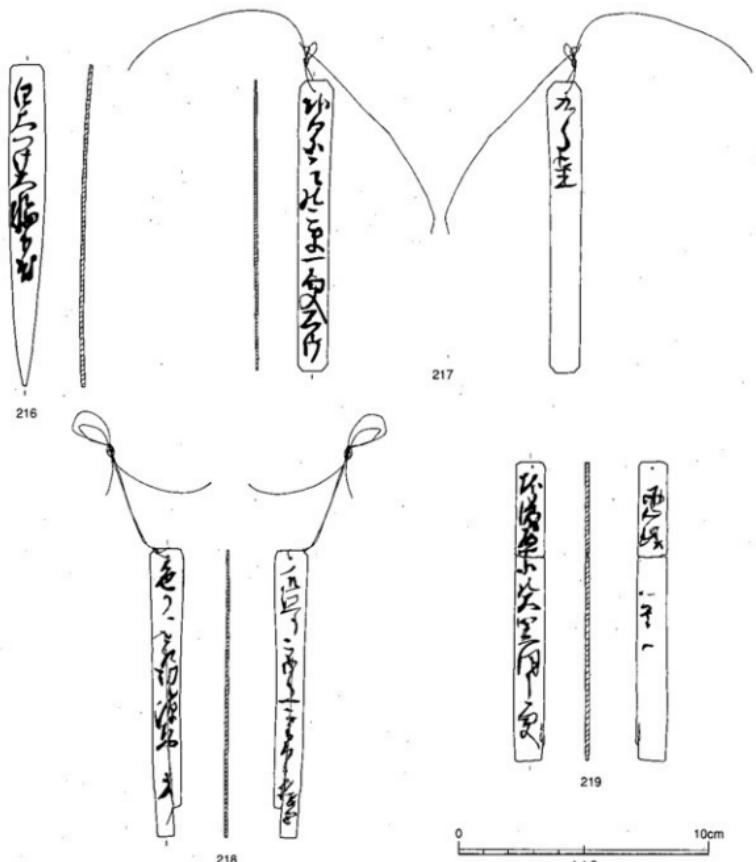


図15 井戸SE1001 (186~190)、2003 (191~208)、2004 (209~215) 出土遺物



第16図 井戸SE2004出土遺物

211は玉縁状口縁であり、白化粧土のハケ目文が施される。高台無釉で、見込みは蛇ノ目釉剥で重ね焼きの痕跡がある。

212は鉄釉が掛かる。

214は口縁部が上下に拡張する東播系須恵質練鉢であり水流転磨を受けている。

216は・「白大つけ大輪下花」

126×14×2

217は・「。地白に紅花□□（こまか）一面入□竹」・「。九□（ぬか）□」

115×12×1

218は・「。色□□□（岩カ）切レ 深右衛門」

・「。□烟り□□□」

114×13×1

219は・「。地□栗□能大黒□□面入」

・「。□□□」

(119)×12×1

*長×幅×厚(mm) ()付きは残存値

217・218には荷に括り付けるための棕櫚紐が付いている。

4) 掘立柱柵跡 SA2002～2005 (図4、図版10)

酒部家屋敷裏、第2層上面において検出した掘立柱柱穴である。SA2002～2003は直線、2004はL形を呈する。SA2002の柱穴掘形は径30cmの円形、SA2003は一辺40cmの方形、SA2004は一辺40～50cmの不整形、SA2005は径50～60cmの不整形を呈する。柱穴底部には結晶片岩の礎板石がみられる。SA2002と2003、2004と2005の関係において造り替えがある。後述する第2層上面検出の廃棄土壙が柵の北と南側で集中してみられることから、屋敷裏における物資廃棄場所の目隠し的な役割を果たしたものと考えられる。前述した溝SD2007と平面交差の関係があることから、掘立柱柵跡SA2001が屋敷界として機能していた時期以降において、溝SD2007の存在時には柵の造り替えが考えられる。

5) 土壙 SK2066・2068 (図4)

寺澤家屋敷端、第2層上面において検出した廃棄土壙である。SK2066は平面形が一辺2.3mの方形を呈する。また、SK2068は調査地外に広がり全容は不明であるが一辺3.5mを測る。寺澤家屋敷裏は明治以降と考えられる土地の整地改变が著しく、本来は第2層より上位から切り込む遺構があり、18世紀後葉～19世紀代の廃棄土壙と考えられる。

以下、出土遺物について概要を記す。

SK2066 (図17～19、図版30～33)

肥前系磁器碗220・222～232、小壺221、蓋物233～235、皿236・237、蓋238～244、鉢276、仏飯器263、肥前陶器火入れ275、瀬戸美濃系磁器蓋245、碗246～250、皿260・261、火入れ262、瀬戸美濃系壺280、鉢281、植木鉢282、京信楽系碗251～257、蓋258、皿259、灯明受皿269、土瓶273、陶器蓋264～266、備前灯明皿267、灯明受皿268、鉢277・284、土師質秉燭270・271、土師質ミニチュア羽釜272、火鉢279、焜炉286、瓦質土瓶274、羽釜278、堺明石系擂鉢283、大谷焼鉢285がある。

220・222は白磁である。

223・224は撥高台を呈し、四方櫛文と見込みに二重圓線が廻る。225の底部外面には二重方形枠内「福」鉛、焼継痕がある。

226は小広東碗、227・228・232は広東碗である。

229は見込みに「壽」字と一重圓線、外面は菊花氷文埋めで疊付に砂が付着する。230は見込み松竹梅文と一重圓線、231は見込みに降灰、疊付に砂が付着する。

233・234は疊付と口縁部が無釉、234の見込みには円形釉剥がみられる。235は焼継痕があり高台無釉である。

236は輪花型打で高台無釉である。

238は碗224とセットで、天井部内面に二重圓線と一重方形枠内渦鉢、口縁部には四方櫛文が廻る。240は碗232とセットである。241は端反、243は碗225とセットである。

251は高台無釉で高台内に円刻がある。252は疊付無釉であり、鉄釉と白化粧土による文様が施される。253～257は小杉碗である。253・255は高台無釉であり、253・255・256の胎土は灰色、254・257は淡黄白色を呈する。258は土瓶蓋で外面に灰釉を掛ける。

259は内面に3条陰刻沈線がある。261は輪花型打の灰釉斐皿である。262は透明釉に鉄絵を施し、底部と内面が無釉である。

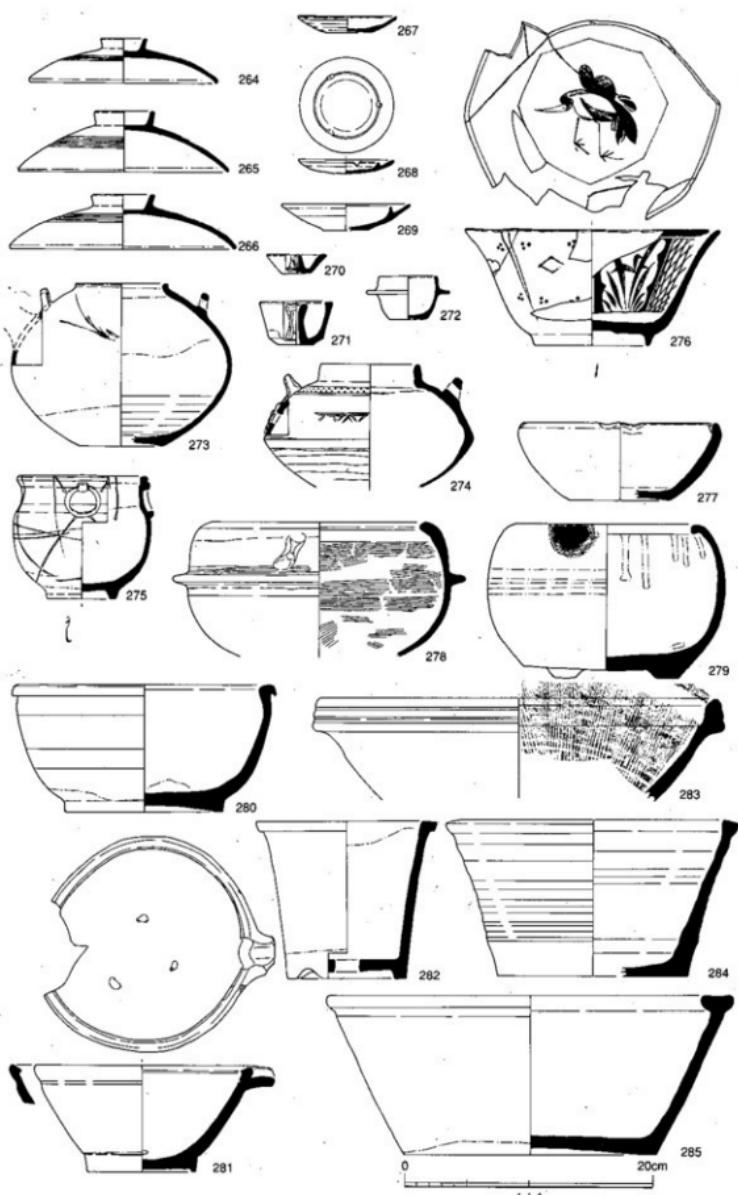
264～266は外面に圓線陰刻が廻り、264の口縁端部内面には燈油跡がみられ、灯明皿転用の可能性がある。267は口縁部内外面に燈油痕がある。

271は鉄釉を掛け、底部外面には固定用の小孔がみられる。

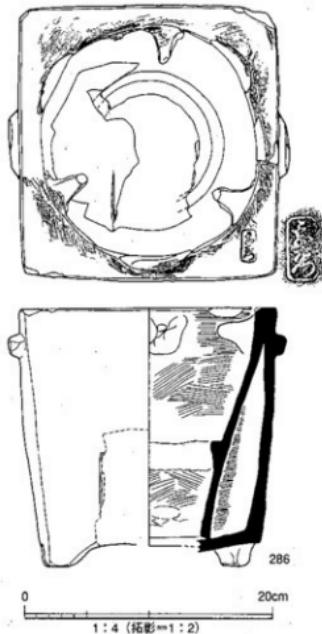
273は口縁部と同部下位～底部無釉の灰釉土瓶である。



第17図 土壌SK2066出土遺物



第18図 土壌 SK2066出土遺物



第19図 土壤 SK2066出土遺物

275は高台無釉で左右に輪状釣り手を貼付けている。

276は内型成形の蛇ノ目凹形高台で疊付無釉、焼継痕があり、底部外面に記号がみられる。

279は白化粧土を掛け、底部に3箇所高台を貼付ける。

280は見込みに5箇所の胎土目跡があり、底部無釉の灰釉壺である。281は見込みに3点胎土目跡があり、高台無釉の片口鉢である。注口は口縁部から切り込まれ断面U字形を呈する。

286は粘土板成形で橙色の胎土である。4足と両側に取手、出窓の空気窓、円筒形の内部施設、上端3箇所に四角錐形の受けを貼付け、上面隅に二重方形枠内に刻印が施され、上面全体に煤の付着が顕著である。

SK2068 (図20、図版34・35)

肥前系磁器碗287~289、蓋291・295~297、火入れ298、中国磁器皿290、京信楽系碗292~294、瀬戸美濃系碗299、火鉢307、灯明具301、備前壺300、大谷焼小壺302、陶器皿303、焰燈304・309、土師質風炉305、陶器土瓶306、土師質秉燭308、堺明石系擂鉢310がある。

287~289は染付であり、288の見込みにはコンニャク印判による五弁花がある。

290は景德鎮窯で疊付無釉である。

291は青磁染付で内面天井部には二重圓線とコンニャク印判による五弁花、高台内には二重方形枠内に渦福鉢がある。

295~297は染付蓋である。292は高台無釉で全体に貫入がある。

293は注連繩文碗である。灰白色の胎土に小さな高台を削り出し、高台の際まで灰釉が掛けられ

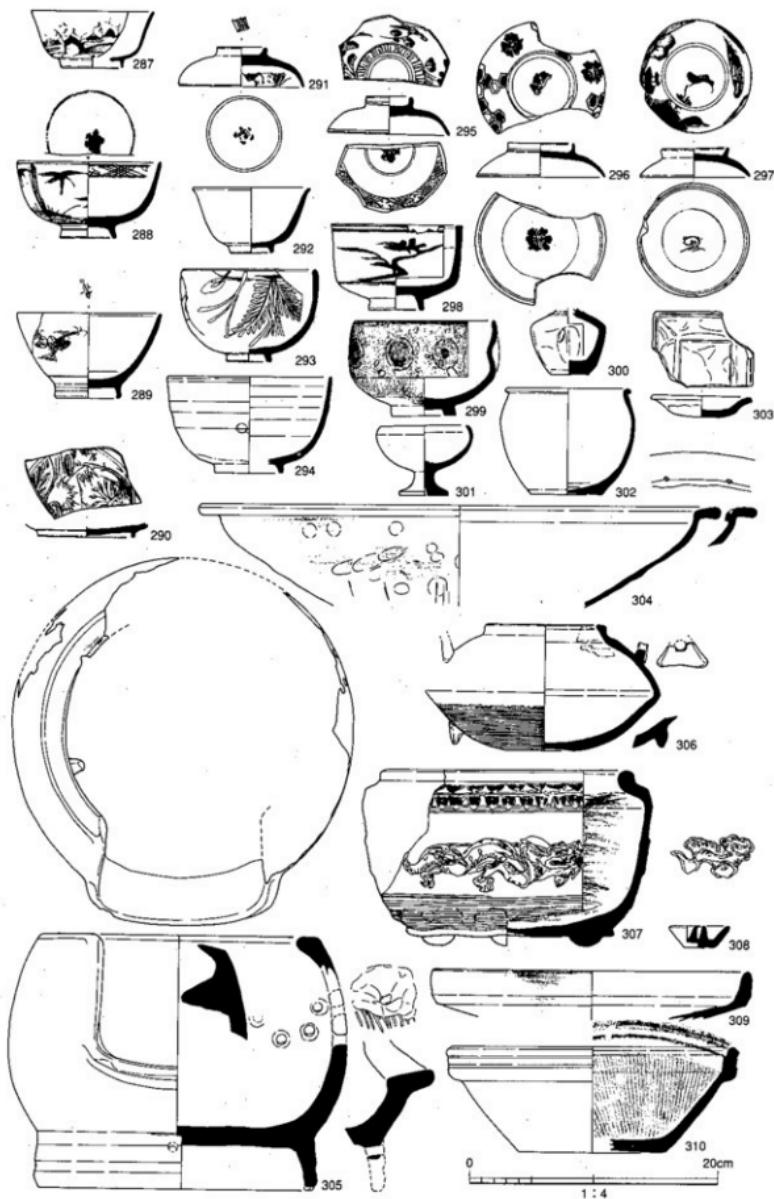


図20 土壙 SK2068出土遺物

る。注連縄の縄とウラジロの葉柄・中軸と海老が赤、ワラ、ユズリハ、ウラジロ葉が緑で上絵付けされる。

294は高台無釉で見込みにハリ目痕がある。

299は鉄釉を掛けるが、高台部疊付は無釉である。

300は底部無釉で底部外面に糸切り痕がある。301は鉄釉を掛けるが、底部無釉である。底部外面に固定用の小孔、内面底部の灯心立ては欠損する。

303は型押成形で緑釉を全面に掛ける。

304は型作りの体部に折線形の口線を貼付ける。体部には指頭圧痕が顕著である。

305は口縁部からU字状に切りみ下方に出窓を貼付ける。円盤の底部に脚部を貼付け、脚部外面には1条の凹線が廻り、正面に小穴がある。体部2方向に数個の小穴があり、口縁部には煤が付着する。

306は硬質の胎土であり、外面にカキ目を付ける。体部上半と下半との屈曲よりやや下がった位置まで褐色釉を掛ける。体部下半に3足を貼付け小径の底部を有する。体部下半に煤の付着が著しい。

307は体部に雲竜文を貼付け、肩部に剣先文を押印している。外面に緑釉を掛け、外面下位にカキ目を付け底部に銹釉を塗る。内面には銹釉が粗く塗られる。底部に3足を貼付け、内面底部に8箇所胎土目が残る。

308は土師質無釉であり、灯芯用の突起に燈油痕がある。

309は底部成形後、直立する口縁部を貼付ける。

310は口縁部内側の沈線状の段差が明瞭であり、擂目上端は横位のナデにより揃えられる。見込みに6~7条1単位の三角形状の擂目を入れる。

6) 土壌 SK2055・2042 (図4、図版7)

酒部家屋敷裏、第2層上面において検出し、掘立柱柵跡SA2004・2005より南側に位置する廃棄土壌である。SK2055・2045共に掘形ラインが不明瞭で一括して取り上げたが、断面観察により2~3造構の切り合いによることが判明している。整地による土地の改変、同一箇所で繰り返される廃棄行為の頻繁さが造構識別の困難を生じさせている。18世紀後半~19世紀初頭の廃棄土壌と考えられるが一括性には問題がある。

SK2055 (図21、図版35・36)

肥前系磁器小壺311~314、壺315・318、碗316・317・319~324、陶器碗325、火入れ326、蓋329~333、皿334~340、壺360、瀬戸美濃系陶器碗327・328、合子347、京信楽系陶器碗341・342、蓋343・345、土瓶350、鍋359、陶器蓋344・346、焼塩壺蓋348・349、陶器碗351・352、備前灯明受皿353・354、土師質皿355~357、関西系磁器鉢358がある。

311・312・314は赤絵である。いずれも疊付無釉である。313・315・318は染付で疊付無釉である。316・317・319~325は染付であり、316は口縁部内面四方櫛文、見込みに手描きによる五弁花、底部外面に一重方形枠内変形字である。317は疊付無釉の雨降文が描かれる。319は口縁部内面四方櫛文、見込み二重圓線内に手描きの五弁花、底部外面に二重方形枠内「福」字、320は口縁部内面に四方櫛文、321は二重圓線を廻し、いずれも見込み二重圓線内に文様を描く。325は陶胎染付で疊付無釉である。

326は染付であり、底部蛇ノ目凹形高台である。

327は白色の軟質胎土に染付を施し、疊付無釉である。

329~333は染付であり、329は内面一重圓線内に太極文、外面に算木文、330~332は高台がハの字状に開き疊付無釉である。333は蓋物の蓋で橋摘みを貼付け、口縁端部は無釉である。

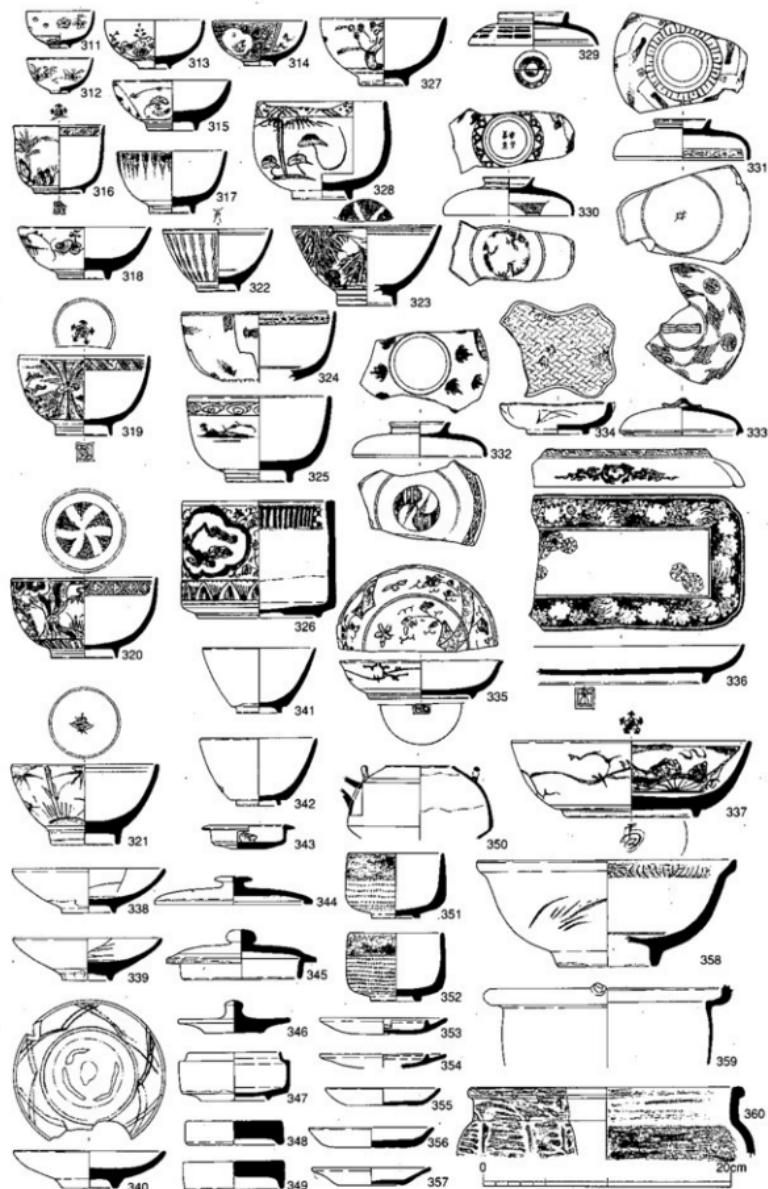


図21 土塘 SK2055出土遺物

334～337は染付であり、334は型押成形後、型紙刷である。335は口縁部を輪花型打し、疊付無釉、底部外面に二重方形枠内「福」字である。336は型押成形であり、口銘を施す。底部外面に二重枠内に変形字である。337は疊付無釉、内面底部にコンニャク印判による五弁花、底部外面に渦福、高台には離れ砂が付着している。

338～340は内面底部蛇ノ目釉剥ぎで高台無釉である。340の内面底部には重ね焼きの痕跡がある。

341は黄白色の軟質胎土に灰釉を掛け、高台無釉である。342は灰白色の硬質の胎土で灰釉を掛け、高台無釉の小杉碗である。

343は土瓶蓋であり、内面ケズリの無釉、外面に灰釉を掛けける。344は口縁端部が肥厚し、内面ナデの無釉、外面に褐釉を掛けハリ目痕がある。345は土瓶蓋であり、黄白色の軟質の胎土である。外面に沈線状の段が廻る。外面に灰釉を掛け、内面無釉である。内面に重ね焼きの痕跡がある。346は急須蓋であり、外面に鉄釉を掛け、内面無釉、内面に回転糸切による切り離し痕と口縁部内面に重ね焼きの痕跡がある。

347は黄白色的軟質胎土で、蓋受部と底部外面および内面を除いて灰釉を掛けける。底部外面はケズリ、内面ナデである。

348・349は内面に布目痕がみられる。350は外面に鉄釉が掛かる。

351・352は外面下半にトビガンナを施し灰釉を掛け、外面上半と内面には鉄釉を掛けける。高台を面取りし疊付無釉である。

353・354は仕切りにU字状の切り込みがみられる。355～357の底部切り離しは回転糸切りである。

359は口縁端部を内側に巻き上げ内外面に鉄釉を掛けける。口縁部に取手を貼付ける。360は体部外面に白泥を掛けける。

SK2042 (図22・23、図版36・37)

肥前系磁器碗361～363、皿366～373、375～380、386、蓋381～384、仏飯器387、紅皿388、小坪389、陶器鉢400、京信楽系陶器碗364・365、蓋385、土瓶397、鍋398・399、鉢401～403、備前壺404、鉢405、擂鉢406・408、堺明石系擂鉢407、丹波焼壺409、土師質皿374、焼塩壺蓋390～393、焼塩壺394、瀬戸美濃系香炉395・396、焙烙410・411がある。

361・362は染付で見込み蛇ノ目釉剥ぎである。362は青磁染付で口縁部内面に四方櫛文、見込み二重圈線内手描き五弁花、疊付無釉である。363は青磁であり、見込み蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼き痕がある。疊付無釉、高台に離れ砂の付着痕がある。364は体部内外面に灰釉を掛け、高台無釉である。見込みにハリ目痕がある。365は体部内外面に灰釉を掛け高台無釉、高台の周囲にカンナ削りがみられ、見込みにハリ目痕がある。

363～373は見込みに蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼き痕があり、離れ砂が付着している。368・369は高台無釉、371～373は疊付無釉、366・367・370は高台に釉が垂れ掛かる。

374の底部切り離しは回転糸切である。

375・376は染付で内面草花文と見込みに二重圈線内に手描き五弁花、外面に唐草文、底部外面に二重方形枠内変形字で、疊付無釉である。377は染付で内面靖唐草文、見込みに二重圈線内に渦唐草文と松竹梅文、外面に唐草文が描かれ、底部外面に「富貴長春」銘がある。378は青磁染付で蛇ノ目凹形高台で疊付無釉である。379は染付で蛇ノ目凹形高台の疊付無釉である。内面に靖唐草文、見込みに松竹梅文、外面に唐草文が描かれ。380は蛇ノ目凹形高台で疊付無釉、見込みに手描きの五弁花、底部外面に二重方形枠内渦福である。

381は染付でハの字状高台で、口縁部内面に四方櫛文が廻る。382・383は蓋物の染付蓋で橋摘みを貼付け、口縁部内面が無釉である。384は青磁の水注蓋で、口縁部内面が無釉である。385は土瓶の蓋であり、黄白色の軟質胎土で外面に灰釉を掛け、内面無釉である。内面に墨書がみられる。

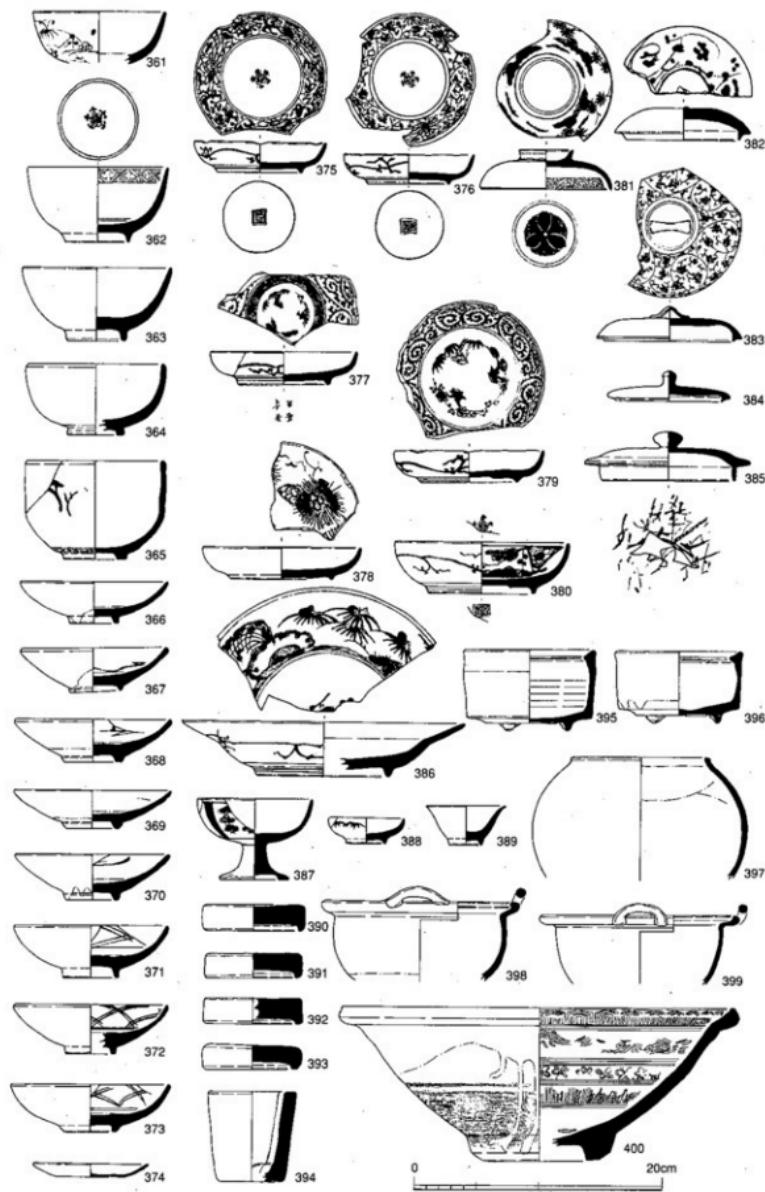


図22 土壙 SK2042出土遺物

386は折縁型の染付皿である。390～393の内面には布目痕があり、394は粘土板成形で蓋受けがなく口縁端部が平坦である。底部に充填された粘土が剥落している。

395・396は黄白色の硬質の胎土であり、内面～口縁部外面にナデ、体部外面～底部にケズリが施される。口縁部～体部外面に釉を掛け、底部に三足を貼付ける。

398・399は内外面に鉄釉を掛けた。口縁部を内側に巻き込み、口縁部に取手を貼付ける。

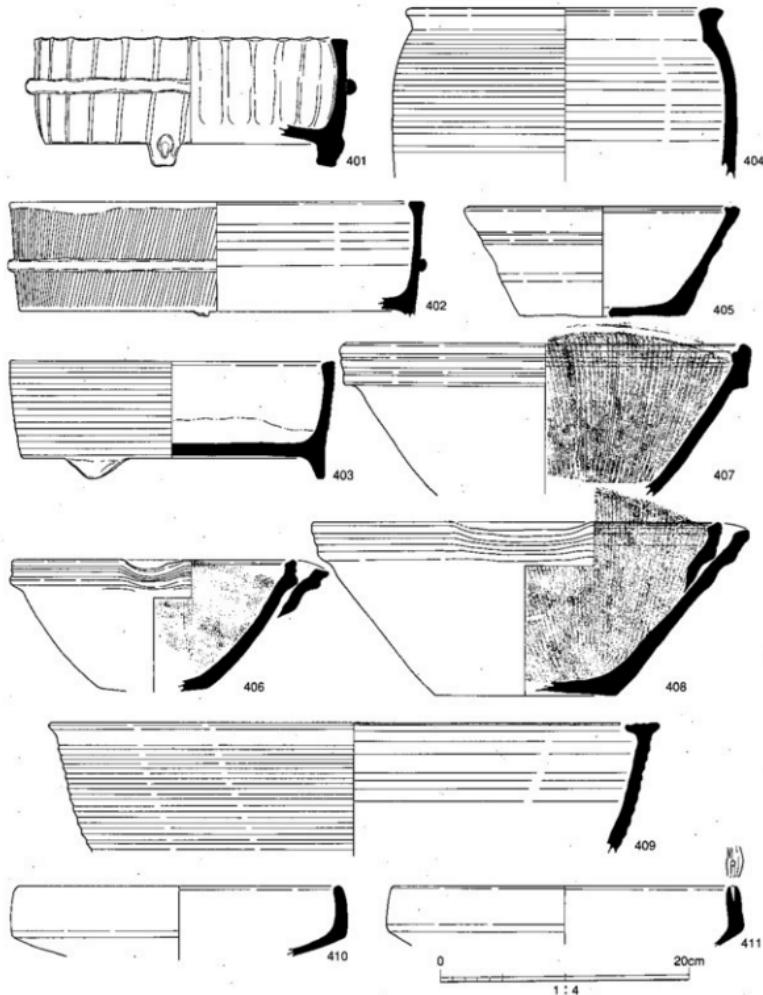


図23 土塙SK2042出土遺物

400は三島手鉢である。口縁部をくの字状に屈曲し、内面は白泥による象嵌を施した後、鉄軸を掛ける。外面は白泥を掛け流す。見込みに砂目積みの痕跡が8箇所みられ、高台の外側を斜めに削り落とし、疊付～高台内が無軸である。

401・402は灰白色の硬質胎土を呈し、体部外面に粘土紐を1条貼付け廻し、底部には足を貼付け、底部外面以外に鉄軸を掛ける。403は灰白色の硬質胎土を呈し、体部内外面に鉄軸、底部内外面に鉄軸を掛ける。外面にはカキ目を施し、底部に足を貼付ける。

404は褐色の胎土を呈し、体部外面にはカキ目が廻る。405は口縁部端面に沈線状の段差があり、口縁部が内側に肥厚する。底部穿孔され櫛木鉢に転用されている。

447は明赤褐色の胎土を呈し、口縁端部内側は沈線状の段差を有し頬の張りが強い。406は暗灰色、408は暗褐色の胎土を呈し、口縁端部内側の沈線状の段差は鈍く、頬の張りも弱い。

409は灰白色の胎土で、体部外面にカキ目を施す。外面に暗褐色の鉄軸を掛ける。410・411は口縁部が直立する土師質の焙烙であり、411は口縁部上端から穿孔しているが貫通していない。

7) 土壌 SK2085・2061～2063・2093・2084・2095・2043 (図4、図版8)

SK2085・2093・2084は、酒部家屋敷裏、第2層上面において検出し、掘立柱柵跡SA2002・2003より北側に位置する土壌である。SK2085は径2.5mの不整円形を呈し、深さ1.2mを測る土壌であるが廃棄的な性格をもつ土壌ではない。一方、SK2093・2084は廃棄土壌群において検出した土壌である。SK2093は長辺2.7m、短辺1.6mの不整長方形を呈する。また、SK2084は遺構の切り合いが著しく平面形は不明である。ここでも、一定場所での頻繁な廃棄行為は、明確な遺構単位での遺物の取り上げに支障をきたしており、SK2093・2084とともに遺構底場近くでの確認である。18世紀代～19世紀初頭の廃棄土壌と考えられるが、SK2043は時期的に異なるものである。

SK2061～2063は、寺澤家屋敷端、第2層上面において検出した廃棄土壌である。SK2061は長辺1.7m、短辺1.2mの不整長円形を呈する。SK2062・2063は長辺1.2～1.3m、短辺60cmの長方形を呈する。遺構の切り合いよりSK2063～2062～2061の新旧関係が考えられる。同一箇所での廃棄行為の繰り返しを示している。18世紀代の廃棄土壌と考えられる。

以下、出土遺物の概要を記す。

SK2085 (図24、図版38)

肥前系磁器碗412～414、小碗416、小坏417、皿421・424、陶器碗415、皿418～420・422・423、京信楽系陶器碗425・426、瀬戸美濃系皿427、土師質皿428、焼塙壺蓋429・430、焼塙壺431・432、備前擂鉢433、丹波焼壺434がある。

412～414は染付でいずれも疊付無軸である。412は見込みに二重圓線内に如意頭文を描く。414の外面口縁部には四方櫛文が廻る。

415は内外面に鉄軸を掛けるが、高台無軸である。416は白磁、417は雨降文を描く。

418～423は見込み蛇ノ目釉剥ぎで418～420は高台ハの字状で茶褐色の鉄軸を掛けるが高台無軸である。421は灰釉掛けの染付で高台無軸、見込みに重ね焼き痕がある。422は灰釉掛けで高台無軸、423は灰釉を掛けで高台無軸、見込みに重ね焼き痕がある。

424は青磁の型押皿で、疊付無軸、輪花口銘装飾である。

425は高台無軸で、緑・赤で文様を描く。426は鉄絵である。

427は白色の軟質胎土の内外面に鉄軸を掛け、基筒底状を呈する。輪花型打成形である。

428は口縁部に燈油痕がある。

429・430は内面に布目痕がある。431・432は粘土板成形で蓋受けをもつ。430は「泉湊伊織」銘がある。

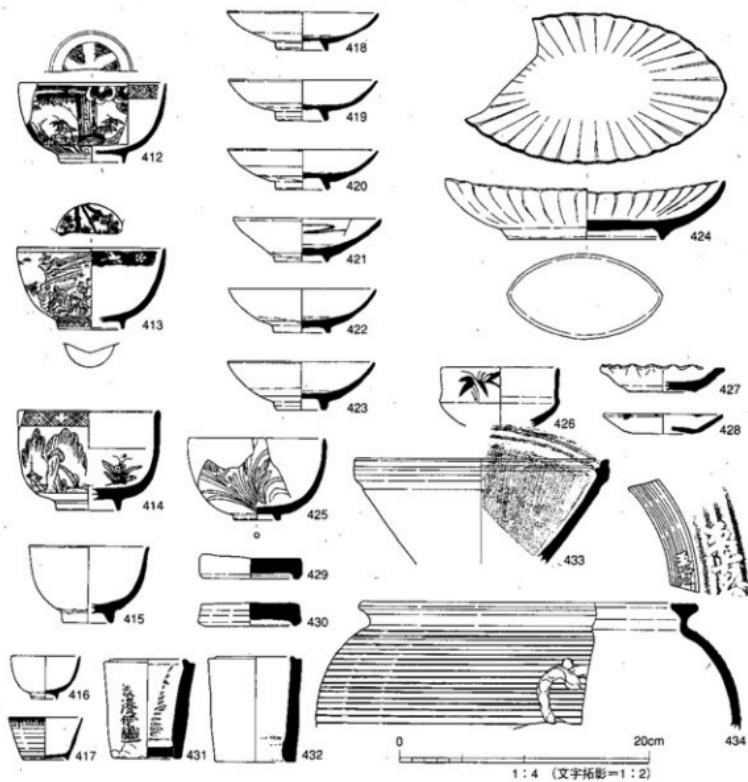


図24 土壙 SK2085出土遺物

434は口縁部を内外に拡張し、肩部に粘土紐で釣手状の装飾を施す。内外面に鉄釉を掛け、体部と口縁部上面にカキ目を施す。口縁部上面に刻銘がある。

SK2061 (図25、図版38・39)

肥前系磁器碗435、蓋437、京信楽系碗436、土製玩具438がある。

435は染付である。436は注連縄文碗である。高台無袖で、縄とウラジロ葉柄・中軸を赤、ウラジロ葉とユズリハを緑・金で上絵付けする。

437は青磁染付である。見込みに二重圈線内手描き五弁花、高台内二重方形枠内渦福、壘付に離れ砂が付着している。

438は箱庭道具の塔である。

SK2062 (図25、図版38)

肥前系磁器碗439~441、蓋442、皿443、瓶444、陶器碗445がある。

439~441は染付でいずれも壘付無袖である。440は内外面に龍を描く。441は輪花型打成形である。

442は染付であり、高台内「富貴長春」銘、見込み二重圈線内に草花文を描く。

443は染付であり、蛇ノ目凹形高台、疊付無釉で底部外面に「富貴長春」銘がある。

444は染付であり、疊付無釉、高台に離れ砂が付着している。

SK2063 (図25、図版38・39)

肥前系磁器小壺446、壺447、皿449、陶器碗448、備前皿450、土師質皿451~454、銅製煙管雁首456、焙烙457がある。

446・447は疊付無釉、447は見込みに手描き五弁花を描き、高台に離れ砂が付着する。

448は暗灰黒色の硬質胎土で外面に白泥を刷毛で塗り、内面は白泥を掛け流し、内外面に透明釉を掛ける。疊付無釉、高台に離れ砂が付着している。

449は蛇ノ目釉剥ぎ、高台無釉で銅緑釉を掛ける。体部外面に重ね焼き痕がある。

454は内外面に橙油痕が顯著である。457は口縁部が直立し、口縁部上面から口縁部外面に小穴を貫通する。

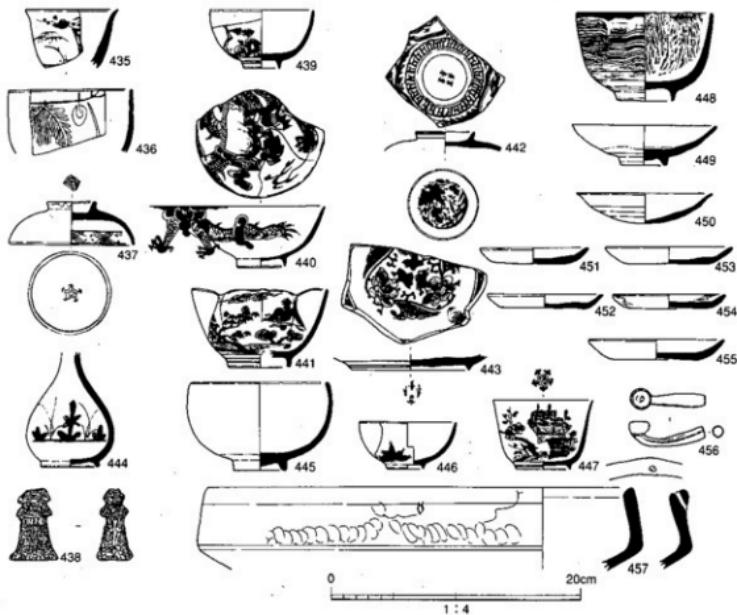


図25 土壌 SK2061 (435~438)、2062 (439~445)、2063 (446~457) 出土遺物

SK2093 (図26、図版39)

肥前系磁器碗458・459、皿460がある。

458・459は染付で459は疊付無釉である。460は蛇ノ目釉剥ぎで灰釉を掛け、高台無釉である。

SK2084 (図26、図版39)

肥前系磁器蓋物461、火入れ462、焼塩壺463がある。

461は染付であり、疊付と口縁端部～内面無釉である。462は青磁染付である。

463は輪積み成形である。

SK2095 (図26、図版39)

肥前系磁器皿464・465、猪口467、陶器碗466、土師質皿468・469、焼塙壺470がある。

464は染付で型押成形である。方形高台を貼付けている。465は蛇ノ目釉剥ぎで高台無釉である。466は黄色～灰白色の軟質胎土の内外面に灰釉を掛けける。

467は白磁の木瓜形である。2分割した型押成形後に両者を合わせる。外面に陽刻文様、疊付無釉で高台に離れ砂の痕跡がある。

468は口縁部に燈油痕がみられる。470は粘土板成形で蓋受けをもつ。

SK2043 (図26、図版39)

瀬戸美濃系向付471がある。

471は変形の扇形を呈し、灰白色の硬質胎土に銅緑釉を部分的に掛け、内外面に抽象的な鉄絵を描く。底部にケズリ、三足を貼付ける。

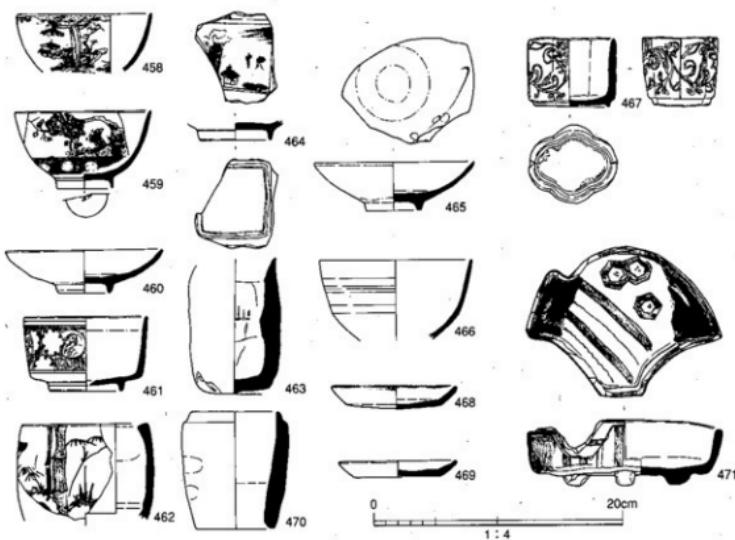


図26 土壌 SK2093 (458～460)、2084 (461～463)、2095 (464～470)、2043 (471) 出土遺物

8) 土壌 SK2112・2113・2114・2121・2127・2133・2132 (図4、図版9)

酒部家屋敷裏、第2層上面において検出し、掘立柱構跡SA2004・2005より南側で検出した土壌である。前述したSK2045・2055と共に構成される18世紀代の廃棄土壌群である。特に、SK2112は長辺2.1m、短辺1.7mの不整長方形を呈する土壌であり、大量の陶磁器や瓦が出土している。また、SK2121は前述した複数の遺構が切りあうSK2042の一部となる可能性がある。

以下、出土遺物の概要を記す。

SK2112 (図27～34、図版40～51)

肥前系陶器碗472～476・478・479、皿496～499、花生501、甕534・536～539・548～550・553・



図27 土壙 SK2112出土遺物

557、鉢560～565、植木鉢552・554、磁器碗477・480・489、蓋物481、小壺482、小碗483、皿484～486、491～495、香炉520～533・535・541・551、鉢555、仏飯器487・488、涼炉490、備前灯明受皿500、鉢542・543・546・547、擂鉢566～574、瀬戸美濃系火入れ502、鉢540・558、甕545、丹波焼鉢503、556、京信楽系陶器蓋504～506、碗508～510、土瓶511・512、灰落し516、合子517・518、土師質蓋507、焼塙壺蓋513、焼塙壺514・515、土製玩具519、不明陶器544がある。

472～476・478・479は陶胎染付である。いずれも疊付無釉であり、472・474の高台には離れ砂の痕跡がある。

477は染付で外面草花文を描き、底部外面に渦福、疊付無釉である。

480は青磁染付で口縁部内面に四方繩文、見込み二重圓線、疊付無釉である。

481は染付で口縁端部～口縁部内面無釉である。

482は赤絵で草花と葉を描き、疊付無釉である。483は白磁で疊付無釉である。

484～486は染付で疊付け無釉、481は底部外面にハリ目跡が1箇所ある。

485は輪花型打成形で見込みに手描き五弁花、高台に離れ砂の痕跡がある。

486の底部外面にハリ目跡が1箇所ある。

487・488は染付である。487は壺部が浅く、高台内の削り込みは浅い。高台内面無釉である。488は壺部が深く、疊付無釉である。

489は底部外面に「正徳年製泉利」銘がある。

490は土師質で円筒形の体部に通気孔を設け、体部が二重構造である。口縁部にボウブラを貼付け、体部外面に白泥で文様を描く。

491～497・499は蛇ノ目釉剥ぎ皿である。491～495は灰釉を掛け高台無釉、離れ砂の痕跡があるが、494は高台外側に釉が垂れ流れている。また、493の口縁部には燈油痕がみられ、灯明皿に転用している。496・497・499は銅緑釉を掛け、高台無釉である。496・499は高台の周囲にカンナ削り痕、499は見込みに重ね焼き痕がみられる。498は見込みに鉄絵が施され、高台にM形の切り込み

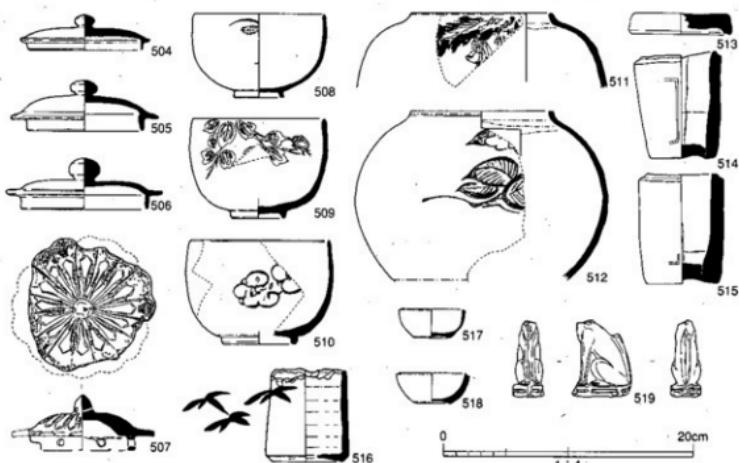


図28 土壌SK2112出土遺物

が2箇所入る。

501は竹筒形に成形し内外面に鉄釉を掛け、白泥を流し掛けする。底部外面無釉で離れ砂痕がみられる。

502は黄色の軟質胎土で口縁部内面～体部に鉄釉を掛け白化粧を施す。体部下位～底部は無釉であるが、高台に一部垂れ流れている。底部外面に同心円ケズリ痕がみられる。

503は灰白色の胎土に鉄釉を掛け、外面にカキ目、底部に足を貼付ける。

504～506は土瓶の蓋で、504は灰白色の硬質胎土で口縁部のかえりを除いて灰釉を掛ける。505は黄白色の硬質胎土で外面に鉄釉を掛け、内面無釉、外面に沈線状の段が生ずる。506は淡黄白色の硬質胎土で外面に灰釉を掛け、内面無釉、外面に沈線状の段が生ずる。

507は釣り灯籠の蓋で、橙色の軟質胎土で外面型押成形で外面には剣先状の文様が放射状に配され、口縁部外面に「福」「壽」字がみられる。円形のかえりを貼付けるが、窓状の切り込みと6箇所に円形の穴を穿つ。摘みの基部が穿孔され貫通している。

508は淡黄白色の硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉、底部外面に同心円ケズリ痕がみられる。509は灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け、高台無釉、底部外面に巴文ケズリ痕がみられる。

511・512は口縁端部～口縁部内面無釉、511は外面に鉄絵を施す。

514・515は粘土板成形で蓋受けの段差は鈍い。

516は外面に審文、底部外面無釉で同心円ケズリ痕がみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

517は暗灰色の硬質胎土で灰釉を掛け、底部外面無釉で同心円ケズリ痕がある。蓋受け部に燈油痕があり、灯明具に転用している。

518は灰白色的軟質胎土で灰釉を掛け、底部外面無釉で同心円ケズリ痕がある。

519は土製品の狐で、左右型合わせ成形で、底部から穿孔が施される。

520～530・531は染付であり、腰部が張り出し短く立ち上がる頸部にL字状の口縁部を呈し、頸部～腰部に双把手、体部下位に三足を貼付ける。

521・524・530・532は口縁部上面に波文、522・525は宝文、523は七宝繫文、528は四方擗文を描く。

520・521・525・530は頸部内外面に四方擗文、523は頸部四方擗文を地文に外面に桔梗形の絵窓に花文、527・528は木瓜形の窓に花文、532は四方擗文の地文に窓絵に牡丹と獅子を描く。

526は頸部外面に草花文を地文に木瓜形窓に宝文、527は亀甲繫の地文に梅形窓を抜いて花文、529は頸部外面に蛸唐草に花びらを描く。

523・529の頸部内面の四方擗文は一単位が大きく描かれ、522は体部外面に松竹梅文、523は風景に桔梗形の窓絵、524は鳳凰を描く。

525～527は高台の周囲に渦唐草文、520～523、528～530・532は連弁文を描く。524・532の三足には兎、520・523・529は陽刻の菊花文で装飾される。

523の底部外面には「富貴長春」銘、529の底部外面には「奇玉宝北口珍」銘がある。いずれも見込みおよび置付けは無釉で、離れ砂の付着が顯著であり、底部穿孔され植木鉢に転用されている。

531・551は色絵染付の筒形香炉である。531は風景に連弁形の窓絵に赤地に金色の唐草と連実、円形青地に金色の鳳凰を描く。底部に陽刻の菊花文を施した三足を貼付ける。体部内面下半～底部、置付無釉で底部穿孔され植木鉢に転用している。531は口縁部上面に赤の渦唐草文を廻し、体部外面は赤地に桜の花びらと蛸唐草文を描く。高台の周囲には連弁文を廻す。置付無釉で底部穿孔し、植木鉢に転用している。

534褐色の硬質胎土で内外面に鉄釉を塗り、白泥による刷毛目文様を頸部と体部中位に施す。肩部に獸面陽刻を貼付け白泥を掛ける。高台外面～置付無釉、見込みに7箇所の砂目跡がみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。



図29 土壙 SK2112出土遺物

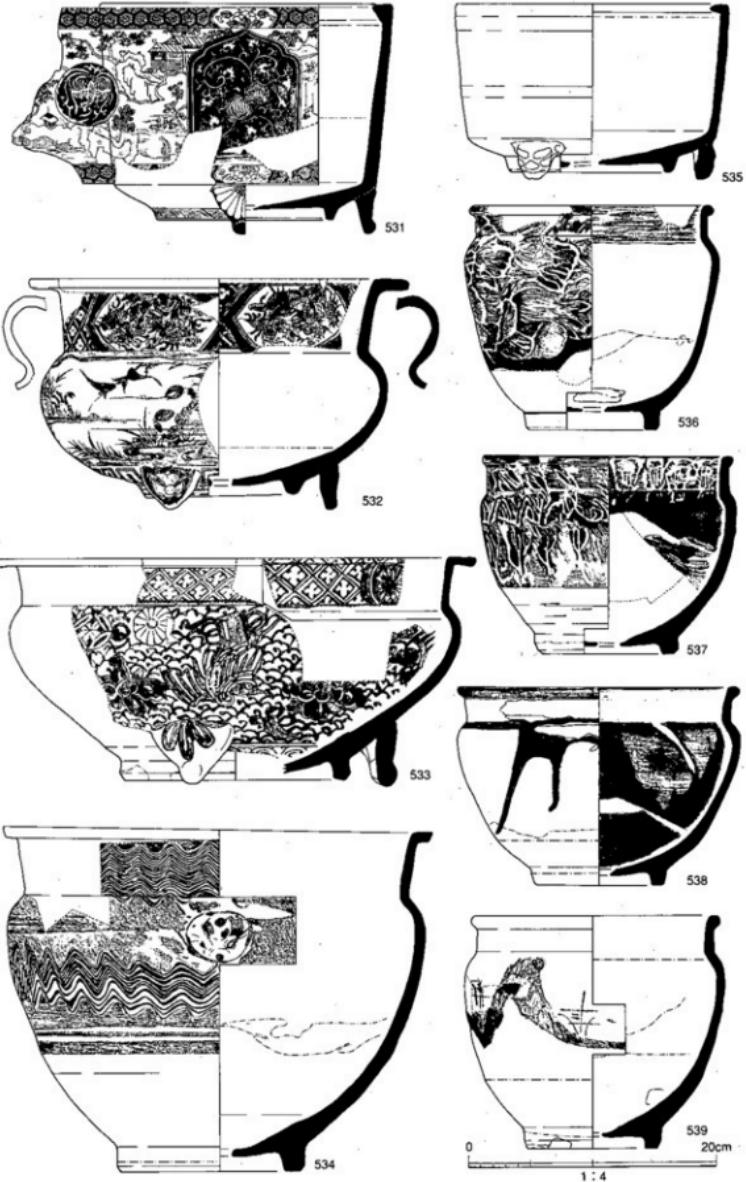


図30 土壙 SK2112出土遺物

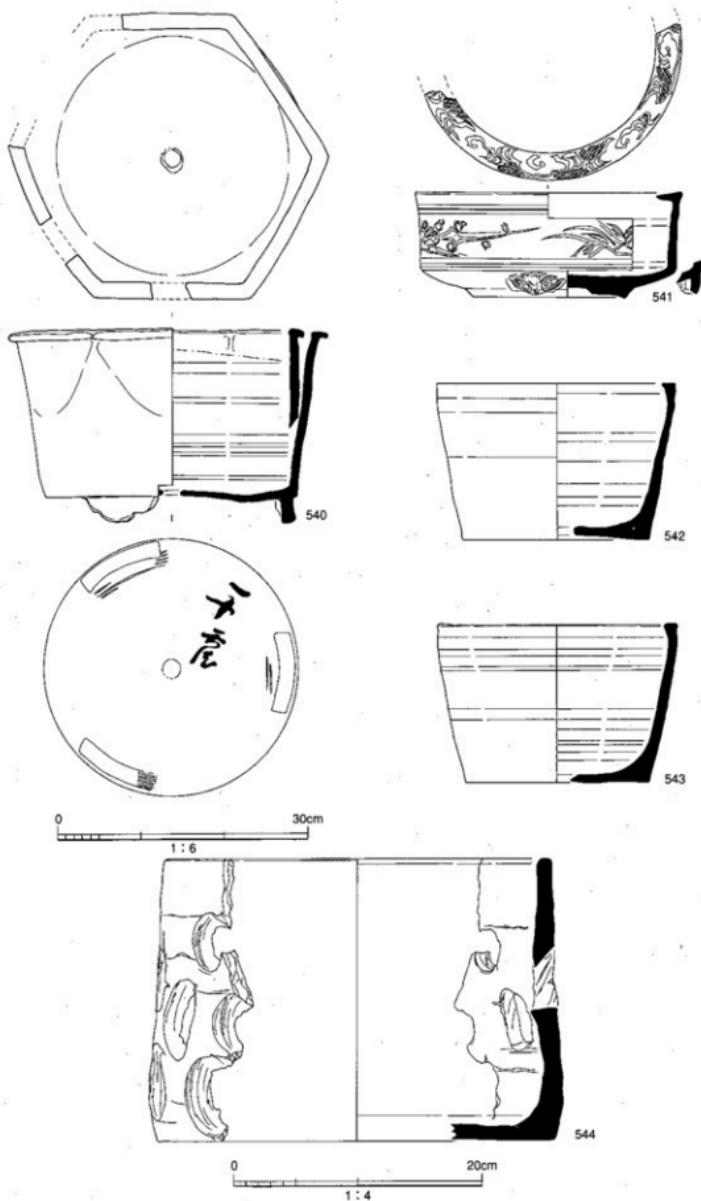


図31 土壙 SK2112出土遺物

535は青磁の筒形香炉である。底部に獸面陽刻の三足を貼付ける。体部内面と畳付無釉である。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

536・537は褐色の硬質胎土で鉄釉を塗り白泥による文様が施される。536の見込みには砂目跡が5箇所、536は見込みに環状に離れ砂が付着している。ともに体部外面下位のケズリが頗著である。畳付無釉で、底部穿孔し、植木鉢に転用している。

538・539は体部外面下位にケズリを施し鉄釉を塗り、538は体部外面に灰黄色釉を掛け鉄絵を施し、539は灰黄色釉に鉄釉を掛け流す。ともに高台外面へ畳付無釉で、538は見込みに環状に離れ砂が付着し、539は砂目跡が6箇所みられる。ともに底部穿孔し、植木鉢に転用している。

540は黄白色の軟質胎土で口縁部内面～体部外面に白色釉を掛けた。轆轤成形であるが、口縁部は六角形に型打成形し、底部には雲形状の三足を貼り付ける。底部外面に墨書がみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

541は青磁で口縁部上面に雲文、体部外面に梅と竹の陰刻文を施す。底部に獸面陽刻の三足を貼付け蛇目凹形高台で畳付無釉である。

542・543・546・547は赤褐色の硬質胎土で轆轤成形であり、542・543の内面には火襷痕がみられる。いずれも底部穿孔し、植木鉢に転用している。

544は暗褐色の硬質胎土であり、円筒状の体部に不整円形の窓を多数あける。

545は黄白色的軟質胎土であり、轆轤成形し茶褐色の鉄釉を外外面に掛け、高台無釉である。底部外面に同心円ケズリ痕がみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

548は明褐色の硬質胎土であり、内外面に鉄釉を塗り、畳付無釉である。肩部に獸面陽刻を貼付け白泥を掛け流す。見込みに砂目跡がみられ、底部穿孔し、植木鉢に転用している。

549は暗褐色の硬質胎土であり、内外面に鉄釉を塗る。肩部外面に獸面陽刻を貼付け銅緑釉を掛け流す。高台外面無釉で高台内蛇ノ目釉剥ぎ、見込みに砂目跡が6箇所ある。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

550は褐色の硬質胎土であり、体部外面下位にケズリ痕、外外面に鉄釉を塗り、畳付無釉である。口縁部上面と体部外面に白泥による刷毛目文様を施し、体部には鉄釉を掛け流す。見込みと高台内外面に離れ砂が付着している。

552は茶褐色の硬質胎土であり、口縁部内面～体部外面に茶褐色の鉄釉を塗り、体部外面に黒色の釉を掛け流す。底部に三足を貼付け、底部中央に外面から小穴を穿つ。

553は明褐色の硬質胎土であり、内外面に鉄釉塗る。畳付無釉である。体部外面上位に唐草文、下位に七宝繫文の印刻が施される。見込みと高台に離れ砂が付着し、底部穿孔し、植木鉢に転用している。

554は明褐色の硬質胎土であり、体部内面上位～体部外面に灰釉を塗り、体部外面に鉄釉を掛け流す。底部に三足を貼付け、底部中央に外面から小穴を穿つ。

555は青磁で輪花型打成形である。高台内蛇ノ目釉剥ぎし重ね焼きの痕跡である。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

556は灰白～黄白色の硬質胎土であり、内外面に鉄釉を塗り、体部外面に黒褐色の釉を掛け流す。口縁部上面と体部外面上半にカキ目がみられ、底部外面無釉、体部下端に足を貼付けるが内側が空洞である。

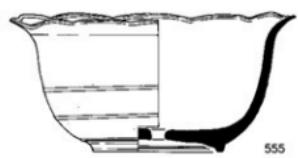
557は明褐色の硬質胎土に鉄釉を塗る。肩部に獸面陽刻を施し白泥を掛け流す。畳付無釉で、見込みに離れ砂痕がみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

558は灰白～黄白色の硬質胎土であり、内外面に白色釉を掛けた。体部外面に陽刻文様が施され把手を貼付け一体化する。底部は無釉で墨書がみられ、底部穿孔し、植木鉢に転用している。

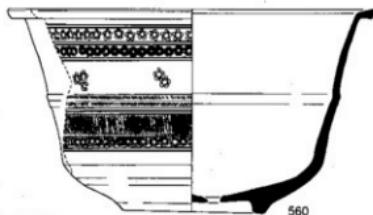
559は灰白色の硬質胎土であり、鉄釉を内外面に塗り緑釉を外面と口縁部内面に掛ける。体部外



図32 土壙 SK2112出土遺物



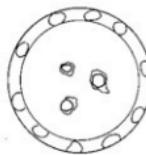
555



560



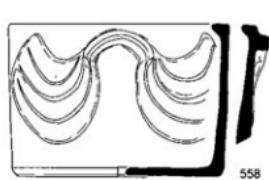
556



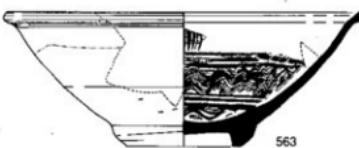
557



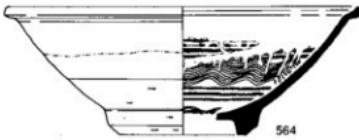
561



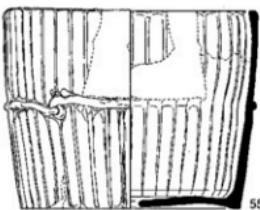
558



562



563



559

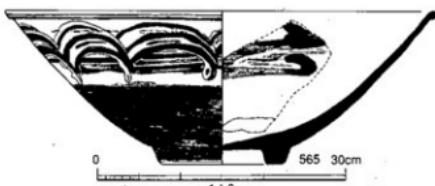
0
1 : 6
30cm

図33 土壙 SK2112出土遺物

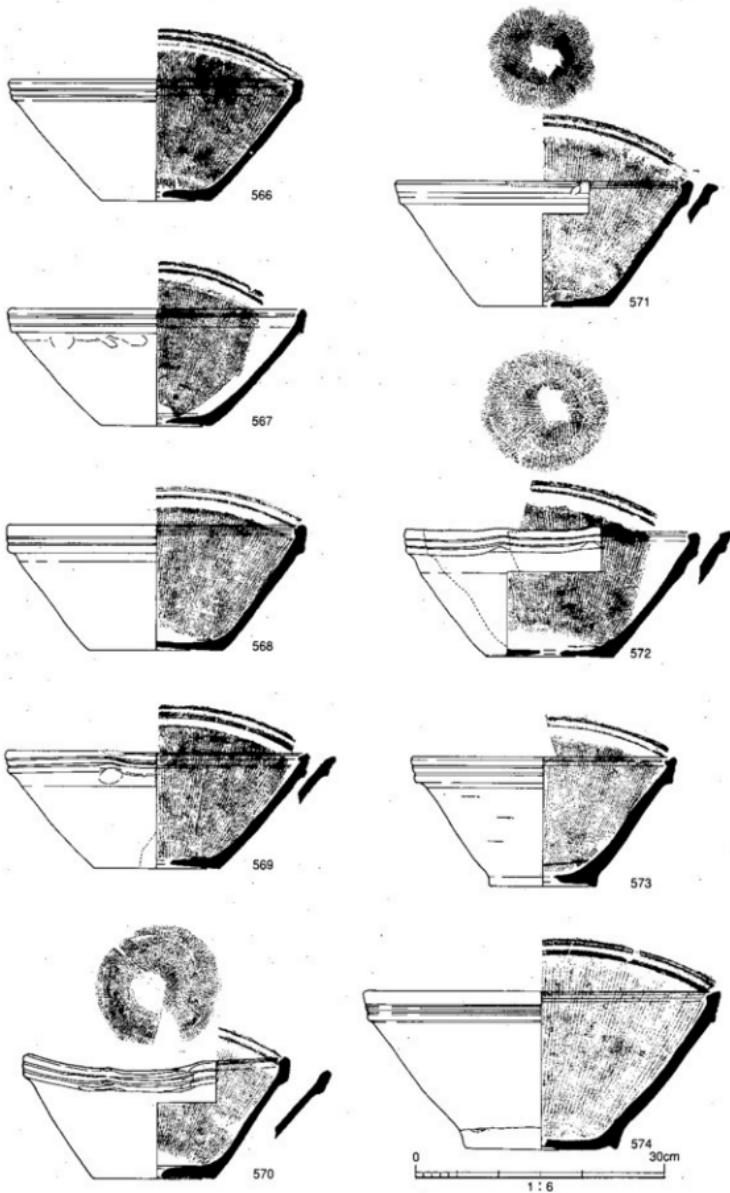


図34 土壙 SK2112出土遺物

面中位に粘土紐を貼付け廻し結び目をつくる。底部外面に砂目跡の痕跡が見られる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

560~565は三島手である。560は灰白色の硬質胎土であり、外面および口縁部内面に白泥象嵌を施し、内外面に灰釉を掛ける。疊付無釉で、底部穿孔を3箇所施し、植木鉢に転用している。

561~564は明褐色の硬質胎土であり、折縁型の口縁部を呈し、高台外面を斜めに切り落とす。体部外面下半のケズリが顯著で、高台は無釉である。561は内外面および高台内部に鉄釉を塗り、内面に型押しによる文様を施し外面上位～内面に灰釉を掛ける。見込みに砂目跡の痕跡がある。底部穿孔し、植木鉢に転用している。562は外面に鉄釉を塗り、内面は型押しによる文様に白泥象嵌を施す。563・564は口縁部外面に鉄釉を塗り、内面は白泥による刷毛目文様を施し灰釉を掛け流す。

565は疊付のみ無釉で内外面に鉄釉を塗り、体部外面上位に白泥による刷毛目文様、内面は白化粧を施す。

566~579は橙色の硬質胎土で口縁部内側に突帯があり、突帯上位に1条沈線が廻る。外縁帯には2条沈線が廻り、外縁帯の張り出しが強くない。横目上端はナデにより抑えられる。体部外面はケズリが施され、573・574は底部に高台をもつ。566・567・569~573は底部穿孔し、植木鉢に転用している。

SK2113 (図35・36、図版52・53)

肥前系磁器碗575・576・580・581・584、小壺587、蓋588、皿589~593・595・596、鉢598・626、仏飯器599・600、瓶601・603、陶器碗577~579・582・585・586、皿594、鉢597、京信楽系碗604・605、火入れ606、瀬戸美濃系小壺608、土師質鉢607、備前灯明皿609~613、灯明受皿614、擂鉢628・629、土師質皿615~622、焼塙壺623、加工円盤624・625、陶器瓶602、鉢627がある。

575・580・581・583・584は染付で、575は体部外面に鳳凰と雲、口縁部内面に四方櫛文、見込み二重圈線内に鳳凰を描く。疊付無釉で、底部外面に「正徳年製泉利」銘がある。

580は焼継痕があり疊付無釉である。

581は体部外面に松竹梅文を描き、疊付無釉である。

584はハの字状高台を呈し、口縁部内面に四方櫛文、見込み二重圈線内に「壽」字で、疊付無釉である。

576は青磁染付で口縁部内面に四方櫛文、見込み二重圈線内コンニャク印判による五弁花を施す。疊付無釉である。

577・578は陶胎染付であり、577は体部外面に扇と唐草、見込み二重圈線内にコンニャク印判による五弁花、疊付無釉である。

578は口縁部外面に雷文を廻し、体部外面を指で窪ませたえくは碗である。疊付け無釉で高台に離れ砂の痕跡がある。

579は呉器手で黄白色の硬質胎土である。疊付無釉で高台に離れ砂の痕跡があり、高台内中心がケズリにより尖る。

585は暗灰色の硬質胎土に銅綠釉を掛け白泥による文様を施す。疊付無釉である。586は明褐色の硬質胎土に鉄釉を掛け白泥による刷毛目文を施す。疊付無釉で離れ砂が付着している。

587は染付で疊付無釉である。588は染付で碗575とセットである。

589・590は染付であり、589は輪花型打成形で見込みに二重圈線内手描き五弁花を施し、体部外面は唐草文、底部外面二重方形枠内渦福で、疊付無釉である。590は疊付無釉であり、底部外面に「大明年製」銘である。

591~596は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿であり、591~593は内外面灰釉を掛け高台無釉、594は銅綠釉を掛け高台無釉である。

595・596は青磁で596は折縁口縁である。ともに見込みと疊付に離れ砂が付着し、高台無釉であ



図35. 土壙 SK2113出土遺物

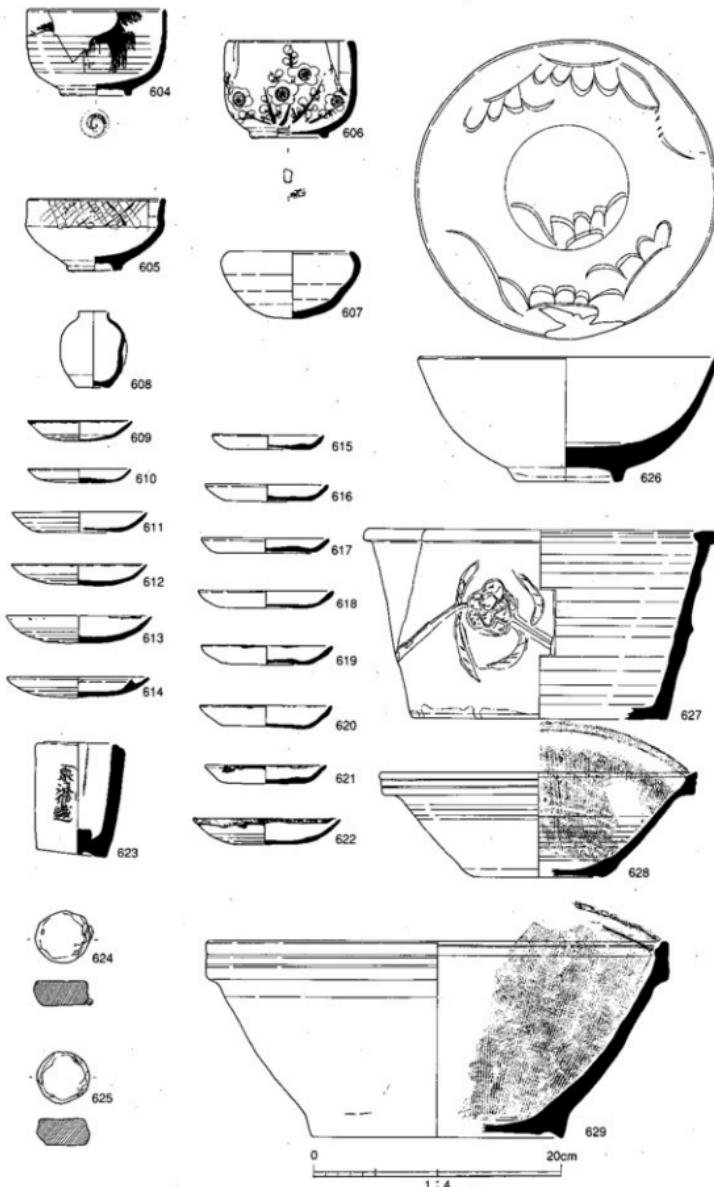


図36 土壙 SK2113出土遺物

るが、一部釉が高台に垂れ掛かっている。

597は明橙色の硬質胎土であり、内外面に鉄釉を塗り、体部内外面に白泥による刷毛目文様を施す。口縁部を外側に折り返し玉縁状を呈する。高台無釉であるが疊付に白化粧を施し、高台内は同心円ケズリ痕がみられる。

598は型打成形の角鉢で、八角の区画内に染付を施す。599・600は染付で底部外面無釉である。

601・602は柑子口の瓶で601は青磁である。603は染付の仏花瓶で底部が広がり口縁部がラッパ状に開く。内面頸部以下および疊付無釉で、疊付に離れ砂が付着している。

604は灰白色の硬質胎土であり、灰釉を掛け鉄絵を施す。高台無釉で高台内に巴形ケズリ痕がある。605は黄白色の硬質胎土であり、灰釉を掛け、見込みにハリ目跡が3箇所ある。606は型打成形で黄白色の硬質胎土であり、灰釉を掛け、体部外面に白梅を描く。見込みに重ね焼き痕があり、高台無釉で底部外面に墨書きがみられる。底部穿孔し、植木鉢に転用している。

608は灰白色の硬質胎土に鉄釉を掛ける。体部下位～底部外面が無釉で、底部外面に回転糸切り痕がみられる。

610・612・613・619～622の口縁部には蠟油痕がみられる。623は粘土板成形で蓋受けの段差はほとんどない。外面に「湊泉伊織」銘がある。

626は青磁で内面に陰刻を施し、疊付無釉である。627は灰黄色の硬質胎土に鉄釉を掛ける。体部外面に貼付けの花文を施し、底部外面無釉である。

628は口縁部内面に低い突帯が廻り、外縁帯は張り出す。櫛目の上端は揃っていない。629は口縁部内面に突帯と突帶上位に1条沈線が廻る。外縁帯の張り出しありなく、櫛目上端はナデにより揃えられる。底部外面に高台をもつ。

SK2114 (図37、図版53・54)

肥前系磁器碗630～635・639～642、猪口648、紅皿636・637、小壺638、蓋643～647、瓶660、瀬戸美濃系陶器小碗649、京信楽系陶器碗650・651、鉢654、備前灯明皿655・656、土師質皿657、壺659、秉燭658、丹波焼壺661がある。

630は色絵で疊付無釉である。631は染付でハの字状高台を呈し、疊付無釉である。

632は青磁染付であり、口縁部内面に二重圈線を廻し、見込みは一重圈線内に手描きによる崩れた五弁花を施す。

633～635は染付の広東碗であり、633は体部外面に蝶、636は撚文を施し疊付無釉である。635は口縁部内面に雲竜文、見込みは一重圈線内に鷲を描き疊付無釉である。

636は白磁の紅皿で外面に貝の放射脈を表現した型押成形を施す。外面が部分的に無釉であり赤色顔料が付着している。637は赤絵で海老を描いた紅皿である。638は染付けで疊付無釉である。

639～641は染付で疊付無釉である。

642は染付であり、体部外面に松を描き、口縁部内面に四方櫛文を廻す。疊付無釉である。

643は染付で外面に「福」字、高台内に「壽」字、見込みは一重圈線内に扇を描き疊付無釉である。644は青磁染付で口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に手描きによる五弁花、高台内に二重方形枠内渦福で疊付無釉である。645は染付で口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に鷲を描き疊付無釉である。647は外面および見込みに花文を施し疊付無釉である。

646は蓋物の蓋で橋彫みを貼付け、口縁端部内面が無釉である。

648は染付で体部外面に花唐草文を施し、疊付無釉である。

649は灰白色的硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉である。650は灰色の硬質胎土に灰釉を掛ける。

651は黄白色的軟質胎土に灰釉を掛け、高台無釉の小杉碗である。

652・653は蛇ノ目釉剥ぎ皿であり、652は淡黄白色的硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉、653は白色釉を掛け高台無釉である。

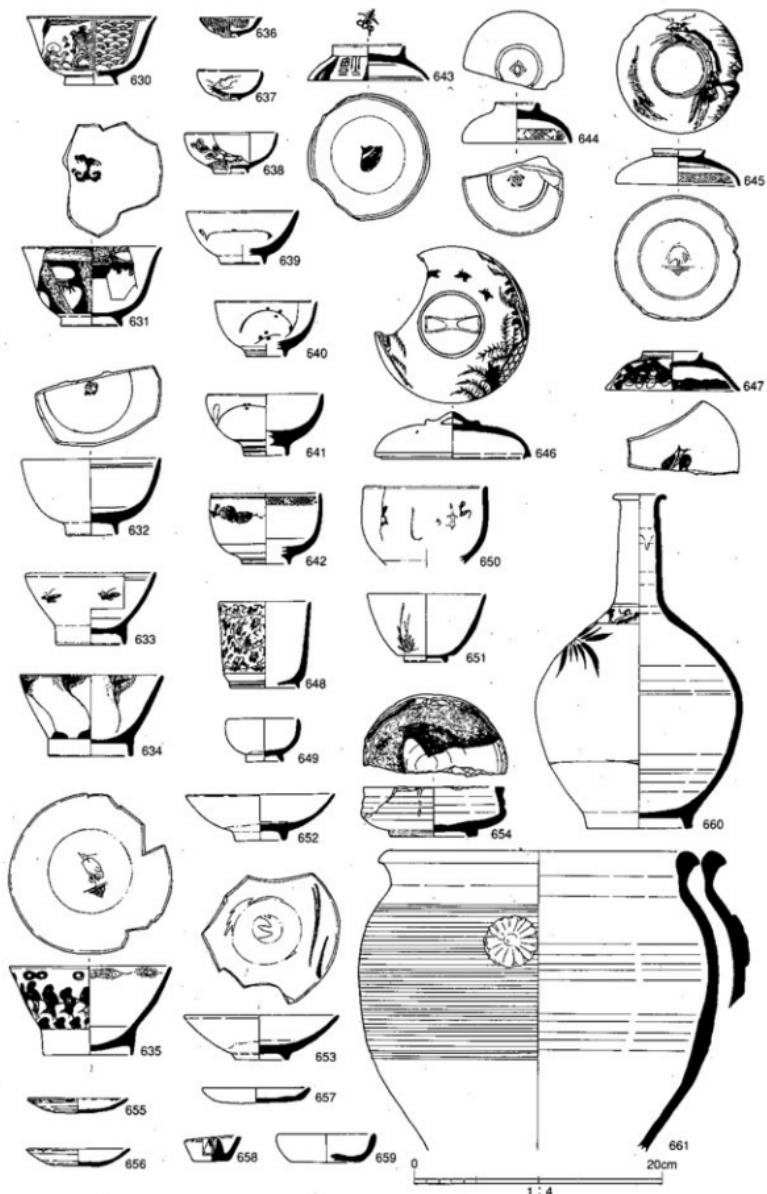


図37 土塘 SK2114出土遺物

654は輪花型打成形で体部内面に鉄釉を塗り白泥を掛け流す。豊付～高台内が無釉である。

655・656は口縁部に燈油痕がみられる。658は芯立に燈油痕がある。659は灰白白の軟質胎土の碗型土器である。

660は明褐色の硬質胎土に鉄絵を施し透明釉を掛け豊付無釉である。鶴首状の口部を呈する。

661は褐灰色の硬質胎土に黒褐色の釉を内外面に掛け、体部外面にカキ目、菊花陽刻文を貼付ける。

SK2121 (図38、図版54)

肥前系陶器碗662、磁器碗663、蓋664、小壺665、皿667・668、京信楽系碗666、備前鉢671、磁器人形669、土製人形670がある。

662は陶胎染付で豊付無釉である。663は青磁染付で口縁部内面に四方棒文を廻し、見込みは二重圓線内手描き五弁花、底部外面に二重方形枠内渦福を施す。豊付無釉である。

664は蓋物の蓋で橋摘みを貼付け、外面に宝文を配する。口縁端部内面無釉である。665は染付で豊付無釉である。

666は灰白色的硬質胎土に灰釉を掛け、高台無釉である。

667・668は蛇ノ目釉剥ぎ皿で見込みに離れ砂が付着している。高台無釉であるが、667は高台外面に釉を掛けている。

669は白釉地に面部と着物に赤絵を施す。670は型押成形で底部から穿孔を施す。

671は腰部の段が鋭く脇部にカキ目を施す。

SK2127 (図38、図版55)

肥前系磁器碗672、壺673、小壺674、鉢675、蓋677、皿678・679、陶器鉢676、壺688、蓋680、瀬戸美濃系陶器碗681、京信楽系急須682、水注683、備前灯明受皿684、土師質皿685～687がある。

672は染付であり、見込み蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡がある。豊付無釉で、離れ砂が付着している。

673・674は染付で豊付無釉である。

675は白磁で型打成形である。鉄釉による口銹を施し高台無釉である。

676は褐灰色の硬質胎土に灰釉を掛け、白泥による刷毛目文を施す。口縁端部を外側に折り返し、正縁状口縁を呈する。高台無釉であるが、豊付に白化粧を施す。

677は染付で口縁部内面に四方棒文を廻し、見込みは二重圓線内に手描き五弁花、高台内に二重方形枠内渦福がある。

678は輪花型打成形で口縁部内面に四方棒文を廻し、体部内面に梅と竹を描き、見込みは二重圓線内手描き五弁花を施す。体部外面に唐草文、底部外面に二重方形枠内渦福がある。豊付無釉である。

679は見込みにコンニャク印判による五弁花、底部外面に一重圓線内にくずし字の「大明年製」銘がある。豊付無釉で離れ砂が付着している。

680は急須の蓋である。褐色の硬質胎土で外面に鉄釉を掛ける。内面無釉で切り離しの回転糸切り痕がみられる。

681は灰色の硬質胎土に灰釉を掛ける。高台無釉で高台内は尖底状にケズリが施される。

682は小型の急須で黄白色の軟質に灰釉を掛け、口縁端部および底部は無釉である。体部外面に鉄絵を施す。底部外面に墨書がみられ底部穿孔し、植木鉢に転用している。

683は銚子で灰色硬質胎土の型打成形で灰釉を掛ける。底部外面は無釉で三足を貼付ける。口縁部上端に注口を設け、注口上位に把手を付け根に菊花文を貼付ける。底部内面にハリ目跡がみられる。

684は口縁部に燈油痕がみられる。

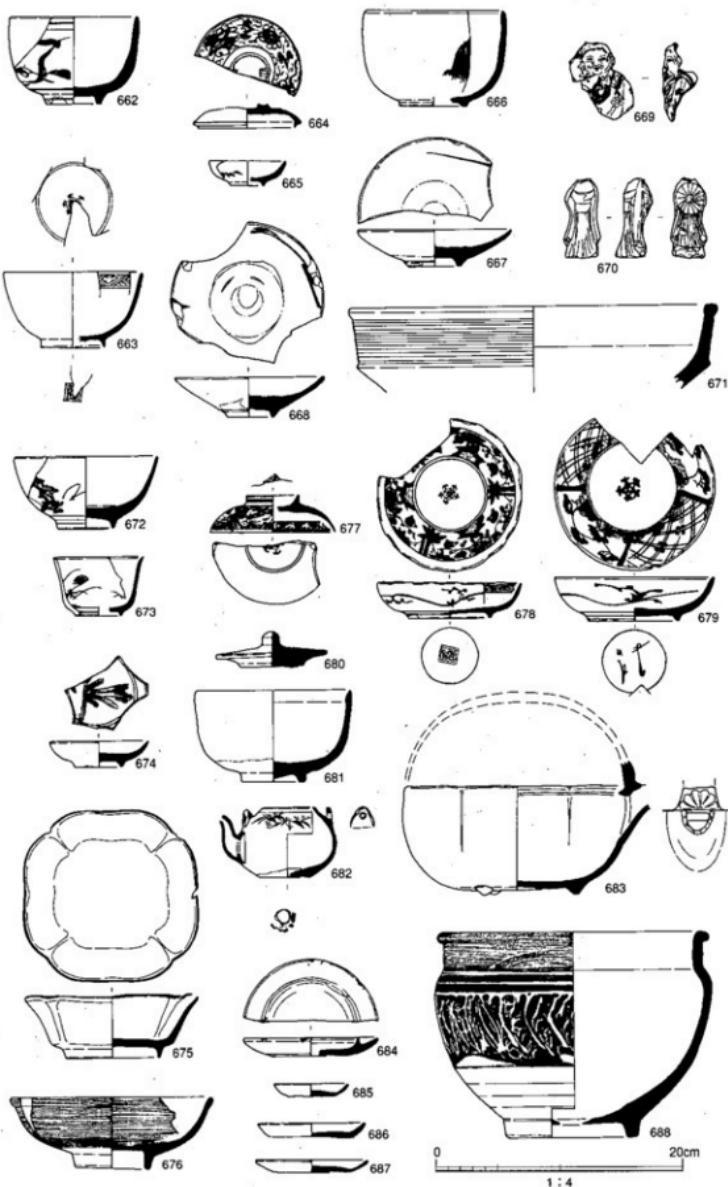


図38 土壙 SK2121 (662~671)、2127 (672~688) 出土遺物

685・686は底部外面に回転糸切りの切り離し痕があり、687は口縁部に燈油痕がみられる。
688は暗灰色の硬質胎土に鉄釉を塗り体部外面に白泥を掛け流し文様を施す。見込みに離れ砂の付着と重ね焼きの痕跡があり、底部穿孔し、植木鉢に転用している。

SK2133 (図39、図版56)

肥前系磁器碗689・696、皿694、小壺695・697～699、仏飯器708、陶器碗690・691、皿692・693、土師質皿700・703～707、備前灯明皿701・702、擂鉢716、陶器灯明受皿709、焼塩壺蓋710～712、焼塩壺713～715、鉄製火箸717・718、十能719がある。

689は染付で口縁部内面に四方櫛文を廻し、見込み二重圓線内に龍を描く。体部外面は波を地文に木瓜形の絵窓に竹・梅を描く。高台の周囲に蓮弁を廻し疊付無釉である。

690は陶胎染付で疊付無釉、離れ砂が付着している。

691は灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉である。高台内に円刻状のケズリ痕がみられる。

692～694は蛇ノ目釉剥ぎ皿であり、692は銅綠釉を掛け高台無釉、見込みに重ね焼きの痕跡がある。

693は銅綠釉を掛け高台に釉が垂れ流れる。見込みに重ね焼きの痕跡、疊付に離れ砂が付着している。

694は白色釉を掛け高台に釉が垂れ流れる。見込みに離れ砂が付着している。

695・696は染付で疊付に離れ砂が付着している。697・698は染付で口縁部が外反し、疊付無釉である。

699は雨降文を施し疊付無釉である。

700は内面に墨書きがみられ底部外面に回転糸切りの切り離し痕がみられる。

701・702は口縁部に燈油痕がある。703～707は底部外面に回転糸切りの切り離し痕がみられ、704は内外面に燈油痕がみられる。

708は染付で浅い坏部を呈する。雨降文を施し、脚部外面無釉である。

709は明褐色の硬質胎土であり、内面および口縁部外面に鉄釉を掛ける。仕切りの上端は口縁部より高く基部にへ状の窓が2箇所開けられる。底部外面無釉で、同心円ケズリ痕がみられる。

710～712は内面に布目痕がある。713・714は粘土板輪積成形、715は粘土板成形で内面に布目痕がみられる。蓋受けの段差は小さく明瞭である。いずれも体部外面に「漆泉伊織」銘の刻印が施される。

716は口縁部内面に突帯と1条沈線が廻り、外縁帯の張り出しが弱い。櫛目はナデにより揃えられている。

717は塵取り形を呈し柄は中実である。内面に煤の付着がみられる。

SK2132 (図39、図版56)

肥前系磁器皿720～722・724、鉢723、猪口725、京信楽系鉢726、備前灯明皿727・728がある。

720・721は蛇ノ目釉剥ぎ皿であり、見込みに離れ砂が付着し、高台無釉である。720は疊付に離れ砂が付着している。

722は輪花型打成形の染付けであり、内面に梅と竹、外面には唐草文を描く。疊付無釉である。

723は染付で体部外面を区画し桜花を配する。高台内部の刺り込みが深く、底部外面に二重方形枠内渦福がある。

724は型押成形の染付けであり、疊付無釉、底部外面に二重方形枠内渦福がある。

725は染付で疊付無釉で離れ砂が付着している。

726は灰白色の硬質胎土で灰釉を掛ける。高台無釉、見込みに呉須と鉄絵による花文を描く。

727・728は口縁部に燈油痕がみられ、728は内面および口縁部外面に塗土を施す。

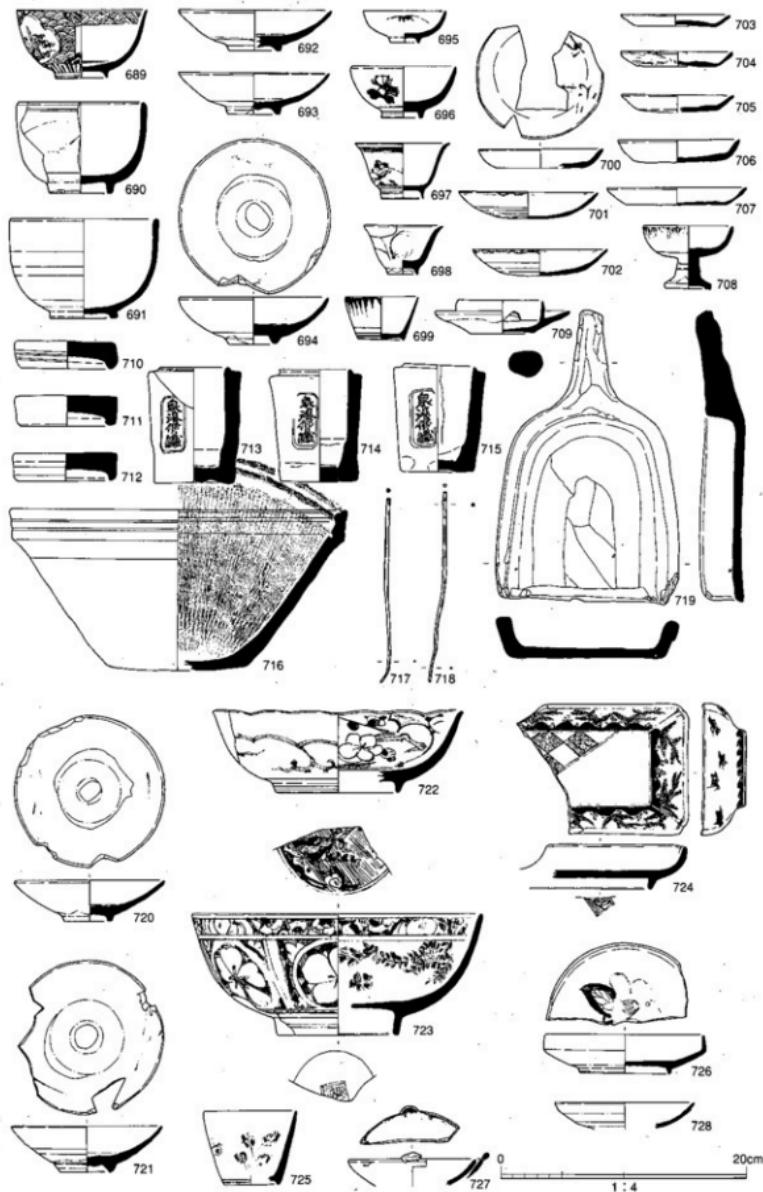


図39 土壙SK2133(689~719)、2132(720~728)出土遺物

9) 池状遺構 SK2108 (図4・4~51、図版11~14・57~74)

酒部家屋敷裏、第2層上面において検出した池状遺構である。平面形が長辺10m、短辺8mの不整長方形を呈し深さ80cmを測る。埋土は底部に層厚20cmの腐敗植物を含む水成堆積が見られ上位は砂層で覆われていることから人為的に埋め戻されたと考えられる。この池状遺構の西隅部に幅3.2mの溝が付設され溝との接合部には閉塞用の高さ60cmの石組が施される。石材は結晶片岩であり石組は弓状に設置された礎板の上に組まれる。また、遺構のほぼ中央には一辺1.1mの方形の枠状木組が設置される。閉塞用の石組及び枠状の木組の用途については不明である。

以下、出土遺物の概要を記す。



図40 池状遺構 SK2108

肥前系磁器碗729・731・739~744・747・748・758・761、蓋物762、鉢732、小壺745・746・749~753、壺754、蓋755、皿756・757・764~767・776~779・783・784・794~797、瓶790、陶器碗730・733~738・759・760、皿763・768~775、780~782、鉢785、火入れ787・788、瀬戸美濃系陶器壺789、陶器水注791・792、壺816、備前播鉢817・818、土師質火入れ793、皿803~815、焰烙819、鉄製釘798、銅製煙管雁首799~801、吸口802、木簡820~848、櫛849~851、調度品852、漆器椀蓋853~862、椀863~874、箸875、ヘラ876~879、曲物底板880、折敷脚板881~886、把手887、鏡888、栓889、糸巻890、羽子板891、下駄892~895、傘896、箸897~916、楊枝917~919がある。

729は染付で体部外面に葡萄を描き、疊付無釉、離れ砂が付着している。

730は灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け呉須絵を施す。高台無釉で高台内に円刻がみられる。

731は染付で疊付無釉、離れ砂が付着し高台内に「宣明」銘がある。

732は染付で口縁端部が外反する。体部外面には亀甲繋ぎ文が施される。

733~736は呉器手で733・734は灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け、疊付無釉で貯入がみられる。735

は褐色硬質胎土に灰釉を掛け、豊付無釉で貫入がみられる。736は灰色の硬質胎土に灰釉を掛け、豊付無釉で貫入がみられる。

737・738は黄白色の硬質胎土に灰釉を掛け、高台無釉で高台内の円刻に小判型の「寶」字の刻印がある。738は体部外面に呉須絵を施す。

739~744は染付で豊付無釉、739~741・744は離れ砂が付着している。741は高台内に二重圈線内に「宣明年製」銘、742は「大明成靖年製」銘、743は「宣明年製」銘がある。

745~746は白磁で、745は豊付無釉で離れ砂が付着、747は豊付無釉で高台内に一重方形枠内変形字がある。748は青磁である。

749・752・754は白磁で、749は豊付無釉、752は豊付無釉で離れ砂が付着している。754は体部外面にヘラ掘りによる鎬陰刻が施される。

750・751・753は染付で、750は高台無釉で体部外面にヘラ掘りによる鎬陰刻を施す。751・753は豊付無釉で離れ砂が付着、753は高台内に「□明成□年製」銘がある。

755は染付の蓋物の蓋で口縁端部内面無釉である。

756は染付で体部内面に「福」字を環状に繋ぐ。蛇ノ目高台で豊付無釉である。757は染付で見込みに草を描き、豊付無釉で離れ砂が付着する。

758は染付で豊付無釉で高台内に「大明成化年製」銘がある。

759は天目碗で灰黄色の軟質胎土に鉄釉を掛ける。

760は灰黄色の硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉、高台内の円刻内に「吉小松」銘がある。

761は豊付無釉で体部外面に呉須を掛ける。

762は半筒形碗で豊付無釉である。

763は底部外面に墨書きがみられる。

764・765は染付で高台無釉、離れ砂が付着している。764は高台内の内割りが深い。765は内面に2頭の鹿と紅葉を描く。高台内に変形字銘がある。

766は白磁の型押成形で豊付無釉である。口縁部内面に花文陽刻を施す。

767は染付の芙蓉手で豊付無釉で高台内の内割りが深い。

768・769・771・775は口縁部が外反し口唇部に溝を廻し、772・774は口縁部が外反し平口縁、773は口縁部が外反し端部が立ち上がる。

768は灰釉を掛け高台内無釉で高台内に円錐状の突出したケズリ残しがみられる。見込みに砂目跡が4箇所ある。

769は内面に鉄釉を掛け外面無釉、高台内に巴形のケズリ痕がある。見込みに砂目跡が3箇所ある。

770は灰釉を掛け高台無釉である。771は灰釉を掛け高台内に円錐状の突出したケズリ残しがある。内面体部と底部の境界に溝状の段が生じ、見込みに砂目跡が3箇所ある。

772は灰釉を掛け高台内無釉、豊付に離れ砂が付着している。見込みに砂目跡がある。

773は灰釉を掛け高台無釉、内面体部と底部の境界に沈線状の段が生ずる。見込みに砂目跡が4箇所あり、口縁部に燈油痕がみられる。

774は灰釉を掛け高台内無釉、豊付に離れ砂が付着している。見込みに砂目跡が3箇所ある。

775は灰釉を掛け高台内無釉、豊付に離れ砂が付着し見込みに砂目跡がある。

776は染付で見込みに呉須絵を施し、豊付無釉である。

777~784は蛇ノ目釉剥ぎ皿である。灰釉を掛け高台外面に釉が垂れ流れている。777は口縁部外面と豊付に重ね焼きの痕跡がみられ、778・779・781~784は高台内に円錐状のケズリ残し痕、778・782・783は見込みに重ね焼きの痕跡、780は口縁部に燈油痕、784は豊付に離れ砂が付着している。

785は灰黃白色の硬質胎土に灰釉を掛け高台無釉である。高台内に円錐状のケズリ残しの痕跡がある。

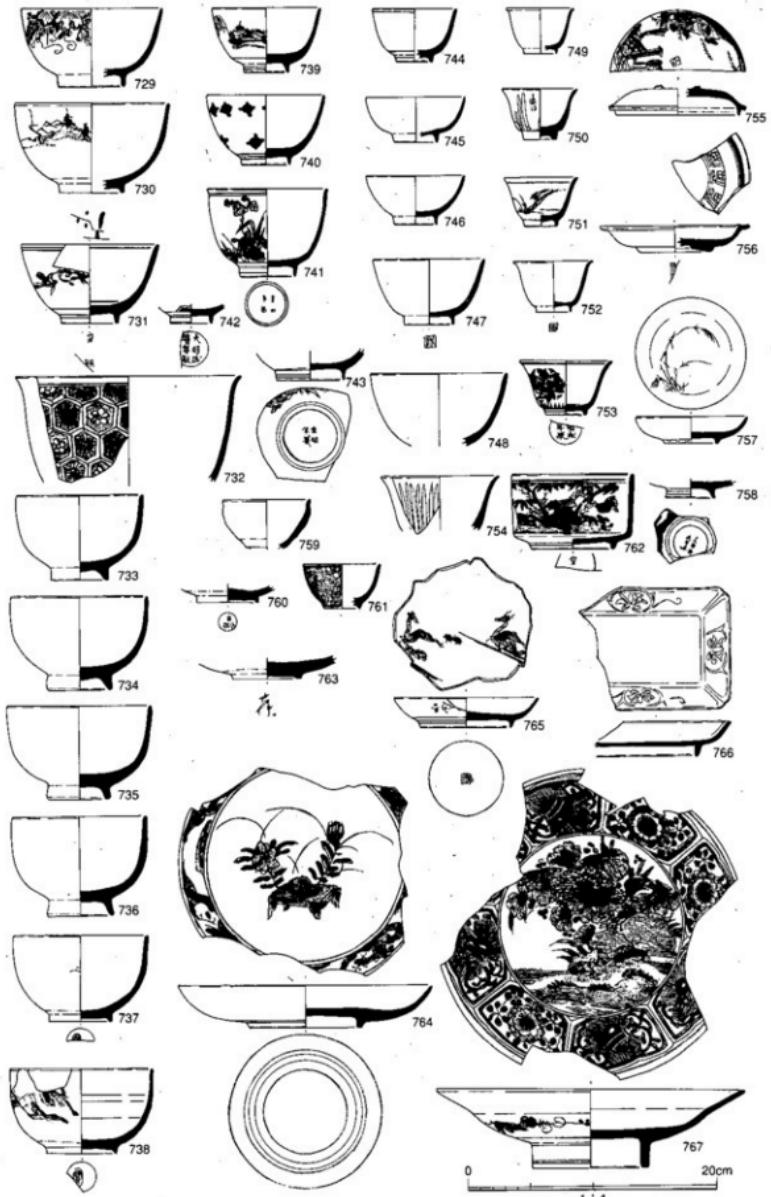


図41 池状遺構 SK2108出土遺物

786は色絵皿であるが、焼成不良で発色していない。口銹が施されている。

787・789は褐色の硬質胎土であり、口縁部を外側に折り返し玉縁状を呈する。787は口縁部に縁釉、胴部に白泥による刷毛目文様を施す。腰部の張り出し屈曲は強い。789は胴部に鉄釉を掛け刷毛目文様を施す。腰部の張り出し屈曲は弱い。

789は小壺で灰白色の硬質胎土に鉄釉を塗り、体部外面に黒褐色の釉を掛け流す。高台無釉である。

790は染付で鶴首形の口頭部で口縁部が外反する。頭部に花唐草文が施されている。

791は灰白色の硬質胎土に鉄釉を掛け、高台無釉である。小壺の口縁部下に穿孔を施し注口を貼付ける。792は灰白色の硬質胎土に鉄釉を掛け、底部外面無釉である。

793は口縁部～内面に煤が付着している。803～815は回転糸切りによる底部切り離しの痕跡がある。814の口縁部には燈油痕がみられる。

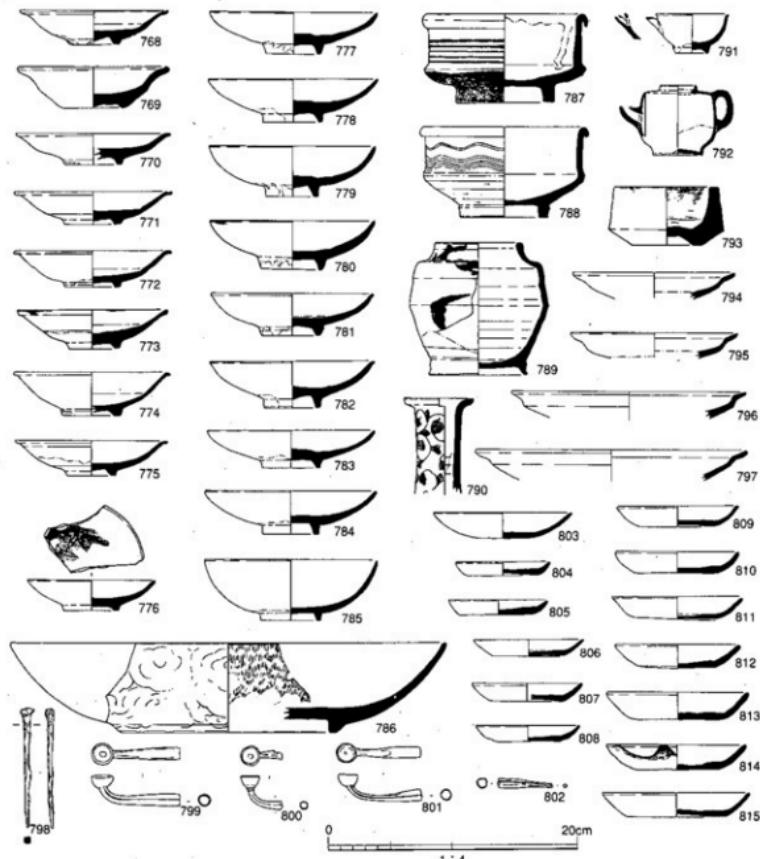


図42 池状遺構 SK2108出土遺物

816は褐色の硬質胎土に鉄軸を掛け体部外面にカキ目を施し、肩部に輪状の粘土紐を指で押し貼付けている。

817・819は口縁部内面に低い突帯が廻り、外縁帯の張り出しが強い。櫛目の上端は揃えられていない。

819は口縁部が直立し、口縁部に外耳を貼付け穿孔を施す。

820は・「酒部勘左衛門様 御用」 「上々生諸白 梶や惣右衛門」 170×37×5

821は・「<酒部勘左衛門様御用 かぢこ惣右衛門」 「<□由良浜御番物七拾まい入」

171×28×4

822は・「<酒部勘左衛門様へ」 「<米五斗 次右衛門」 184×30×5

823は・「。酒部勘左衛門様」 「。上々諸白 かぢや惣右衛門」 148×30×7

824は・「<酒部勘左衛門尉様」 「<入子鉢式組 酒部舍×」 (95)×20×3

825は・「くさかべ勘左衛門□(殿カ)」 「くいろ□ま 三斗五升 五郎兵衛」 (110)×20×4

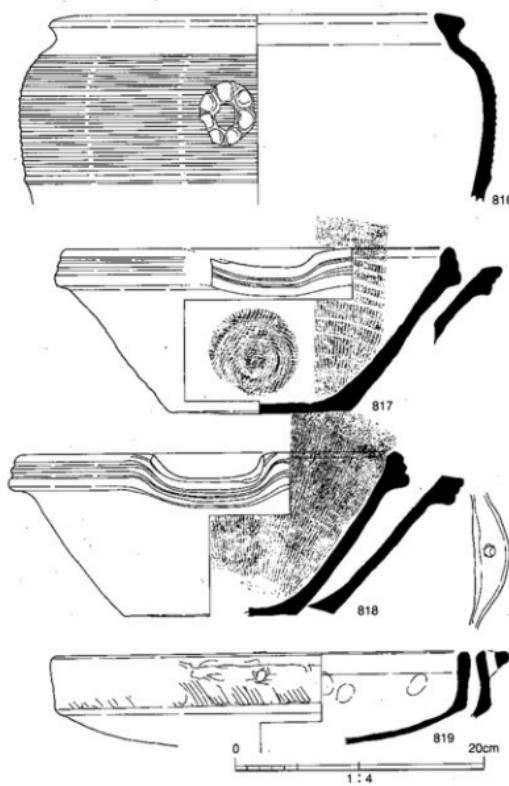


図43 池状遺構 SK2108出土遺物

826は・「<酒部勘左衛門様 佐野理兵衛」		256×37×4
827は・「<酒部舍人様 かぢこ惣右衛門」・「<上々□□ 五□」	(184)×32×4	
828は・「酒部舍人殿御内へ 伊吹五兵衛」・「干鰐□枚」	218×40×3	
829は・「<酒部舍人様」・「<米五斗 下大野村 喜左衛門」	79×25×5	
830は・「<酒部舍人□御内□ 手嶋□□門 □内より」・「<干鰐」	266×25×4	
831は・「<酒部舍人」・「<手樽壺つ」	186×27×4	
832は・「酒部舍□□□」・「のしい□」	169×32×4	
833は・「酒部舍人様」	(130)×53×4	
834は・「<酒部舍人様内 岡本□太夫□□ 」・「<か□す□」	(154)×43×4	
835は・「中ノ内 □市 総右衛門様 安兵衛」・「五斗入 安兵衛」	(170)×28×4	
836は・「酒部舍人□□ 赤沢多右衛門様 松村藤兵衛」・「太白九斤入」	225×41×5	
837は・「<□□□□様 右衛門 おりん參 は々 」・「<□□□□ いなはより □あこ式十 あ□□」	197×29×3	
838は・「米五斗 田野村 九郎右衛門」	(147)×11×2	
839は・「米五斗 田野村 六兵衛」	151×19×2	
840は・「□□□」・「大麦五斗 矢武村」	156×22×2	
841は・「平鷗□□□糸」・「拾九貫八百□□」	(119)×22×4	
842は・「大麦五斗 弥五兵衛」	(118)×25×4	
843は・「□□衛門」・「大麦五斗 黒田村」	150×18×2	
844は・「たのうら村 孫右衛門」・「大麦五斗入」	184×23×2	
845は・「孫左衛門」・「米五斗 下浦村」	135×18×2	
846は・「水仙花」・「水□」	90×48×3	
847は・「松平阿波守内× 」・「松平阿波守内×」	(149)×53×7	
848は・「中山三□ 阿呆□たわけ うつけ」・「無神月四日 □文七年」	(125)×(47)×6	
*長×幅×厚 (mm) ()付きは残存値		

木簡は荷札木簡であり形態には短冊型のもの(820・823・830)、長方形の材の一端の左右に切り込みをいたるもの(821・826・830・837)、長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ他端を尖らせたもの(822・825・829)、長方形の材の一端を尖らせたもの(838~840・843~845)などがある。記載内容は送り荷の品名と送り人と受取人の名前が書かれ、送り荷には「生諸白」「諸白」「干鰐」「太白」「米」「麥」、送り人の名前には「楳や惣右衛門」「かぢこ惣右衛門」「伊吹五兵衛」「佐野理兵衛」「松村藤兵衛」「喜左衛門」「安兵衛」「孫右衛門」「孫左衛門」「次右衛門」「五郎兵衛」「九郎右衛門」「六兵衛」「弥五兵衛」「は々」、受取人の名前には「酒部勘左衛門」「酒部舍人」「赤沢多右衛門」「おりん」が読み取れる。

「生諸白」「諸白」「太白」を扱う「楳や惣右衛門」「かぢこ惣右衛門」「松村藤兵衛」は酒部家の当主や酒部家内の武士に対する敬称に「様」を使用していることや「由良浜御番」に関係していることから物資の調達に動いた商人と考えられる。

「干鰐」を送る「伊吹五兵衛」は、敬称に「殿」を使用していることから武士間での物のやりとりを示すものである。酒部家2代酒部舍人の妻は鳥取藩士伊吹源太左衛門の娘であり、「干鰐」は鳥取藩の時産品のひとつであったことから、婚姻関係のある伊吹家から酒部家に対する贈答品を示すものと考えられる。また、いなのは々からおりんに送られた「□あこ式十」も塩干物の可能性がある。

「米」「大麦」を送る「下大野村」(阿南市~羽ノ浦町)、「田野村」(小松島市)、「黒田村」(徳島

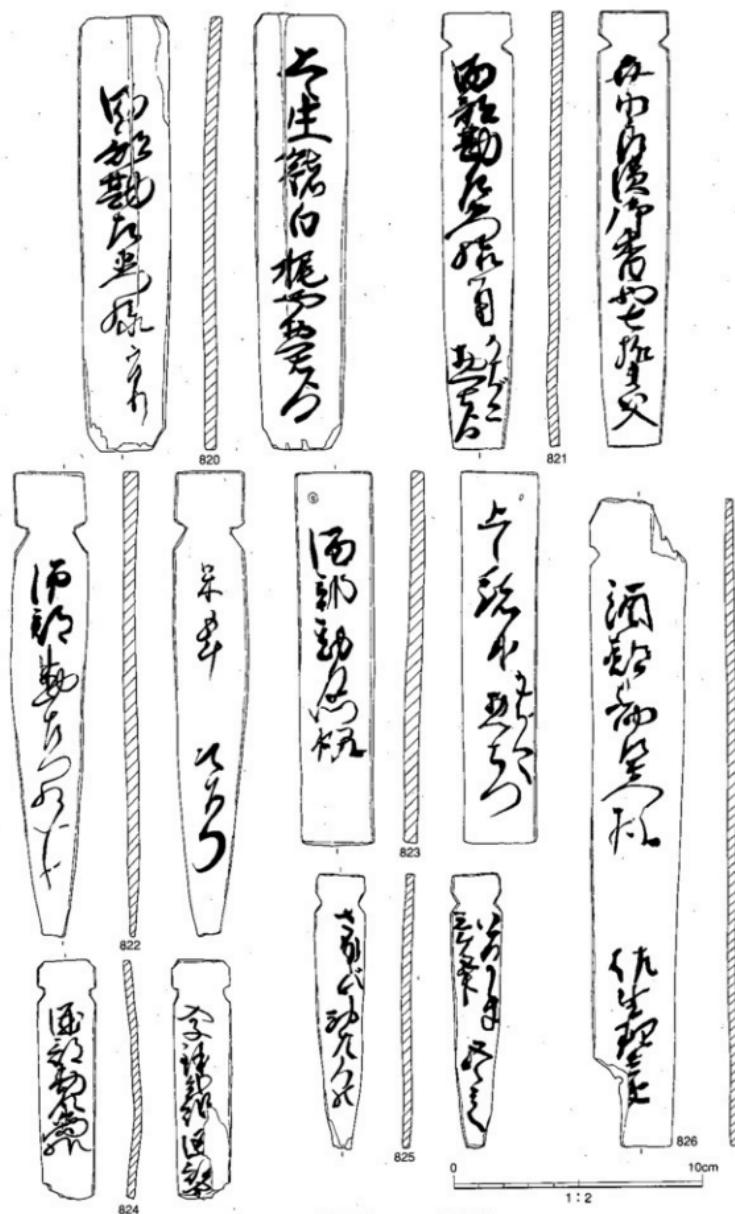


図44 池状遺構 SK2108出土遺物



図45 池状遺構 SK2108出土遺物

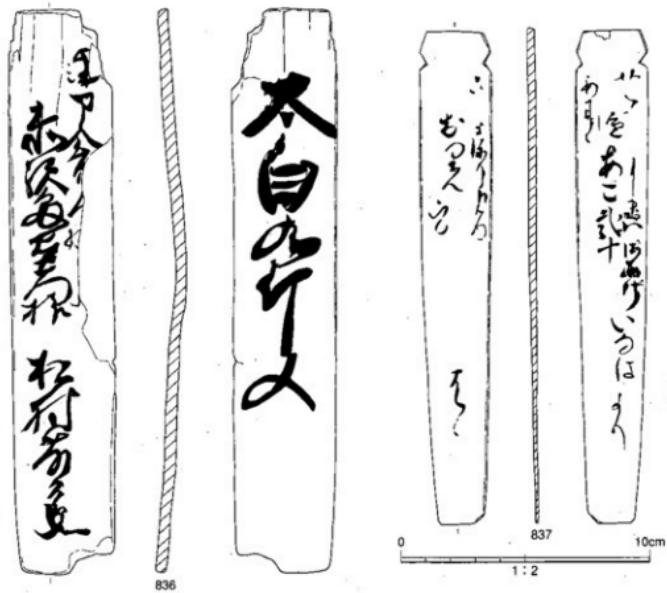


図46 池状遺構 SK2108出土遺物

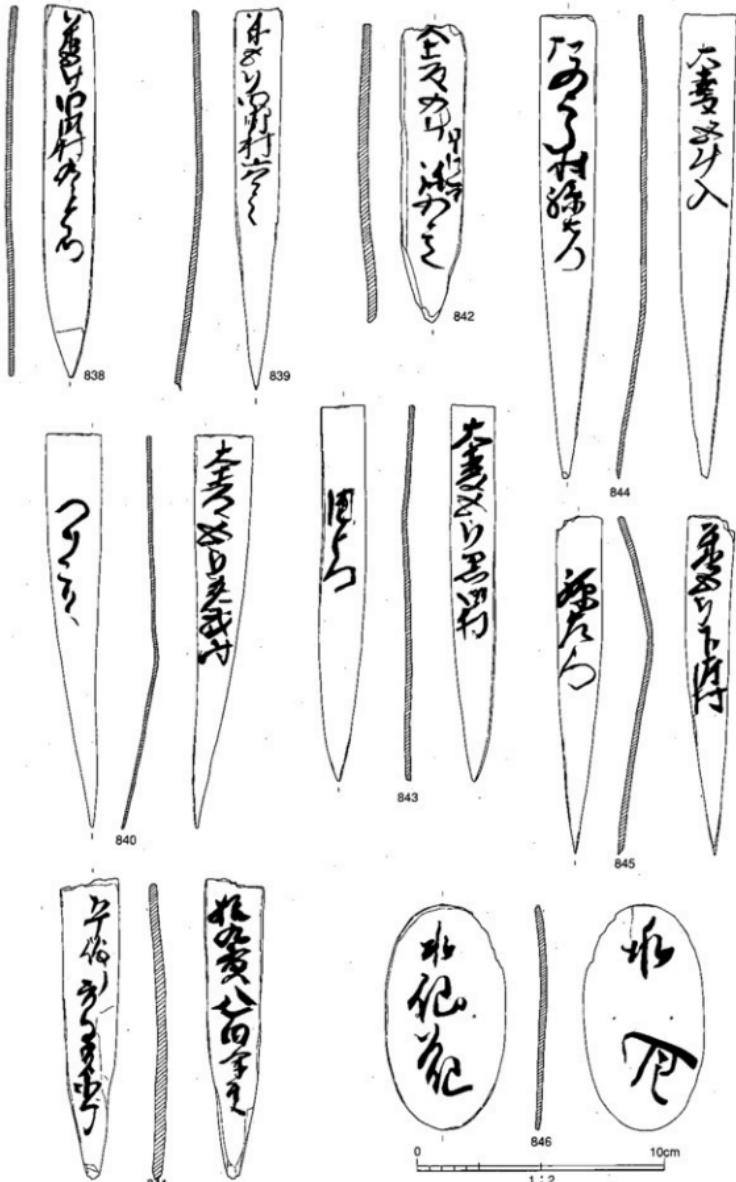


図47 池状遺構 SK2108出土遺物



図48 池状遺構 SK2108出土遺物

市国府町)、「矢武村」(板野町)、「下浦村」(石井町)は酒部家の所領地であり、領主へ年貢として納めていることを示し、徳島藩の統治制度である地方知行を裏付けている。なお、「米五斗」「大麦五斗」の「五斗」は基本単位の数量(一俵)である。

送り荷は酒部家の当主だけでなく酒部家の俸給を受ける「手嶋□□門」「岡本□太夫□□」「おりん」へも送られている。また、「松平阿波守内」は阿波国外から品物を送る場合の標記方法の一例を示すと考えられる。

紀年銘資料として「無神月四日 □文七年」の札がある。一文字欠損するが、他の木簡には酒部家初代の「酒部勘左衛門」(寛永17年召出)や二代目以降が度々使用する「酒部舍人」の名前が見られること、さらに出土陶磁器が示す17世紀後半の年代観から、「□文七年」を「寛文七年」(1667)と読みとることができる。また、「松平阿波守」については紀年銘資料ではないが、年代推定の資料となる。蜂須賀家が使用する官途については「阿波守」が通常であるが、5代綱矩は延宝6(1678)年12月、続く6代宗員は享保13(1728)年1月に「阿波守」を任せられていることから、先述した

「□文七年」や出土遺物の年代観を考慮すると、今回の「阿波守」については延宝6年を下限とするものと考えられる¹⁰⁾。

このように、今回出土した木簡は17世紀後半の徳島城下町における武家社会の物流流通の具代的な様相を知る観点から非常に興味深い資料である。

849・850は黒色漆塗で、850は蒔絵（金色）による絵文様が施される。

852は調度品の部材で漆塗であり、雲形材と板材に嵌め込んでいる。雲形材の先端には打ち出し模様を施した銅製金具を取り付け、金具は下方から釘止めされている。

853は肩で屈曲し内外面に黒色漆を塗る。854～856は外面黒色、内面赤色の漆を塗る。

858は内外面赤色漆を塗り、外面に黒漆による家紋を三方に配す。

859は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に赤漆で三方に家紋を配す。

860は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）による家紋を三方に配す。

861は内外面に黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）による桜花と環状（連結）文を施す。

862は肩部で屈曲し内外面に黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）による環状（連結）文を施す。

864は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に赤色漆で三方に家紋を配す。

865は内外面赤色漆を塗り、外面に黒色漆で三方に家紋を配す。

866は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）で三方に家紋を配す。

867は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に蒔絵（金色）で三方に家紋を配す。

870は内外面に赤色漆を塗り、外面に黒漆による根付きの芦文様を施す。

871は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に赤漆で三方に家紋を配す。

872は内外面に赤色漆を塗り、外面に黒色漆で線描きによる鶴・松を描く。

873は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）で鶴・亀・松を描く。

874は内面赤色、外面黒色漆を塗り、外面に蒔絵（変色）で文様を施す。

875は棕櫚製で5条の縄の編み込みで束ねられている。

876の先部には煤が付着している。

881は方円形で下方に開放する刃形をもつ。刃の上位に木釘が1箇所残存する。

882は楕円形と方円形を組み合わせ下方に開放する刃形をもつ。刃の上端面に相欠継の細工を施し、上端面には釘穴が2箇所みられる。

883は楕円形で下方に開放する刃形をもつ。刃の上位に1箇所、上端面に1箇所木釘が残存する。884・885はアーチ形の刃形をもち、884は上端面、885は下端面に相欠継の細工を施す。884の上端面に2箇所、885の上端面に3箇所の木釘が残存する。

886は方円形で下方に開放する刃形をもつ。刃の上端面に相欠継の細工を施し、上端面には釘穴が2箇所残存する。

887は漆塗の湯桶の把手で、木釘および釘穴がみられる。

892・893は角型の無眼下駄で裏面横緒孔部に通し小柄、裏面前緒孔部に方形枘を造り出し紐留めとする。

894は角型の連歯下駄である。前歯・後歯ともに台部まで垂直に立ち上がる。横緒孔は後歯の後方に位置する。前緒孔の両脇前方に足指の指頭圧痕がある。

895は丸型の露卯下駄である。枘穴数は前3、後3である。横緒穴は後歯の前方に位置する。前緒穴の両脇前方に足指の指頭圧痕、後歯には砂利が付着していた痕跡がある。

896は柄が竹製である。

897～916の箸は形態が寸胴形のもの（897～901）、一端を尖らした片口のもの（902～904）、両端を削り込んだ両口のもの（905～916）があり、さらに各形態において断面径5mmを基準に太細で大別される。897・915・916の先端は炭化している。

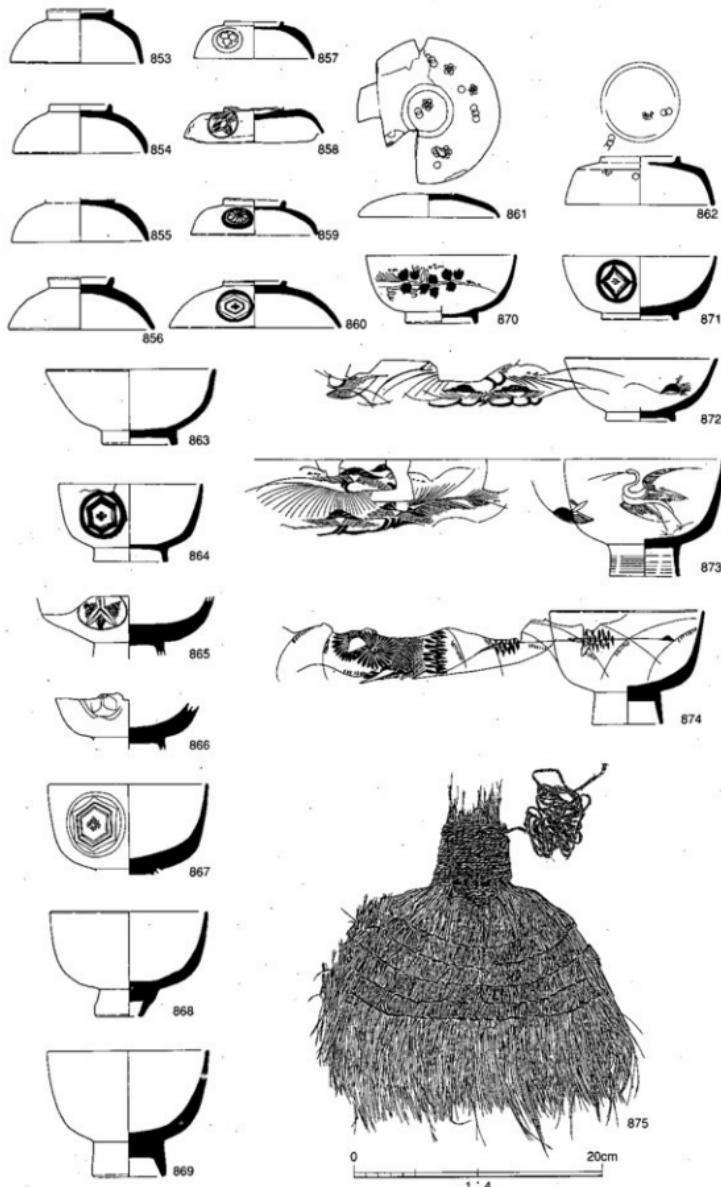


図49 池状遺構 SK2108出土遺物

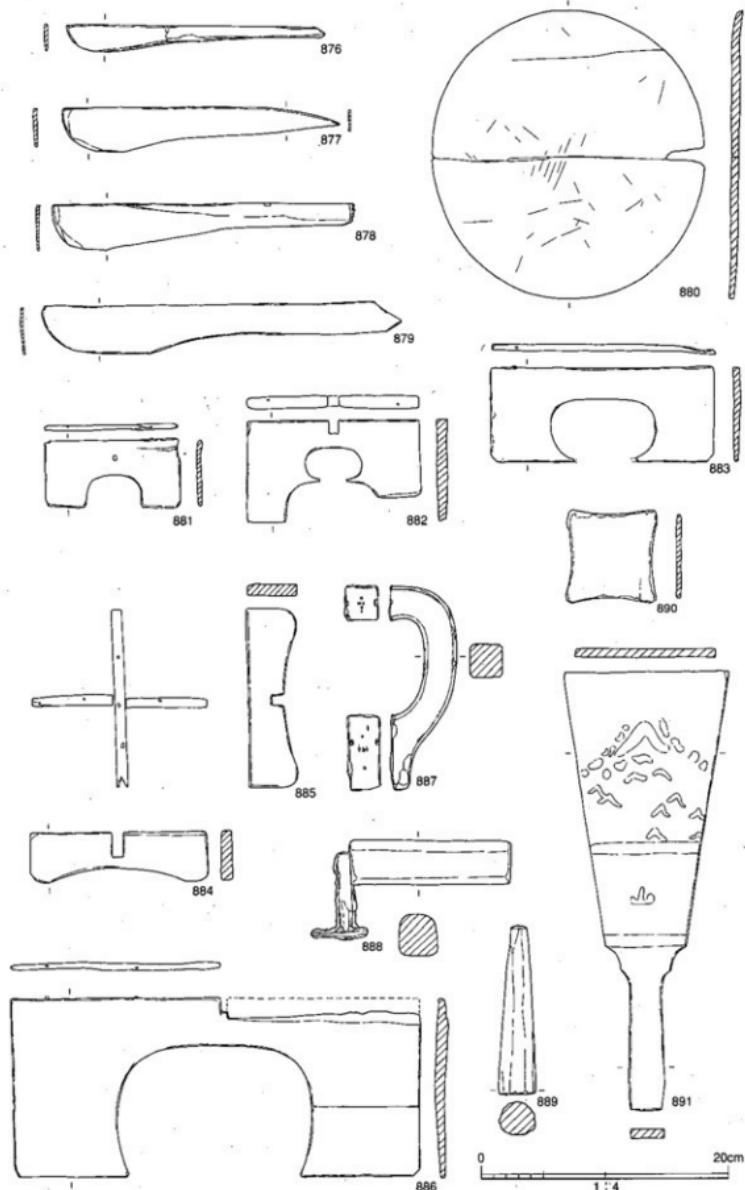


图50 池状遗構 SK2108出土遺物

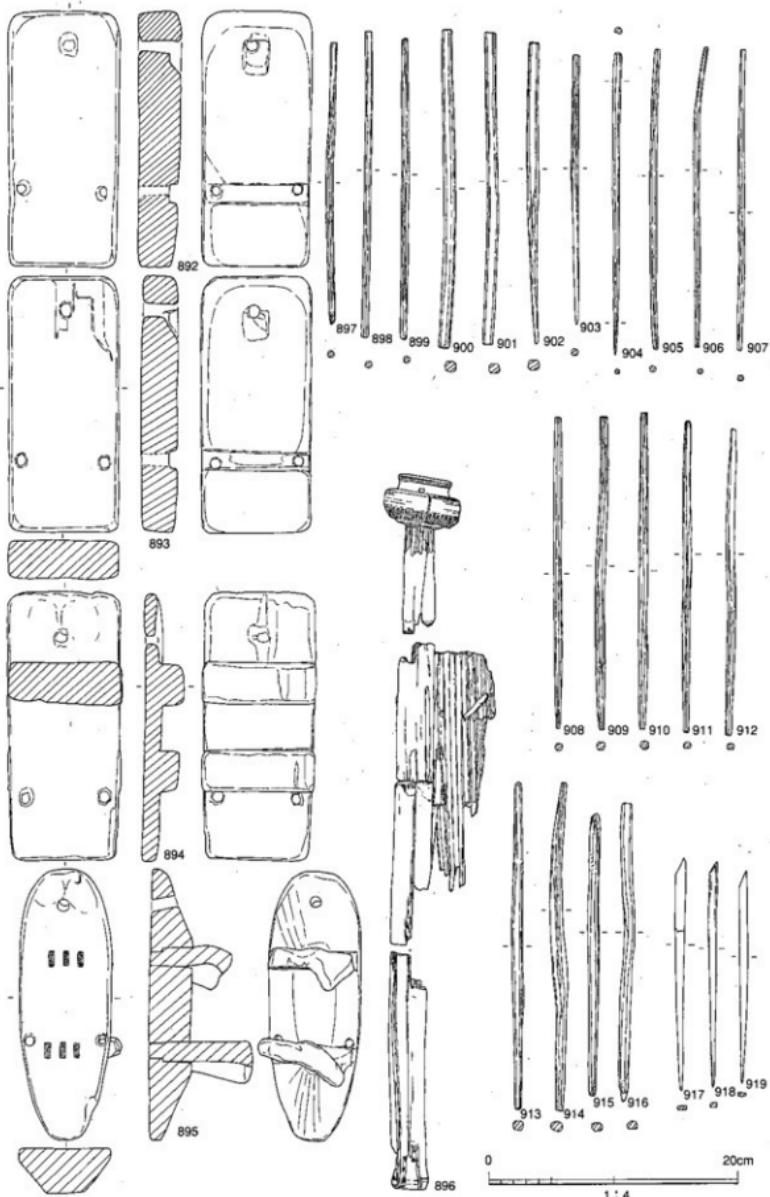


図51 池状遺構 SK2108出土遺物

10) 土壌 SK2072・2073・2076 (図4)

寺澤家屋敷端、第2層上面において検出した浅いすり鉢状の凹地である。いずれも調査地外に広がり造構の性格については不明である。

以下、出土遺物の概要を記す。

SK2072 (図52、図版75)

肥前系陶器皿920～925、中国産磁器皿926、土師質皿927～929、瀬戸美濃系陶器皿930、陶器甕931がある。

920～923は脇部が屈曲し口縁部外面～内面に灰釉を掛け高台無釉である。920～922は見込みに胎土目跡があり、923は内面に鉄絵を施す。924は型押成形で口縁部を隅入りの方形を呈する変形皿である。高台無釉で鉄絵を施す。925は口縁部が鋸状に広がり内外面に灰白色の釉を全面に掛ける。見込みに砂目跡があり、高台内には円錐状のケズリ痕がある。

926は高台が逆ハの字状を呈し、疊付無釉である。

927～929は切り離しが回転糸切りであり、口縁部に燈油痕がみられる。

930は黄白色の軟質胎土に白色釉を掛け、口縁部は外反後、上方に立ち上げる。

931は体部から短く立ち上がる口頭部をもち、体部外面に透明釉を掛ける。

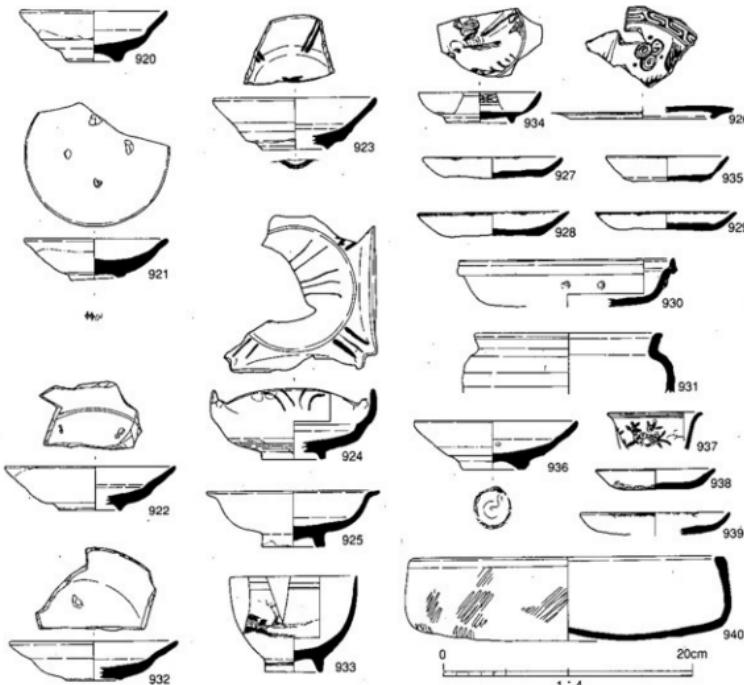


図52 土壌 SK2072 (920～931)、2073 (932～935)、2076 (936～940) 出土遺物

SK2073 (図52、図版75)

肥前系陶器皿932、磁器碗933、皿934、土師質皿935がある。

932は胴部で屈曲し内外面に灰釉を掛けた。見込みに胎土目跡があり、口縁部に灯油痕がみられる。

933は染付で疊付無釉、離れ砂が付着し、高台内に円錐状のケズリ痕がある。

934は疊付無釉で見込みにトンボを描く。

935は底部切り離しが回転糸切りで口縁部に燈油痕がある。

SK2076 (図52、図版75)

肥前系陶器皿936、磁器坏937、土師器皿938・939、培培940がある。

936は胴部が屈曲し口縁部外面～内面に灰釉を掛け、高台無釉、見込みに胎土目跡がある。高台内に円錐状のケズリ痕がある。

938・939は口縁部に燈油痕がある。

940は口縁部が直立し体部外面にタタキが施される。

ii) 第2層下面・第3層上面検出遺構と遺物 (図53、図版15)

第2層下面・第3層上面において貝塚SQ3001を確認している。貝塚は第2層下面～第3層中に非連続で挟在、また、第3層上面で検出した溝状遺構SD3001にも堆積していることから、第3層の盛土形成のある段階から堆積が始まり、第2層による整地が行われる直前までの堆積と考えられる。

以下、出土遺物の概要を記す。

1) 貝塚 SQ3001 (表1・図54、図版75・77～80)

出土遺物には瀬戸美濃系陶器碗941・942、土師質皿943～946、釜947・949・950・952、鍋948、瓦質釜952、自然遺物(貝類¹・動物遺存体)がある。

941・942は天目碗で内外面に鉄釉を掛け、高台無釉である。

943・944は口縁部が大きく外反する皿である。

947は口縁部が内傾し、口縁部成形時の粘土紐接合に伴うナデにより鈎状の突帯が廻る。体部外面にタタキが施され煤が付着している。

948は口縁部がくの字状に屈曲し体部外面にタタキが施され、煤が付着している。

949・950は口縁部成形時の粘土紐接合に伴うナデにより口縁部下角に鈎状に突出する。

951は口縁部下に鈎を貼付ける。鈎下面～体部に煤が付着している。

	ハマグリ	シジミ	カキ	オキシジミ	オキアサリ	ハイガイ	アサリ	ワレスガイ	カガミガイ	イタヤガイ	ウチムラサキ	アトヘナタリ	ヘナタリ
I	22,945	31,920	25	112	925	85							
II	69,852	5,692	27		951	158							10
III-a	300,100	130,474	4,321	14,880	9,852	73,110	290	22	50	7	2	267	5
III-b	54,432	46,921	412	1,950	3,530	9,844	18						15
III小計	354,532	177,395	4,733	16,830	13,382	82,954	308	22	50	7	2	282	9
IV-a	5,561	28,071	12			125							
IV-b	258,970	32,794	149	104	565	2,101	8						3
IV-c	2,263	8,461	12			44							14
IV-d	11,590	33,790	110	65	214	1,900							2
IV-e	4,470	4,396				34	20						2
IV-f	4,335	7,384		51	8								
IV小計	288,189	114,896	283	169	864	4,198	8						16
合計	735,518	329,903	5,068	17,111	16,122	87,395	316	22	50	7	2	308	14

表1 貝塚SQ3001出土貝類重量表(1) (単位:g)

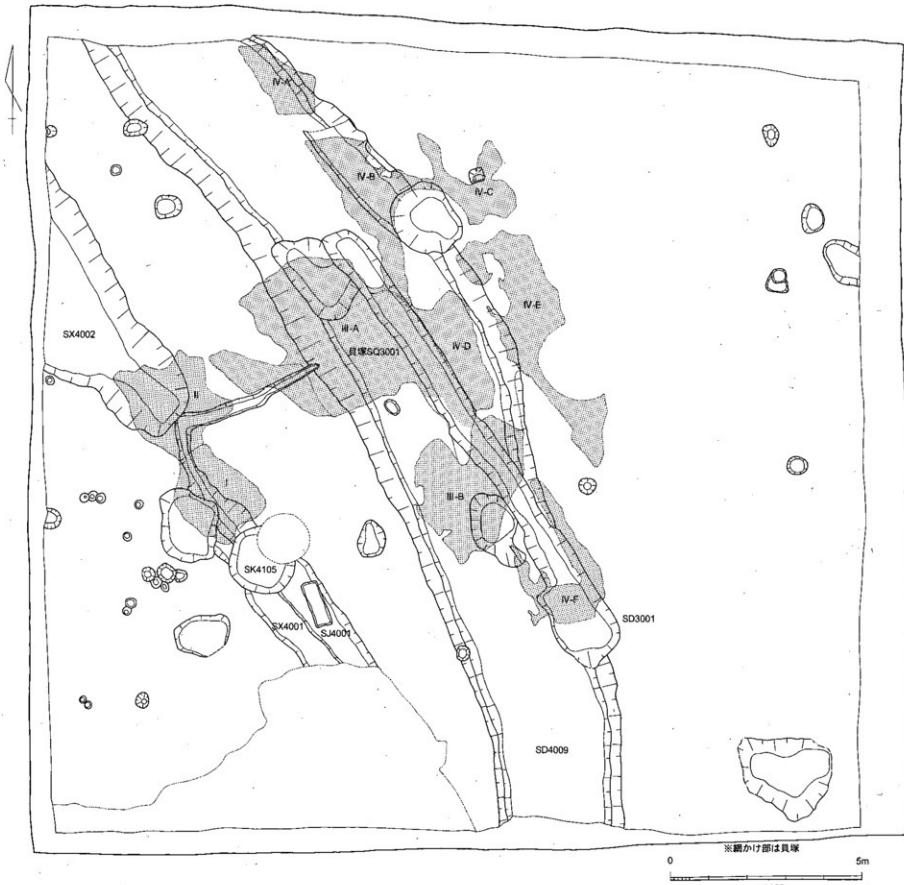


図53 第2層下面・第3層上面および第4層上面検出遺構

	ウミニナ	イボウミニナ	トコロイナ	サザエ	テングニシ	カワアイ	アラムシロ	カワザンショウ	バイ	ツメタガイ	ニッコウガイ	オオタニシ
I						4	1	1				
II	2	2	9									
III-a	2		72	45		17			8	3		2
III-b			47		34						10	
III小計	2	2	119	45	34	17			8	3	10	2
IV-a												
IV-b			13			3						
IV-c												
IV-d	2		10			2						
IV-e												
IV-f												
IV小計	2		23			5						
合計	6	4	151	45	34	26	1	1	8	3	10	2

表2 貝塚 SQ3001出土貝類重量表(2) (単位:g)

952は内弯する口縁部に鉢を貼付け、体部外面にタタキを施し、煤が付着している。

出土遺物に中世後期の様相がみられることから、天正13(1585)年の蜂須賀の阿波国入府直前後の頃に形成された貝塚と考えられる。

iii) 第4層上面検出遺構と遺物 (図53、図版16・17)

土壙 SK4105、溝 SD4009、土壙墓 SJ4001の他、不明遺構 SX4001・4002を確認している。溝 SD4009は幅3.4~5m、深さ90cmを測り、断面形が逆台形を呈する大溝である。SD4009以西に土壙や土壙墓などの遺構が存在することから、生活領域の端を示す溝とも考えられる。

また、土壙墓 SJ4001は長辺1.2m、短辺40cm、深さ70cmを測り、平面形が長方形を呈する。埋葬は体を左に若干傾け、腕は両肘で屈曲し両手を組み合わせ、足は両膝を屈曲させて行う。頭部近くに土師質皿1枚を土壙壁面に立て置く。

以下、出土遺物の概要を記す。

1) 土壙 SK4105 (図54、図版76)

肥前系陶器皿954・955、焼塙蓋953、土師質釜956がある。

954は黄白色の硬質胎土に藁灰釉を掛ける。基筒底で底部外面に円錐状のケズリ痕がある。見込みに4箇所の胎土跡がある。955は胴部が屈曲し緑灰色の釉を掛け内面に鉄絵を施す。高台無釉である。

956は口縁部成形時の粘土紐接合に伴うナデにより口縁部下角が鋸状に突出する。底部外面に格子タタキが施され外面に煤が付着している。

2) 溝 SD4009 (図54、図版76)

瀬戸美濃系陶器碗957、土師質釜958・960、肥前擂鉢959がある。

957は天目碗で内外面に鉄釉を掛け、高台無釉である。

958は内傾する口縁部に鉢を貼付け、体部外面にタタキ、体部内面にハケが施される。鉢下部~体部に煤が付着している。

959は口縁端面にナデが施され端部が肥厚氣味で口縁部上角と下角がわずかに尖る。擂目は4条程度である。

960は外反する口縁部下に鉢を貼付ける。鉢下面~体部外面に煤が付着している。

3) 不明遺構 SX4001 (図54、図版76)

肥前擂鉢962がある。

962は口縁端部にナデが施され口縁部上方へ拡張し下角の垂下は小さい。擂目は7条である。

4) 不明遺構 SX4002 (図54、図版76)

土師質釜961がある。

961は内傾する口縁部に鉢を貼付ける。体部外面にタタキが施される。

5) 土壙墓 SJ4001 (図54、図版75)

土師質皿963がある。963は底部外面に板状圧痕がみられる。

SK4105には肥前系陶器がみられるが、SD4009・SX4001の備前擂鉢や土師質釜は中世後期の様相であり蜂須賀阿波國入府以前に遡る中世遺跡の存在が想定される。

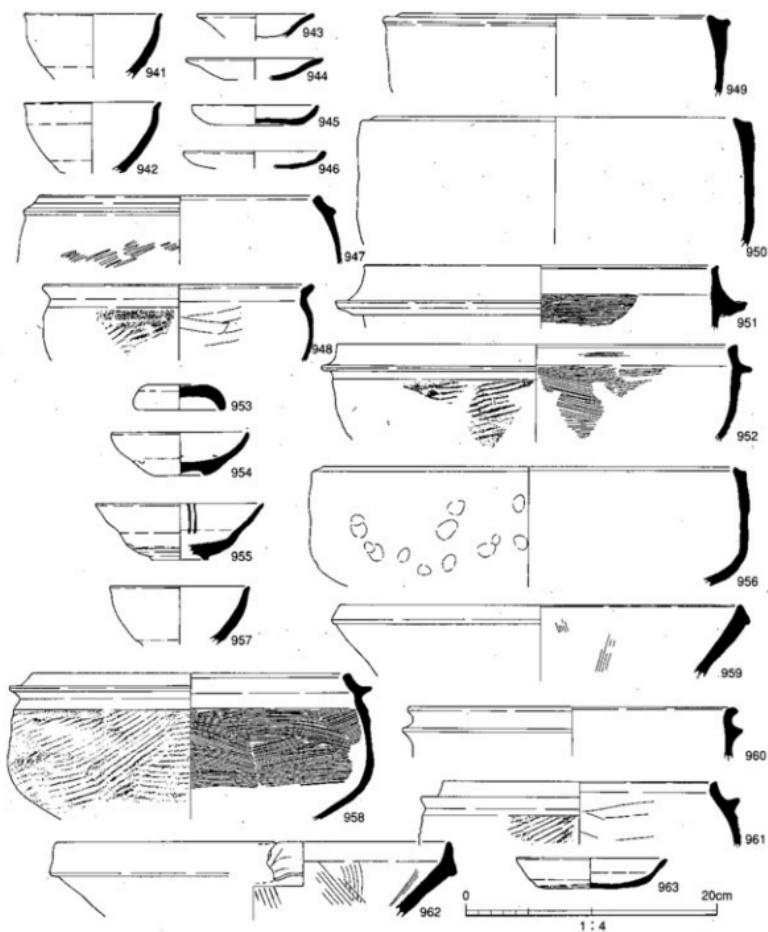


図54 貝塚 SQ3001 (941~952)、土壙 SK4105 (953~956)、溝 SD4009 (957~960)、
不明遺構 SX4001 (962)、4002 (961)、土壙墓 SJ4001 (963) 出土遺物

第3節 調査成果のまとめ

これまでに調査成果の概略を示してきたが、第1・2層上面で検出した遺構・遺物は17~19世紀の徳島城下町における武家屋敷で生活する人々の姿を浮き彫りにしてくれるものである。また、調査では天正13(1585)年の蜂須賀の阿波国入府以前の遺構・遺物を確認し、当地の歴史的変遷の一端が明らかとされた。徳島城下町跡で近世以前にまで遡る遺構・遺物の確認は最初の事例である。

層序において概要したように城山東側に位置する調査地周辺では河成堆積の良好な進行に伴い、中世後期には徳島城以前に存在したとされる中世城郭「渭津城」関連の生活領域が広がっていたものと考えられる。溝SD4009は弧状を呈し、その規模から生活領域の東限を示すものかもしれない。蜂須賀入府直前にはSD4009は埋め戻され、その最終過程で貝塚が形成される。調査地に近接して縄文~弥生時代の城山の貝塚が位置するが、今回の発見は市内では最も新しい時代の貝塚である。眉山北麓に所在する縄文時代晚期~弥生時代前期の三谷遺跡の貝塚において出土した貝類の組成との比較において今回アサリが確認されている点に差異がみられるが、組成に大きな変化はみられない。

蜂須賀入府以降、武家屋敷地の変遷がみられ、特に屋敷界の状況は明解である。溝SD2008は城下町建設当初に設けられた屋敷界の溝である。溝の規模や埋土の状況から、中世的な土地区画溝としての機能が引き継がれているものと考えられる。この区画溝は17世紀末葉には人為的に埋め戻され、18世紀には溝と同位置に掘立柱塀SA2001が設けられ、溝に代わり屋敷界の機能を果たす。この後、18世紀中葉、酒部家屋敷内には塀SA2001に並行して溝SD2007が造られる。SD2007は小規模の素掘溝であり区画の意味合いよりも何らかの構造物の付属溝と考えられるが、構造物の痕跡はみられない。ただ、近接して漆喰の塗土が散在していることから土塀が存在した可能性がある。この段階において酒部・寺澤両屋敷間には幅2.5mの緩衝帯とも言うべき空間が誕生する。この空間は以後も継承され、19世紀にはSD1002・1003の2条の石組溝が造られる。この両溝も規模・埋土の状況から、区画溝としての性格よりも何らかの構造物に伴う付属溝と考えられる。

現在の徳島市街地は近世の町割りを基本的に継承しているが、かつて屋敷界であった場所には道路が設けられたり、また、路地として現在も使用されている箇所がみられる^④。考えられることは、18世紀中葉以降、城下町に配置された幹線道路以外に屋敷間を抜ける小道としての路地^⑤が屋敷界を中心に設けられたということである。幹線道路にのみ区画された武家屋敷が建ち並ぶ城下町での生活に、路地の果たす利便性は大きかったのかもしれない。

徳島城下町跡の屋敷界における2条溝の機能については、18世紀の吉野川の新川掘り抜きによる城下町への出水対策に求めたり^⑥、また、18世紀以降に屋敷溝が巨大化する理由を10代藩主蜂須賀重喜の藩政改革としての大規模公共工事に求める見解^⑦があるが、今回、2条溝の出現には路地の誕生との係わりが強く考えられ、前二者のいずれの見解にもあてはまらない。ただ「2条溝=路地形成」という考え方方が、城下町跡で普遍的に捉えられるかということには否定的である。屋敷界には必ず2条溝が存在するのかという問題や機能については、城下町全般として一律的に捉えることはできず、城下町の島ごとあるいは地区ごと、さらには各屋敷間で事情は異なるものと考えられる。屋敷界の変遷が明解である調査事例を蓄積させる必要がある^⑧。

出土遺物については、陶磁器・土器類について時期決定に係わる遺構一括資料を掲載したが、そのほとんどが廃棄土壌である。廃棄行為が同場所で繰り返し行われるという性格上、取り上げ時の混在を全く払拭することは困難であるが、今回提示した資料は、池状遺構SK2108の紀年銘木簡との共伴資料をはじめ、今後、城下町跡の調査における出土遺物の編年の基礎資料になると考えられる。

(註)

- (1) 出土木簡については、根津寿夫氏より御教示いただいた。

根津寿夫「徳島藩中老酒部家出土の荷札木簡について」『論集 徳島の考古学』2002において論及されているのを引用した。

- (2) 貝類については、徳島県立博物館中尾賢一氏より御教示いただいた。

- (3) 勝浦康守「徳島城下町跡」「徳島市文化財だより」2001

安政年間の御山下島分絵図と現在の市街地図を照合すれば、旧屋敷界部に道路が敷設されている箇所がみられる。近代以降、道路が新設あるいは改良される際、やはり前身となる小道の存在が考えられる。それが近世に形成された路地と考える。

- (4) 小川ゆみ「IV 城下町変遷図」根津寿夫・平井松午編『徳島城下絵図 図録』2000

城下町跡における路地形成については小川ゆみ氏の指摘がある。城下町絵図の検討において、18世紀後半、出来島地区において山田織部屋敷地が割譲され細分化されたことにより路地が形成されたとしている。土地割譲という契機を踏むものであり、現在の宅地分譲地における共用道路としての路地である。今回の場合は土地割譲に伴うものではないが、屋敷界において路地を形成する要因と関連するものであるかもしれない。

- (5) 石尾 和仁「屋敷界溝の変遷」「新蔵町1丁目企業局総合管理センター（旧知事公舎）地点－総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」1998

石尾 和仁「徳島城下町跡の考古学研究」「史窓」29号、1999

石尾 和仁「徳島城下町研究序説」2003

- (6) 橋本達也「江戸時代の城下町を発掘で探る」「川と人間－吉野川流域史」1998

橋本達也「徳島城下町の構造」徳島城下町研究会資料「京焼－消費地出土の様相－」1999

- (7) 勝浦康守「徳島城下町跡－旧動物園跡発掘調査－」徳島城下町研究会資料「四国・淡路の陶磁器－生産と流通－」2000

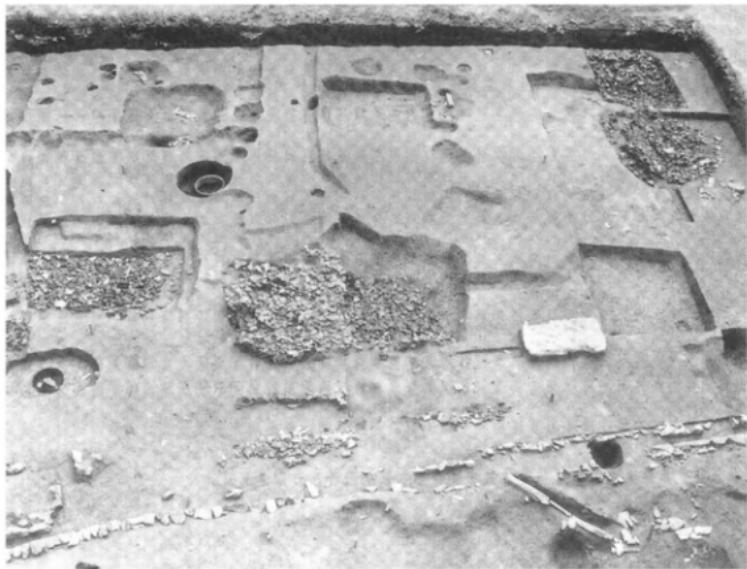
徳島城下町跡における屋敷界溝の機能を普遍的に捉えることはできない。石尾氏は今回の調査で確認した屋敷界溝が、遺跡の立地上の問題、すなわち「常三島」などの周辺の島々と比較して「徳島」が高所に位置することが出水に対する意識の低さの表れによるものとしている。しかし、今回の場合、18世紀以降の屋敷界溝については出水対策であるとは、溝の規模や構造上、言い難い。

近年、「常三島」と同様、「徳島」と比高差において低位に位置する「助任前川」地区での調査(2002)がある。ここでは、18世紀以降の屋敷界溝は明確ではなく、屋敷界に必見された2条溝の存在自体に疑いがある。この調査では、屋敷地内の家屋部に盛土を施すことにより屋敷界周辺との高低差をもたせている。出水・排水問題を解消する方法として盛土による地上げが施されたならば、屋敷界溝の機能が変質しているかもしれない事例である。また、ここでは屋敷界における路地形成の痕跡は認められない。

写 真 圖 版



酒部家屋敷裏（土壤 SK1025～1027と溝 SD1002・1003）
(南から)



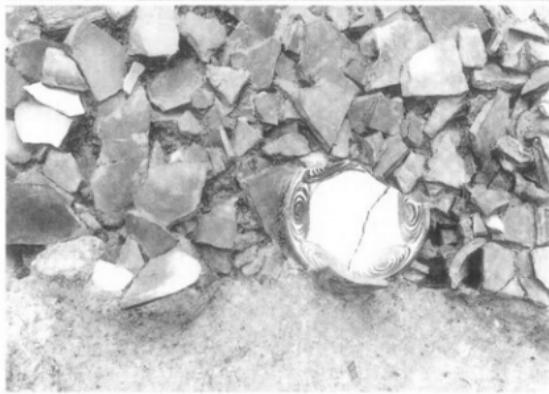
酒部家屋敷裏（土壤 SK1025～1027と溝 SD1002・1003）
(東から)



土壤SK1026遺物検出状況
(北西から)



土壤SK1027遺物検出状況
(西から)



土壤SK1027遺物検出状況
(東から)



土壤SK1025遺物検出状況
(北から)



土壤SK1025検出遺物断ち割り
(南から)



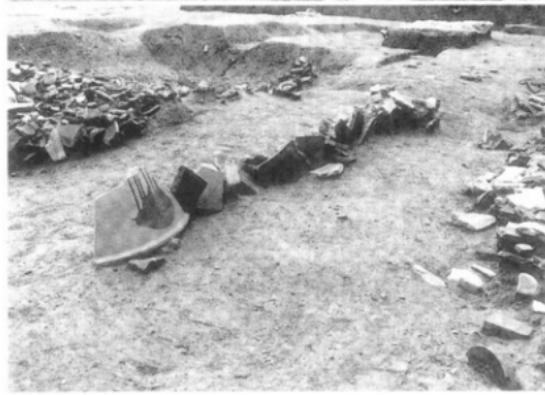
土壤SK1025遺物検出状況
(南から)



溝 SD1002石組検出状況
(北から)



溝 SD1002石組検出状況
(南西から)



溝 SD1003瓦・陶器組検出状況
(南東から)

井戸 SE1001井戸側検出状況
(南東から)



井戸 SE1001井戸側除去後
(南東から)

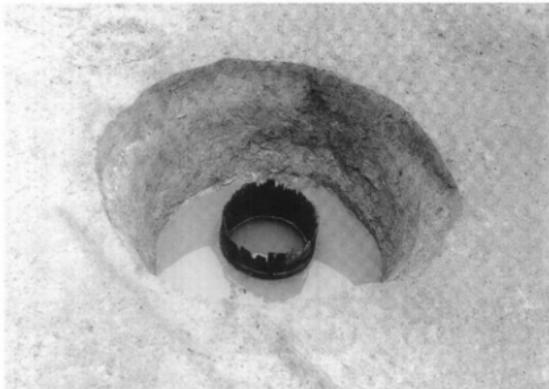


井戸 SE1001井戸側(最下段)
と竹製打込導水管
(南東から)





井戸 SE2003 (東から)



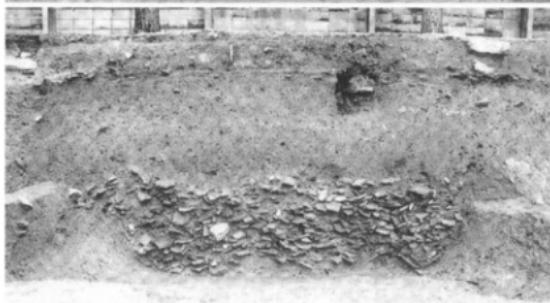
井戸 SE2004 (南西から)



井戸 SE2004掘削状況
(北東から)



土壤 SK2042-2055遺物検出状況
(西から)



土壤 SK2042断面
(北から)



土壤 SK2055断面
(北から)



土壤群（SK2084・2093・
2095）遺物検出状況
(北東から)



土壤 SK2085 (南東から)



土壤 SK2085遺物検出状況
(南から)



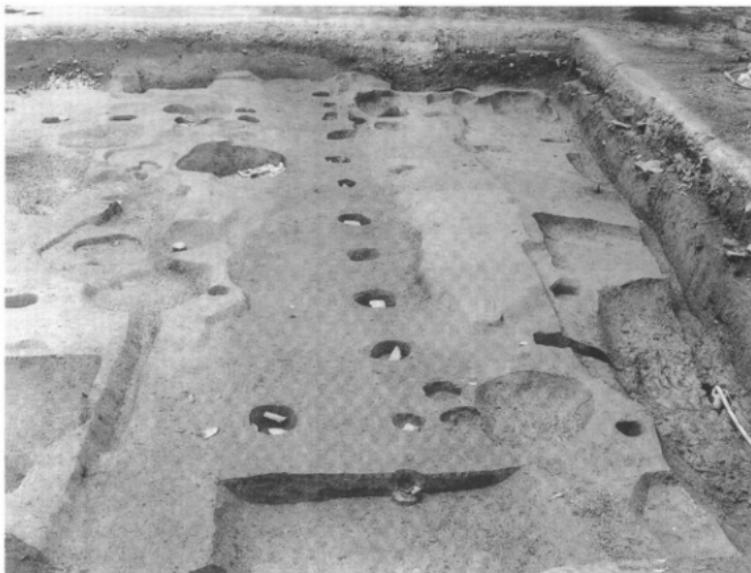
土壤SK2112-2121遺物検出状況
(東から)



土壤SK2112遺物検出状況
(北から)



土壤SK2112遺物検出状況
(西から)



掘立柱跡 SA2001

(南から)



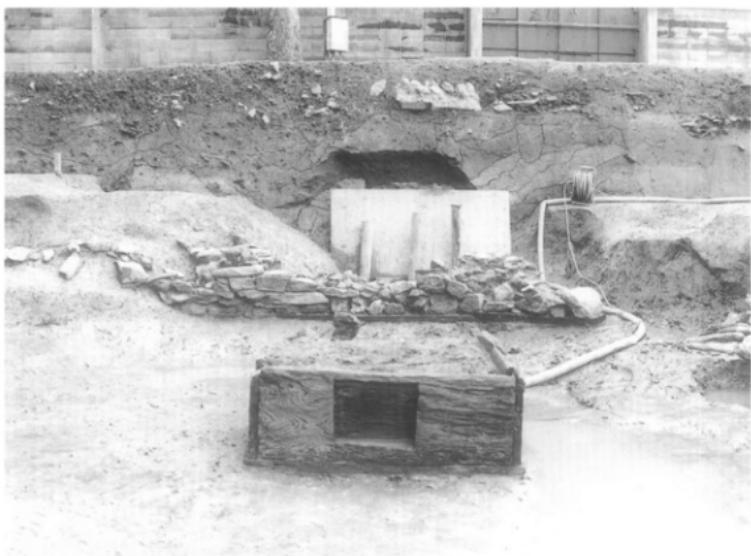
掘立柱跡 SA2002~2005

(南から)



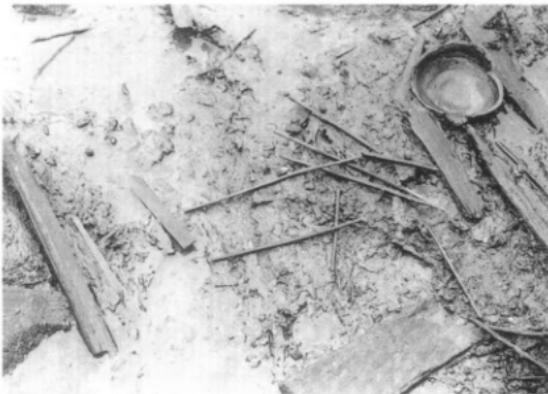
池状遺構 SK2108

(北東から)



池状遺構 SK2108枠状木枠と閉塞石組

(東から)



池状遺構 SK2108遺物検出状況
(北西から)



池状遺構 SK2108遺物検出状況
(北西から)



池状遺構 SK2108遺物検出状況
(北西から)



池状遺構 SK2108閉塞部石組
(北西から)



池状遺構 SK2108閉塞部石組
除去後
(北西から)



池状遺構 SK2108閉塞部礎板
(北西から)



池状遺構 SK2108閉塞石組
(南東から)



池状遺構 SK2108橋状木枠
(東から)



池状遺構 SK2108橋状木枠
(北から)



溝 SD2008

(南から)



貝塚 SQ3001検出状況

(南東から)



溝 SD4009

(南東から)

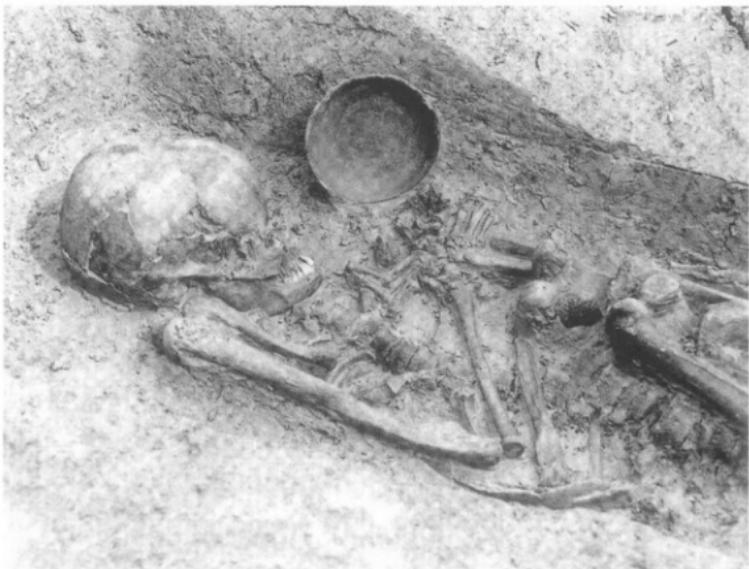


土壙墓 SJ4001埋葬人骨

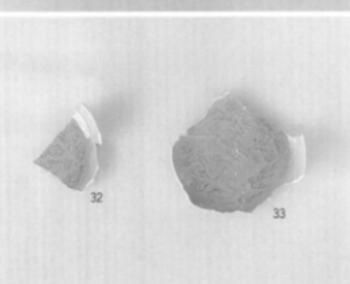
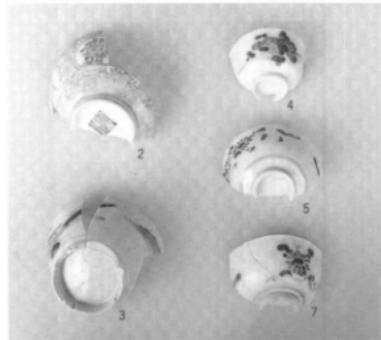
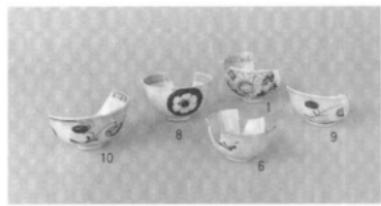
(南東から)



土壤墓 SJ4001埋葬人骨 (南東から)



土壤墓 SJ4001埋葬人骨 (南西から)



土壤 SK1001 (1~21・23~25・27)、1003 (28~31)、1004 (32・33)、1007 (34~37) 出土遺物

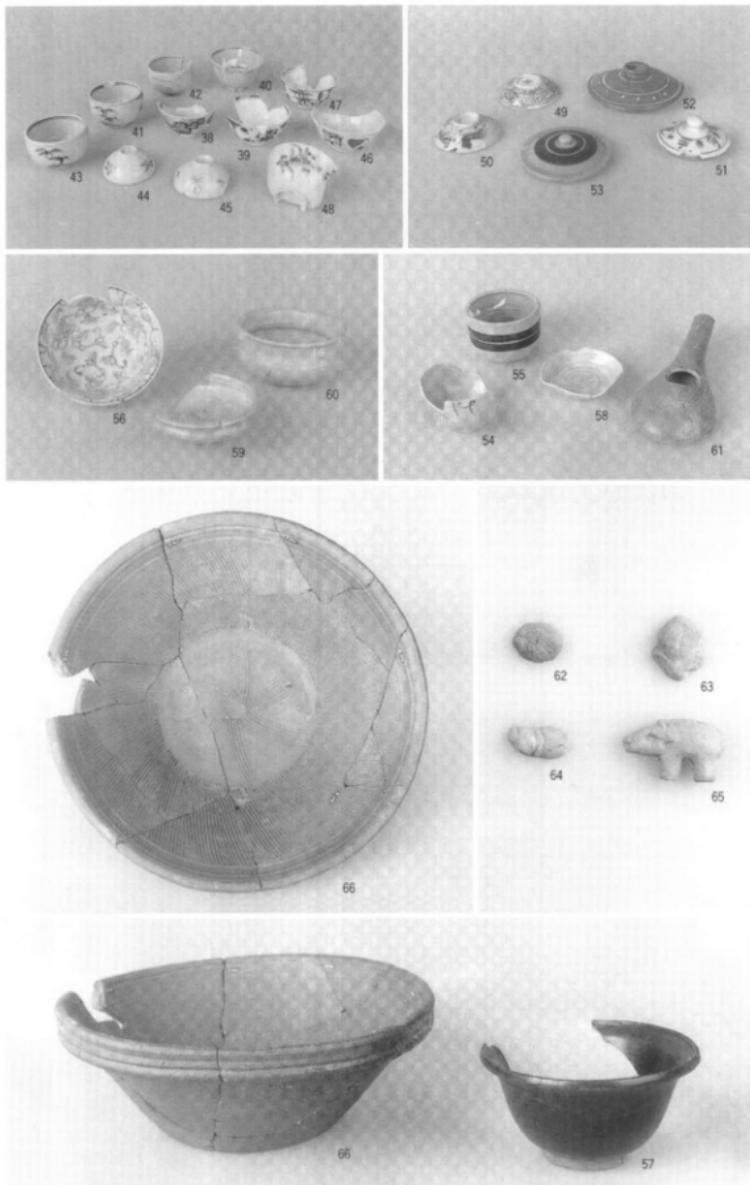


22

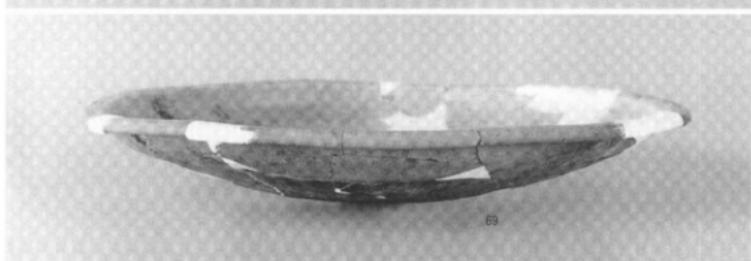


26

土壤 SK1001出土遺物



土壤 SK1025出土遺物



土壤 SK1025出土遺物

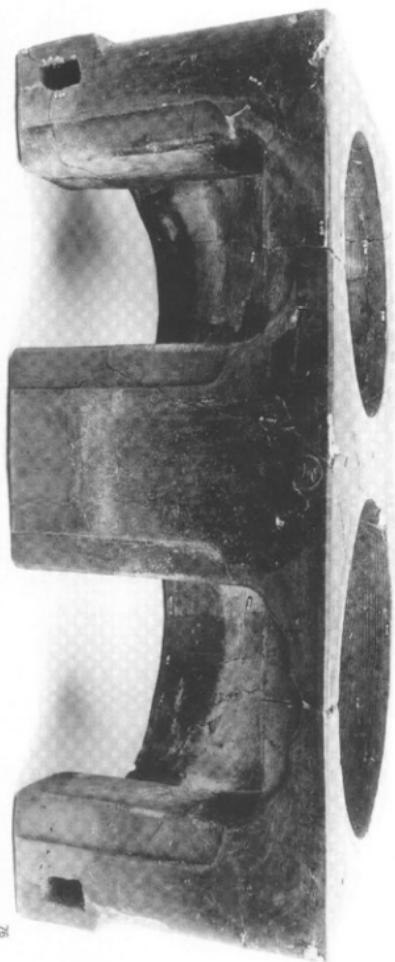


75



74

土壤 SK1025出土遺物



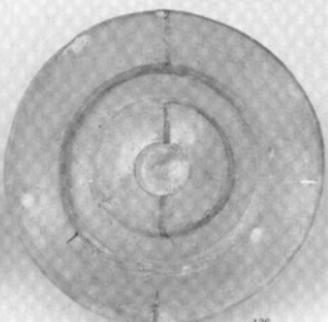
土壤 SK1025出土遗物



土壤 SK1026出土遺物



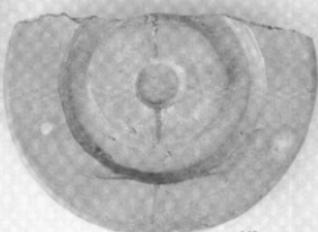
139



136



137



140



138



141

土壤 SK1026出土遺物